山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 82 集

藤島D遺跡

発掘調査報告書

2001

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

藤島（ふじしま）D遺跡

発掘調査報告書

平成13年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

第1次調査区全景（空中写真）

第2次調査Ｃ区全景（空中写真）

第2次調査Ｄ区全景（空中写真）

巻頭図版2

前：青磁坏，後：染付坏

上：壺・甕，下：皿

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した藤島Ｄ遺跡の調査成果をまとめたものです。

藤島Ｄ遺跡は山形県の北西部に位置する藤島町にあります。月山を源流とする藤島川は町内の中央部を南北に縦断し、流域に肥沃な耕地を広げ日本有数の稲作地帯なっています。また庄内平野の中心部に位置するため、古くから交通の要として発展してきた所でもあります。

この度、都市計画街路事業藤島駅笹花線の改良に伴い、工事に先立って藤島Ｄ遺跡の発掘調査を２ヶ年にわたり実施しました。

調査では、近世を主体とした遺構が確認され、これら遺構に伴って陶磁器などの多様な遺物が出土しました。出土品からは当時の人々の生活を伺うことができ、生産地や流通を探ることができると思われます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が埋蔵文化財保護の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　　言

1　本書は都市計画街路事業藤島駅笹花線に係る「藤島Ｄ遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は山形県庄内支庁建設部道路計画課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名	藤島Ｄ遺跡　　平成９年度登録	
所　在　地	山形県東田川郡藤島町中町	
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター	
受 託 期 間	平成10年４月１日～平成13年３月31日	
現 地 調 査	平成10年９月16日～平成10年10月30日（第１次調査）	
調査担当者	調査第一課長	野尻　　侃（調査主任）
	主任調査研究員	尾形　與典
	調査研究員	須賀井新人
	調査員	多田　和弘
現 地 調 査	平成11年９月13日～平成11年11月19日（第２次調査）	
調査担当者	調査第一課長	野尻　　侃
	調査研究員	須賀井新人（調査主任）
	調査員	多田　和弘

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁建設部道路計画課、山形県教育庁文化財課、藤島町教育委員会、庄内教育事務所等関係機関の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成・執筆は野尻侃・須賀井新人・多田和弘が担当した。編集は高桑弘美・犬飼透が担当し、全体については野尻が監修した。

6　委託業務は下記のとおりである。

遺構の写真測量については、株式会社シン技術コンサルに委託した。

木製品の保存処理については、帝京大学山梨文化財研究所に委託した。

7　出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＥ……井戸跡　　ＳＫ……土　坑　　ＳＤ……溝状遺構　　ＳＸ……性格不明遺構

ＳＰ……柱　穴　　ＲＰ……登録土器　　ＲＷ……登録木製品

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1)　調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2)　グリッドの南北軸は、Ｎ－21°00′－Ｅを測る。

(3)　遺構実測図は1/40・1/80・1/300縮尺で採録し、各々にスケールを付した。

(4)　遺構実測図の土層断面中において、Ｓは礫石を、Ｗは木材を表す。

(5)　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

(6)　遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/6で採録し、各々にスケールを付した。遺物図版については、1/3を基本としたが一部は任意の縮尺である。

(7)　陶器拓影図で、器表面の拓本を断面左側に、器裏面の拓本は断面右側に表した。

(8)　遺物実測図（木製品）の漆器には２種のスクリントーンを付し、濃淡により赤漆(濃)と黒漆(淡)を区別した。

(9)　遺物観察表の出土地点欄で「Ｆ」は遺構覆土内出土を示し、底面密着のものは「Ｙ」で表記した。また、計測値の（　）内数値は残存値を示している。

(10)　遺構覆土の色調の記載については、1994年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の方法と経過……1
Ⅱ　遺跡の概観
　1　地理的概要……3
　2　歴史的概要……3
Ⅲ　検出遺構
　1　遺構の分布……6
　2　第１次調査検出遺構……6
　3　第２次調査検出遺構……19
Ⅳ　出土遺物
　1　第１次調査出土遺物……26
　2　第２次調査出土遺物……41
　3　木製品……41
Ⅴ　まとめと考察……62

報告書抄録……64

表

表１　調査工程表……2
表２　藤島城変遷表……5
表３　第１次調査出土遺物観察表（１）……55
表４　第１次調査出土遺物観察表（２）……56
表５　第１次調査出土遺物観察表（３）……57
表６　第１次調査出土遺物観察表（４）……58
表７　第２次調査出土遺物観察表（５）……59
表８　第２次調査出土遺物観察表（１）……59
表９　第２次調査出土遺物観察表（２）……60
表10　第２次調査出土遺物観察表（３）……61
表11　木製品観察表……61

挿　図

第１図　遺跡位置図……３
第２図　調査概要図……４
第３図　遺構配置図……７
第４図　遺構実測図（１）……10
第５図　遺構実測図（２）……11
第６図　遺構実測図（３）……12
第７図　遺構実測図（４）……13
第８図　遺構実測図（５）……14
第９図　遺構実測図（６）……15
第10図　遺構実測図（７）……16
第11図　遺構実測図（８）……17
第12図　遺構実測図（９）……18
第13図　遺構実測図（10）……20
第14図　遺構実測図（11）……21
第15図　遺構実測図（12）……22
第16図　遺構実測図（13）……23
第17図　遺構実測図（14）……24
第18図　遺構実測図（15）……25
第19図　遺物実測図（１）……28
第20図　遺物実測図（２）……29
第21図　遺物実測図（３）……30
第22図　遺物実測図（４）……31
第23図　遺物実測図（５）……32
第24図　遺物実測図（６）……33
第25図　遺物実測図（７）……34
第26図　遺物実測図（８）……35
第27図　遺物実測図（９）……36
第28図　遺物実測図（10）……37
第29図　遺物実測図（11）……38
第30図　遺物実測図（12）……39
第31図　遺物実測図（13）……40
第32図　遺物実測図（14）……43
第33図　遺物実測図（15）……44
第34図　遺物実測図（16）……45
第35図　遺物実測図（17）……46
第36図　遺物実測図（18）……47
第37図　遺物実測図（19）……48
第38図　遺物実測図（20）……49
第39図　遺物実測図（21）……50
第40図　遺物実測図（22）……51
第41図　遺物実測図（23）……52
第42図　遺物実測図（24）……53
第43図　遺物実測図（25）……54

図　版

巻頭図版１　第２次調査区全景　他
巻頭図版２　青磁・染付　他

図版１　第１次調査区全景
図版２　調査状況　他
図版３　Ａ区完掘状況　他
図版４　ＳＥ71土層断面　他
図版５　ＳＤ76土層断面　他
図版６　ＳＫ33土層断面　他
図版７　ＳＰ92土層断面　他
図版８　ＳＫ39遺物出土状況　他
図版９　ＳＸ107遺物出土状況　他
図版10　Ｃ区以降検出状況　他
図版11　ＳＤ222完掘状況　他
図版12　ＳＤ205完掘状況　他
図版13　Ｄ区遺物出土状況　他
図版14　Ｄ区水路跡検出状況　他
図版15　ＳＫ201土層断面　他
図版16　ＳＫ241土層断面　他
図版17　第１次調査　陶器（１）
図版18　第１次調査　陶器（１）
図版19　第１次調査　陶器（３）・磁器（１）
図版20　第１次調査　磁器（２）
図版21　第１次調査　磁器（３）
図版22　第１次調査　磁器（４）
図版23　第１次調査　磁器５・かわらけ・土器（１）
図版24　第１次調査　土器（２）
図版25　第１次調査　土器（３）・土製品・石製品・貨幣
図版26　第２次調査　陶器（１）
図版27　第２次調査　陶器（２）・磁器（１）
図版28　第２次調査　磁器（２）
図版29　第２次調査　磁器（３）
図版30　第２次調査　磁器（４）
図版31　第２次調査　磁器（５）
図版32　第２次調査　磁器（６）・土器・石製品・骨格器
図版33　木製品

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

藤島Ｄ遺跡は、都市計画街路事業藤島駅笹花線にかかる埋蔵文化財の分布調査により、平成９年度にその存在が確認された。試掘調査を実施した県教育委員会は、事業計画に変更がなければ遺跡の保存協議が必要になる旨の所見を、事業主体である庄内支庁建設部道路計画課に報告した。その後、事業計画と遺跡の取り扱い等について協議を重ねた結果、計画路線の変更が不可能なことから、発掘調査による遺跡の記録保存を図ることで調整が進められた。そして事業の進捗に併せ、平成10年度に事業実施予定地にかかる第１次調査を、翌11年度にこれに継続する事業区を対象にした第２次調査を実施すること運びとなった。

遺跡発見の契機となった平成９年度の分布調査では、過去の整地等が原因して遺跡の主体時期と考えられる中世の遺物包含層は、ほとんど削平されて遺存していないものと推測された。しかし、遺跡は「藤島城跡」の東側に位置し、東側の堀跡外側にほぼ隣接する地点と想定されることから、南北朝時代から戦国時代を経て近世にわたる遺構が存在すると予想された。

発掘調査に至るまでの協議等は以下のとおりである。

◆山形県知事より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「藤島駅笹花線都市計画街路事業の実施に伴う地区内の埋蔵文化財発掘調査」の依頼（H11/2）

◆県埋蔵文化財センター理事長より山形県知事あてに、発掘調査を実施すること及び経費見積りの回答（H11/3）

◆県土木部管理課と県埋蔵文化財センターとで「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結（H11/4/1）

2　調査の方法と経過

《第１次調査》

現地調査期間は平成10年９月16日から10月30日までの31日間である。調査対象面積は880㎡であり、東西に長い調査区のほぼ中央を排水路が南北方向に縦断することから、これを境に東側をＡ区、西側をＢ区と呼称した。当初の計画では調査区全域について同時進行する予定であったが、一部がＢ区にかかる藤島郵便局移設工事の遅れによりＡ区を先行、Ｂ区は工事完了しだい着手する工程に改めた。

Ａ区は９月17日からの表土除去後に、計画路線のセンター杭を基準とした方眼区割りを行った。その後、面整理を繰り返して遺構検出に努めたが、北上した台風の影響を受けて降雨の日が続いたため、排水を繰り返しながら地区毎にプランを確認し掘り下げを実施していった。郵便局の移設が終了したのを受け、遺構精査と併行しながら９月30日よりＢ区の表土除去を開始した。Ｂ区は10月５日～７日にかけ遺構検出を行い、８日からはＡ・Ｂ区とも遺構の掘り下げに専念した。各遺構の埋積状況を記録しながら掘り進め、27日までに大半の遺構について完掘できた。28日には委託業務として遺構の写真測量を実施している。この間、13日に藤島町文化財調査委員会の現地視察があり、28日には事業者および町教育委員会等の

関係者を対象にした調査説明会を開催した。29日に遺構内出土遺物を取り上げた後、現地引き渡しを行って30日に調査を終了した。

《第２次調査》

第２次調査では事業範囲のうち、現道を含む1,400㎡を対象とした。発掘調査により交通を遮断できないことから、調査区内を二分割して県道の通行を確保しながら交互に調査する方法を採った。現地調査は平成11年９月13日に開始し、主に現道の拡幅部分に当たる計画路線の北側を先に実施した。北側区域（Ｃ区）にも現道の一部が含まれており、舗装の撤去等が未施工なことから、県道以外の部分を先行して調査した。調査区は家屋への出入り通路や排水路を残しながら設定しなければならず、また現道地下に埋設された水道・ガス管等の存在から、調査区内を６カ所に細分している。プラン検出後、９月28日から遺構精査に入った。土層断面図等の諸記録を行いながら、10月８日にこの区域の調査を終了している。

現地引き渡し後、この北側部分に現道に替わる仮設道路の取り付け工事を経て、約１ケ月後の11月２日より南側区域（Ｄ区）の調査を再開した。Ｃ区同様に周辺宅地への通路の確保、あるいは地下埋設物により掘削部分を分断せざるを得ず、調査区全体の内容が把握しづらい現状であった。５分割したＤ区では、東側部分がすでに地山面まで破壊されており遺構検出が不可能なことから、状況確認後にこの部分の埋め戻しを行っている。断片的ながら中央部から西側について調査を進め、掘り下げがほぼ終了した11月16日に調査説明会を実施した後、19日までに諸記録を終えて現地調査を完了した。

表１　調査工程表

作業内容＼月		9月				10月				11月			
第1次調査	表土除去			■		■							
	グリット設定				■		■						
	面整理・遺構検出			■	■	■	■						
	遺構精査					■	■	■	■				
	記録(作図・写真)					■	■	■	■				
	写真測量(委託)								■				
	調査説明会								■				
第2次調査	トレンチ調査		■										
	表土除去			■						■			
	グリット設定				■					■			
	面整理・遺構検出			■	■	■				■	■		
	遺構精査				■	■					■	■	
	記録(作図・写真)				■	■					■	■	
	写真測量(委託)					■						■	
	調査説明会											■	

Ⅱ　遺跡の概観

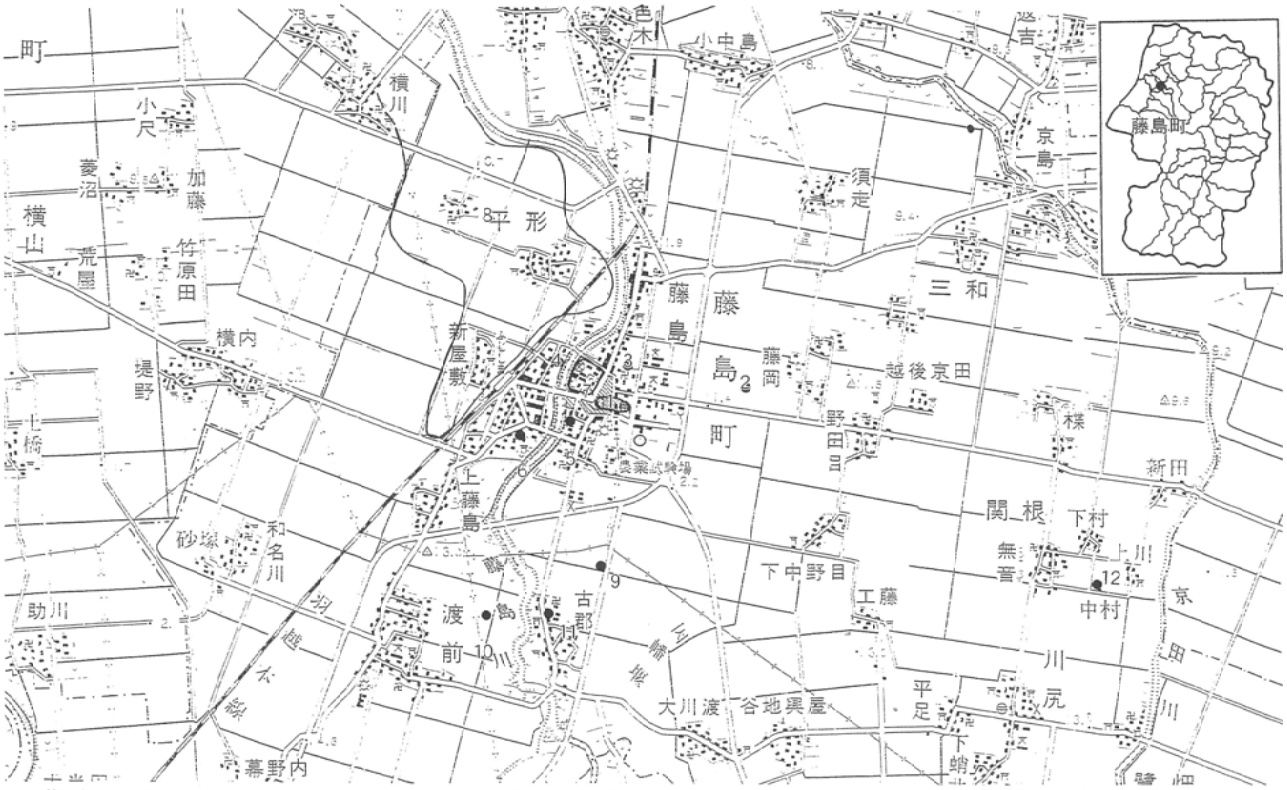
1　地理的概要

遺跡は藤島町の市街地である中町に所在する。現在の地目は主に宅地となっており、標高約12mを測る。藤島町は山形県の北西に広がる庄内地方のほぼ中央に位置し、町域の大半は平野部でその面積は約4,000haに及ぶ。特に西部域は赤川・藤島川・京田川などによって潤された広大な河間低地を形成しており、この肥沃な耕地を利用して日本有数の稲作地帯となっている。町の南東部には出羽三山の羽黒山や月山を望み、その月山を源流とする藤島川は、町内の中央部を蛇行しながら北流して京田川に合流、さらに河口付近で最上川と合流して日本海に注ぐ。藤島川の中・下流域では自然堤防状の地形が発達しており、周辺には縄文時代から近世までの遺跡が数多く確認されている。

現在の表層分布から庄内平野は第三期の末まで入江であったが、土地の上昇と諸河川の下流における扇状地の形成と相まって、河口付近に多くの土砂が堆積した。このため三角州が発達するに至り、基盤層は第四期沖積層の地質を呈している。

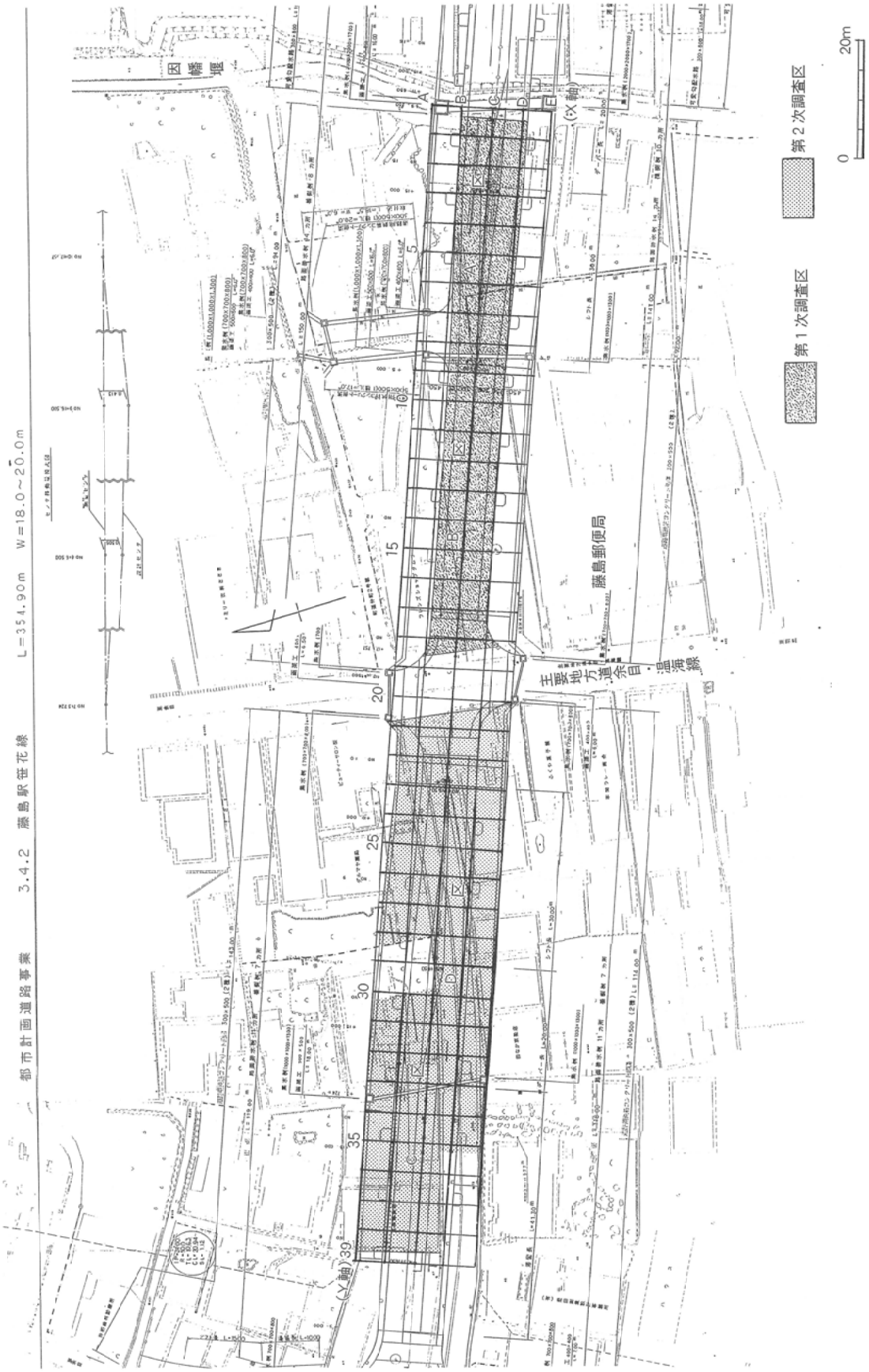
2　歴史的概要

藤島町域で現在までに確認・登録されている遺跡は50箇所余を数える。その内、奈良・平安時代以降の遺跡は藤島川周辺に集中している。藤島の地は古代から陸上交通の要であり、諸方面に通じる道路が発達していた。また、陸路のみならず藤島川による水運も開けており、北上すると最上川に合流するため、酒田港を通じて諸国との交流が盛んに行われていた。こ



1. 藤島D遺跡　2. 藤島C遺跡　3. 受信寺遺跡　4. 向　館　跡　5. 法眼寺館跡　6. 六所B墳墓跡
7. 藤島城跡　8. 平形遺跡　9. 古郡遺跡　10. 渡前B遺跡　11. 古郡館跡　12. 関根館跡

第1図　遺跡位置図(国土地理院発行5万分の1地形図「鶴岡」を使用)



第２図　調査区概要図（Ｓ＝１：１,０００）

のように水陸交通の要衝として、また穀倉地帯の中心的拠点として好条件を備えた立地環境であったと言える。

こうした理由から、南北朝および戦国時代には戦略上の重要拠点として激しい領地争いが繰り返された。14世紀前半、この地の防衛拠点として藤島川を堀の一部とした藤島城が築城された。南北朝時代には南朝方の葉室氏の支配下に置かれ、北朝方の上杉氏と合戦を繰り広げていた。14世紀中葉には地元豪族である土佐林道俊が藤島城主に任命され、室町時代の終盤に武藤氏との争いに敗れるまで土佐林氏が支配した。しかし、武藤氏は山形の最上義光に滅ぼされ豊臣秀吉の命により上杉氏の所領になるなど、16世紀後半には目まぐるしく領主が交替している。そして関ヶ原合戦の際、義光は上杉氏の所領であった庄内を攻略し、そのまま領主となって家臣の新関因幡守を藤島城主に据えた。因幡守は潅漑施設の開発に力を入れ、藤島城の東側に位置する因幡堰をはじめ多くの堰を開拓している。その後、1615年の一国一城令により廃城となり、藤島は最上氏の改易ののち鶴ヶ岡城主の酒井氏の所領となった。

藤島城跡の発掘調査はこれまで６次に亘り行われている。出土遺物には茶臼や火薬の調合の際に使われたと考えられる石臼などがあり、中世の武家社会の様相を彷彿とさせる。現在は県立庄内農業高校として利用されており、本遺跡はその南東に隣接する位置関係にある。藤島川を挟んだ対岸には慶長年間の藤島城籠城の際に築かれたと伝られる向館跡、また南方には土塁の一部が残存する法眼寺館跡があり、藤島城の防御強化の支城であったと考えられている。

表２　藤島城変遷表

年号	西暦	ことがら	城主家
不詳		藤島城創築される　　詳細は不明	不明
興国２年	1341	葉室光世、秋田城介に任ぜられ藤島城に入部する	葉室氏
興国５年	1344	北朝方の上杉憲顕により藤島城陥落する　葉室光世戦死	
興国６年	1345	葉室光久(葉室光世の弟) 藤島城に入る	
正平11年	1356	北畠顕信、藤島城にて挙兵　南朝方の拠点となる	
正平12年頃	1357?	土佐林道俊、藤島城主となる	土佐林氏
文安２年頃	1445?	土佐林氏光、羽黒山別当職を兼任　羽黒山本社を修造	
永禄２年頃	1559?	土佐林清助、武藤氏に股肱の臣として取り立てられる	
元亀元年頃	1570?	土佐林禅棟、武藤(大宝寺) 義氏との争いに敗れる	
天正７年	1579	武藤義興、藤島城に入る	武藤氏
天正11年	1583	武藤義氏、最上義光と内通する者の謀反により自刃する 武藤義興は尾浦城に移る	
天正15年	1587	最上義光、庄内を猛攻する　尾浦城陥落し、武藤義興自刃する	
天正16年	1588	最上義光、豊臣秀吉より庄内の領有を認められる	
天正18年	1590	秀吉、上杉景勝に遊佐・櫛引・田川の支配を命じ、検地を実施する 厳しい検地に対して一揆が発生する	上杉氏
天正19年	1591	藤島城に金右馬允が籠城するが、一揆を鎮圧される	
慶長５年	1600	徳川家康、各地の大名に上杉攻めを命じる。	
		最上義光、庄内を攻め落とす	
慶長６年	1601	最上義光、関ヶ原の戦いの戦功として庄内を加増され、藤島城主として新関因幡守を配する	最上氏
慶長12年	1607	新関因幡守、藤島領に堰(因幡堰) を開削する事業に着手する	
元和元年	1615	「一国一城令」により、藤島城が廃城となる	

資料　藤島城跡第2次調査報告書より

Ⅲ　検出遺構

1　遺構の分布(第３図)

第１次調査区(Ａ・Ｂ区) では、遺構の集中箇所が２箇所で認められた。すなわち、Ａ区東半部とＢ区中央東寄りの区域である。この部分は地盤が安定しており、他の希薄区域と比較すれば微高地状を呈していると認識できた。特にＢ区西半は西へ向って地山層が徐々に落ち込んでおり、厚い整地層が堆積する状況であった。検出された主な遺構は、井戸跡２基・溝状遺構12条・土坑46基などである。これら遺構にはかなりの重複が認められ、また宅地の基礎や近代の撹乱等により一部破壊を受ける部分もあった。なお、遺構確認面までの基本層序は表土＝整地層(Ⅰ層)、旧耕作土(Ⅱ層)、部分的に遺存する遺物包含層(Ⅲ層) の３層順が識別できた。

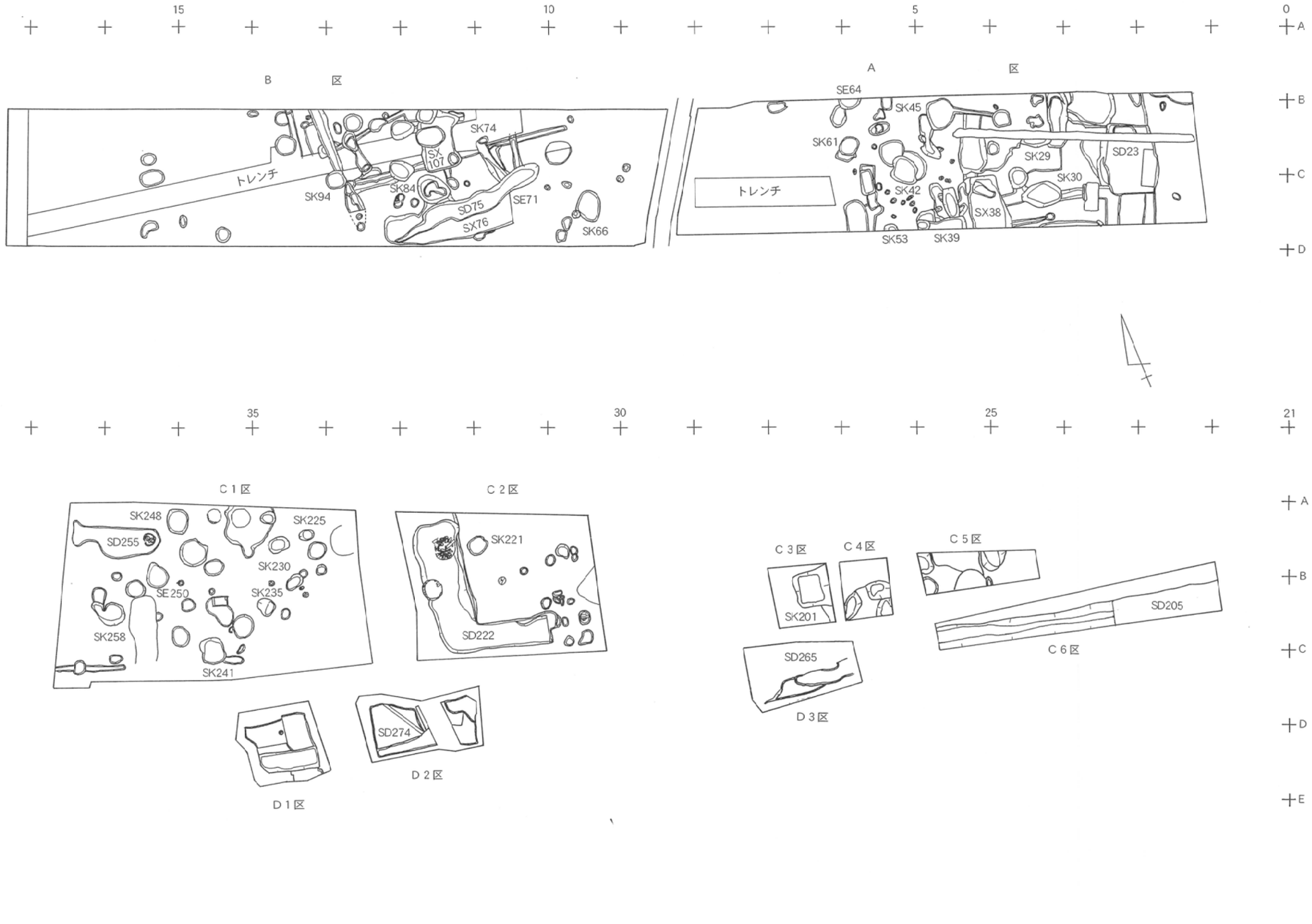
第２次調査区(Ｃ・Ｄ区) は埋設物や通路確保等のため、調査区を分断して設定せざるを得なかったことから、遺構の分布も判然と捉えられなかった。１次調査区に隣接する東側(Ｃ６区) は地盤が低く、性格不明な落ち込みやが多い。また、南側(Ｄ区) は調査区域の制限もあり、連続しない東西方向の溝状遺構を認めるのみであった。したがって、面的広がりからある程度のまとまりとして把握できたのは北西部(Ｃ１・２区) に限られた。この区域を主体に登録した遺構は、井戸跡１基・溝状遺構６条・土坑53基などである。北西域では遺構群に重複関係がさほど認められず、近接した時期での構築と判断された。

2　第１次調査検出遺構

井戸跡(第４図)　調査で井戸跡と確認されたのは、ＳＥ64とＳＥ71の２基である。

ＳＥ64はＡ区北辺Ａ－５グリッドに位置する井戸跡で、北半部が調査区外にかかるため半円状のプランで検出した。掘り方は未検出部を含め、直径150cm程の円形を呈すると推定される。深さは確認面から40cm余と浅く、中央部が一段深く掘り込まれる形態を呈し、この部分に井戸眼と理解される木製品が据えられていた。井戸眼は長さ約15cmの短い板を桶状に組んだ構造のもので、９枚の板で半円を形成しており、外周は竹製のタガが巻かれていた。掘り方の中央部はこの外径に合わせて窪められており、井戸眼の大きさは径100cmを測る。掘り込みは浅いものの掘り方底面の地山層は砂質で、調査中も湧水を認めた。

ＳＥ71はＢ区東寄りのＢ－10グリッドにおいて検出され、木製井戸眼および竹製水道管の施設を持つ井戸跡である。プラン確認時は検出長11m・幅100cm内外の溝状遺構と認識されたが、掘り下げにより東端部に井戸眼を据えた井戸施設を埋設する掘り方と判明した。掘り方の深さは検出面から約80cmを測り、井戸眼設置部で底面が北上がりに傾斜している。井戸眼には径・高さとも60cm程の木樽を用いている。樽に底板は伴わなかったが、内部に一回り小径の底板が遺存していた。樽は幅10cm内外の側板19枚で一周し、上中下３段のタガによって組み止めている。下方には竹管を通すための円孔が２箇所に開けられており、北と西方向に竹管を継いだ水道が確認された。また、これら取出口とは別にその中間部(北西方) にも円孔が設けられ、木製の栓により塞がれていた。掘り下げ面付近は常に湧水があり、覆土は黒褐色基調の砂質土である。遺物は磁器片が数点と、井戸眼内の覆土から寛永通宝１点が出土している。



第３図　遺構配置図（Ｓ＝1：300）

溝状遺構(第５・６図)　12条登録した内、ここではＳＤ23・24とＳＤ75、およびＳＤ75と重複するＳＸ76について概述する。

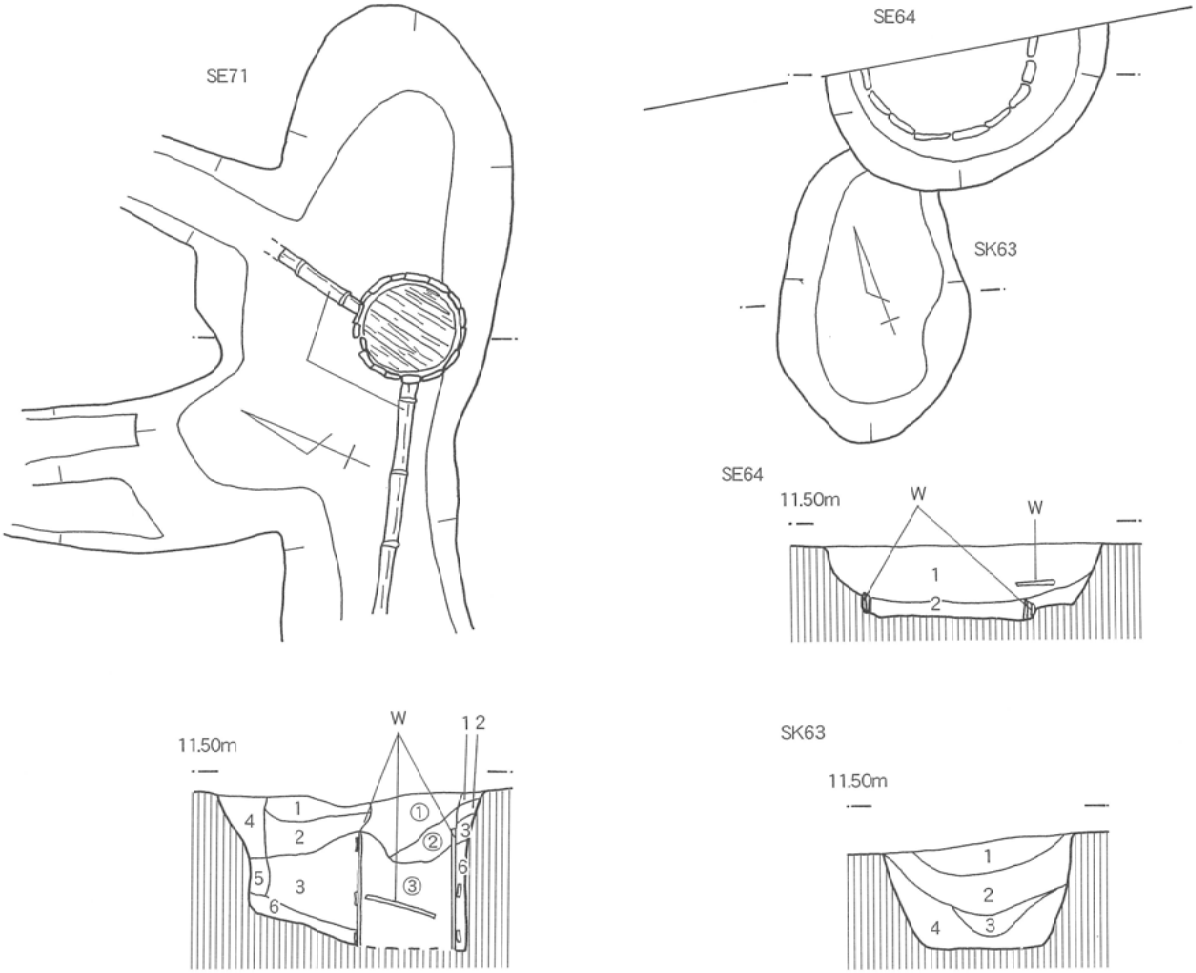
ＳＤ23･24(第５図) はＡ区東端部に位置し、南北方向に縦断する溝跡である。重複関係にあり、断面観察によってＳＤ23がＳＤ24を切っていることが解った。プラン検出時は平行する２条の溝跡として確認したが、掘り下げの結果により中間の地山と認識した部分も覆土であることが判明した。ＳＤ23の規模は検出長9.5m・最大幅2.5mで、深さは検出面から70～90cmを測り、南側がより深くなる。調査では中央部分について掘り下げを行っているが、覆土の堆積状況等から東側の壁面はより外側に広がるものと判断された。断面観察でＳＤ24の覆土は水平堆積を呈しているのに対し、ＳＤ23では周囲からの流れ込みの様相が認められた。遺物はＳＤ23から珠洲系陶器(第19図４・５)、かわらけ(第29図118･119)、土製品(第31図139)、石製品(第31図144・146) 等が出土している。これら遺物の特徴から遺構に与えられる年代は、15世紀代の所産と考えられる。

ＳＤ75(第６図) はＳＥ71井戸跡と関連し、水道となる竹管を埋設するために掘られた溝状の遺構である。Ｂ区中央域においてＳＥ71から西方向に延び、Ｂ区南辺までの検出長は約10mを測る。不整な大型長方形状を呈するＳＸ76と重複関係にあり、これを切っている。竹管埋設面のレベルは一定していて、ほぼ水平を保って設置される。竹管は径６cm程のもので、途中には竹管を継ぐための木製の枡が施されていた。枡は一面35×20cmの立方体で、この間の竹管１本の長さは約4.2mを測った。ＳＤ75以前の構築と判断されるＳＸ76は、炭化物や焼土を含む覆土が埋積する大型の遺構である。北辺は他遺構との重複もあり、そのプランが判然としない。掘り込みの深さも一定せず、底面には起伏や凹凸が認められる。本遺構からは最も多くの遺物が出土しており、全体量の23％を占めた。種別・器種は近世陶器の甕・擂鉢類、碗・皿等のほか仏飯器や水滴を含む磁器、コンロや手あぶり等の瓦質、土製人形に古銭など多種多様な内容である。これら遺物は15世紀から20世紀初頭までの範疇に属するもので、主体的な年代は18世紀後半～19世紀代と捉えられた。

土坑等(第７～12図)　実測図掲載した遺構の内、ここでは主として時期推定可能な遺物が出土したＳＫ39・ＳＫ94・ＳＸ107についてその概要を記す。

ＳＫ39(第10図) はＡ区中央の南辺Ｃ－４グリッドに位置する土坑で、その南域は調査区外にかかる。北辺の長さが約340cmを測り、検出された平面形から竪穴状の隅丸方形を呈する形態と推測された。掘り方では北東角部が段を形成して、また西辺部は底面まで垂直的に掘り下げられ、プラン確認面から底面までの深さは60cm前後である。北・東部は各々ＳＫ40・ＳＸ38と重複している。覆土は黒褐色砂質土を基調としており、３層に区分された。本遺構からは時期推定遺物として珠洲系の擂鉢片(第19図６)を認めた他、底面密着の状態で漆器椀(第43図１) が出土している。遺物から推測される時期は16世紀代と捉えられ、遺構の構築や廃絶も同年代と考えて大過ないと思われる。

ＳＫ94(第11図) はＢ区中央部、Ｂ･Ｃ－12グリッドに位置する土坑である。東端部でＳＤ77溝状遺構と重複関係にあり、これを切って掘り込まれる。平面形は径140cm程を測る略円形で、検出面からの深さ約80cm、断面形が逆台形様を呈する。全周において急激に掘り込まれ、底部はほぼ平坦である。断面観察における覆土の埋積状況は、中央部に落ち込む自然堆積の



ＳＥ７１
1．10YR3/1　黒褐色砂質シルト。炭化物を含む。
2．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色粘性シルトが粒状かつブロック状に混入する。
3．5Y2/1　黒色シルトに、7.5Y4/1灰色砂質シルトが粒状かつブロック状に混入する。
4．5Y2/1　黒色シルトに、7.5Y5/1灰色粘性シルトがブロック状に混入する。
5．7.5Y4/1　灰色細砂に、5Y2/1黒色シルトがブロック状に混入する。
6．10YR3/3　暗褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色粘性シルトがブロック状に多量混入する。酸化鉄を含む。

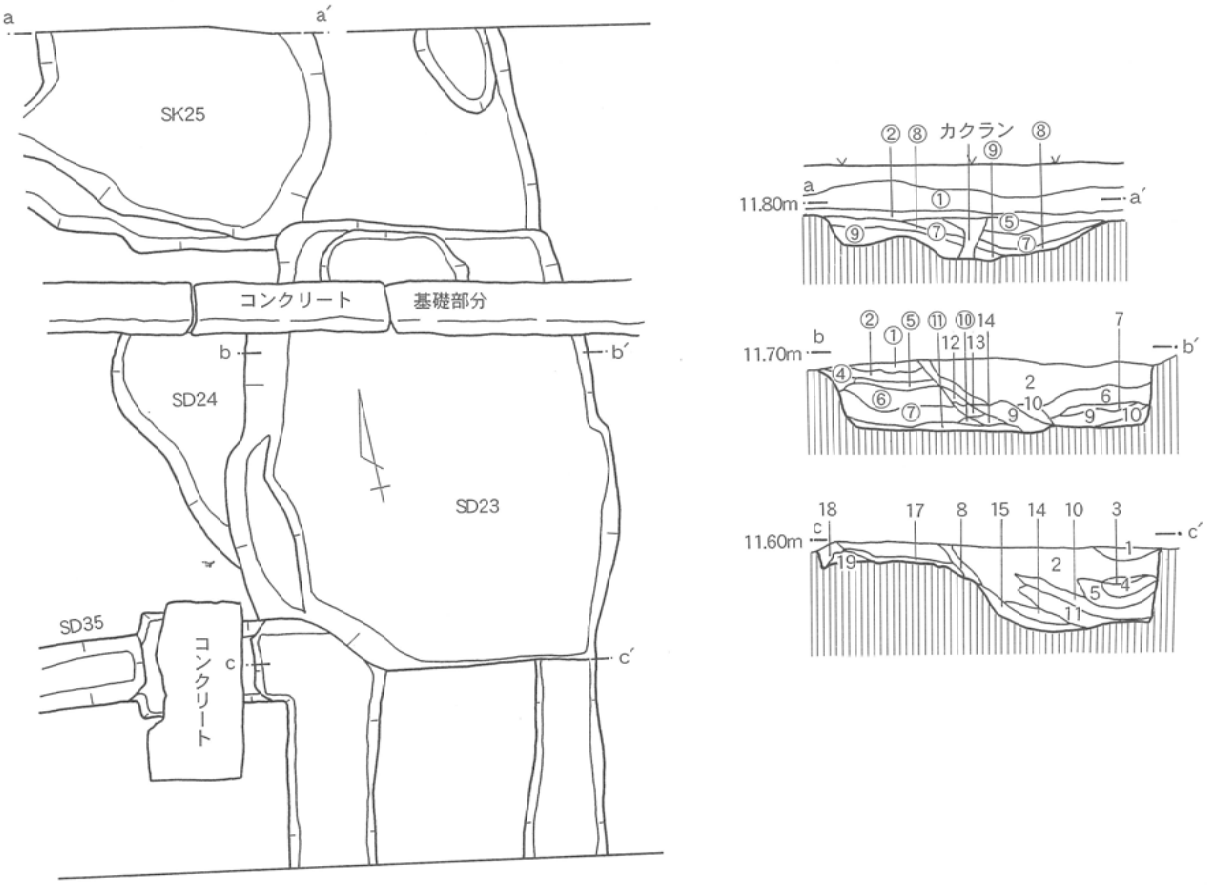
①．10YR3/2　黒褐色砂質シルト。炭化物を含む。
②．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色シルトがブロック状に混入する。酸化鉄を含む。
③．5Y2/1　黒色砂質シルトに、7.5Y4/1灰色砂質シルトがブロック状に混入する。

ＳＥ６４
1．10YR2/1　黒色砂質シルトに、10YR5/2灰黄色砂質シルトと、同細砂が粒状かつブロック状に混入する。
2．10YR2/1　黒色砂質シルトに、N2/0黒色シルトが帯状に混入する。

ＳＫ６３
1．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2黄褐色砂質シルトがブロック状に少量混入する。
2．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色粘性シルトと、同砂質シルトと、N2/0黒色シルトがブロック状に混入する。
3．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、N2/0黒色シルトが帯状に混入する。
4．N2/0　黒色シルトに、10YR5/2灰黄褐色粘性シルトと、同砂質シルトがブロック状に多量混入する。

0　1m
1：40

第４図　遺構実測図（１）　ＳＥ



SD23

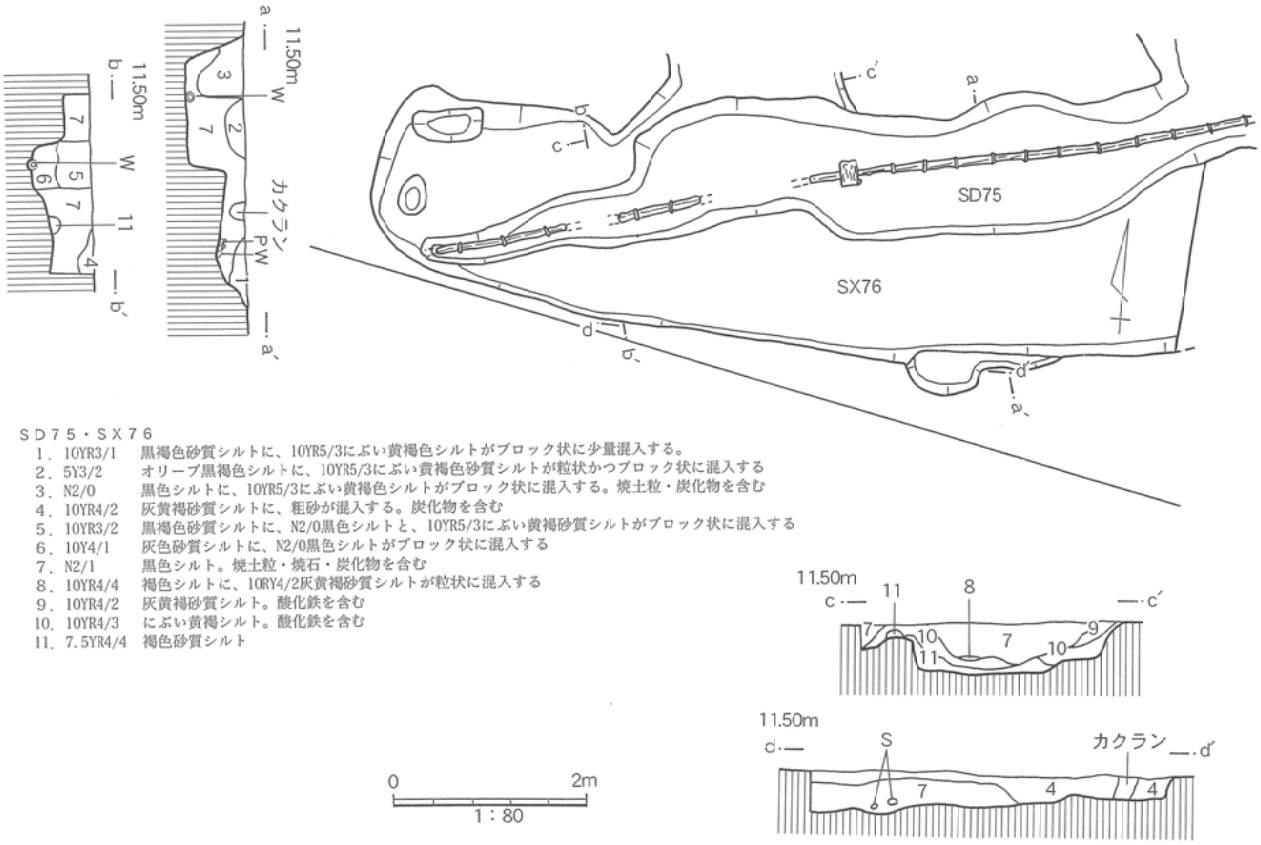
1. 10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、粗砂がブロック状に混入する。炭化物を含む
2. 2.5Y4/1　黄灰色砂質シルト、10YR3/2黒褐色砂質シルトがブロック状に多量混入する。炭化物有り
3. 2.5Y4/1　黄灰色細砂（純粋）
4. 2.5Y2/1　黒色粘土質シルト（純粋）
5. 2.5Y3/1　黒褐色砂質シルトに、2.5Y4/1黄灰色細砂と、2.5Y2/1黒褐色粘土質シルトと、2.5Y4/1黄灰色シルトがブロック状に少量混入する
6. 2.5YR4/1　黄灰色砂質シルトに、粗砂が混入する。酸化鉄を含む
7. 2.5YR4/2　暗黄灰色砂質シルトに、粗砂が混入する。酸化鉄を含む
8. 10YR3/2　黒褐色砂質シルト。炭化物・酸化鉄を含む
9. 2.5Y2/1　黒色粘土と、2.5Y4/2暗灰黄色細砂の互層
10. 10YR4/2　灰黄褐色砂に、粗砂が帯状に混入する。酸化鉄に富む
11. 7.5YR5/8　明褐粗砂（酸化鉄含粗砂層）
12. 10YR2/1　黒色砂質シルト。炭化物を含む
13. 2.5Y3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色シルトがブロック状に少量混入する
14. 2.5Y3/2　黒褐色砂質シルト。未分解有機物を含む
15. N2/0　黒色シルトに、10YR3/2黒褐色シルトがブロック状に混入する
16. 10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、粗砂が混入する。炭化物を含む
17. 10YR2/1　黒色砂質シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入する
18. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色シルトが粒状に混入する。（ＳＤ３５覆土）
19. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルトに、10YR2/1黒色シルトがブロック状に少量混入する

ＳＤ24・ＳＫ25

①. 10YR2/1　黒色シルトに、10YR4/4褐色シルトがブロック状に少量混入する。炭化物を含む。
②. 10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色砂質シルトがブロック状に混入する。炭化物を含む
③. 10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色砂質シルトと、2.5Y4/2暗灰黄色粗砂がブロック状に混入する
④. 2.5Y4/2　暗灰黄色粗砂に、10YR3/1黒褐色砂質シルトがブロック状に混入する
⑤. N2/0　黒色シルトに、10YR3/1黒褐色砂質シルトと、10YR5/3にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入する。
⑥. 2.5Y2/1　黒色粘性シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入する
⑦. 10YR5/3　にぶい黄褐色シルト
⑧. N2/0　黒色シルトに、2.5Y2/1黒色粘土質シルトが帯状に混入する。未分解有機物を含む
⑨. 10YR2/1　黒色シルトに、2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトがブロック状に混入する
⑩. 2.5Y2/1　黒色粘性シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入する

0　2m
1：80

第５図　遺構実測図（２）　ＳＤ

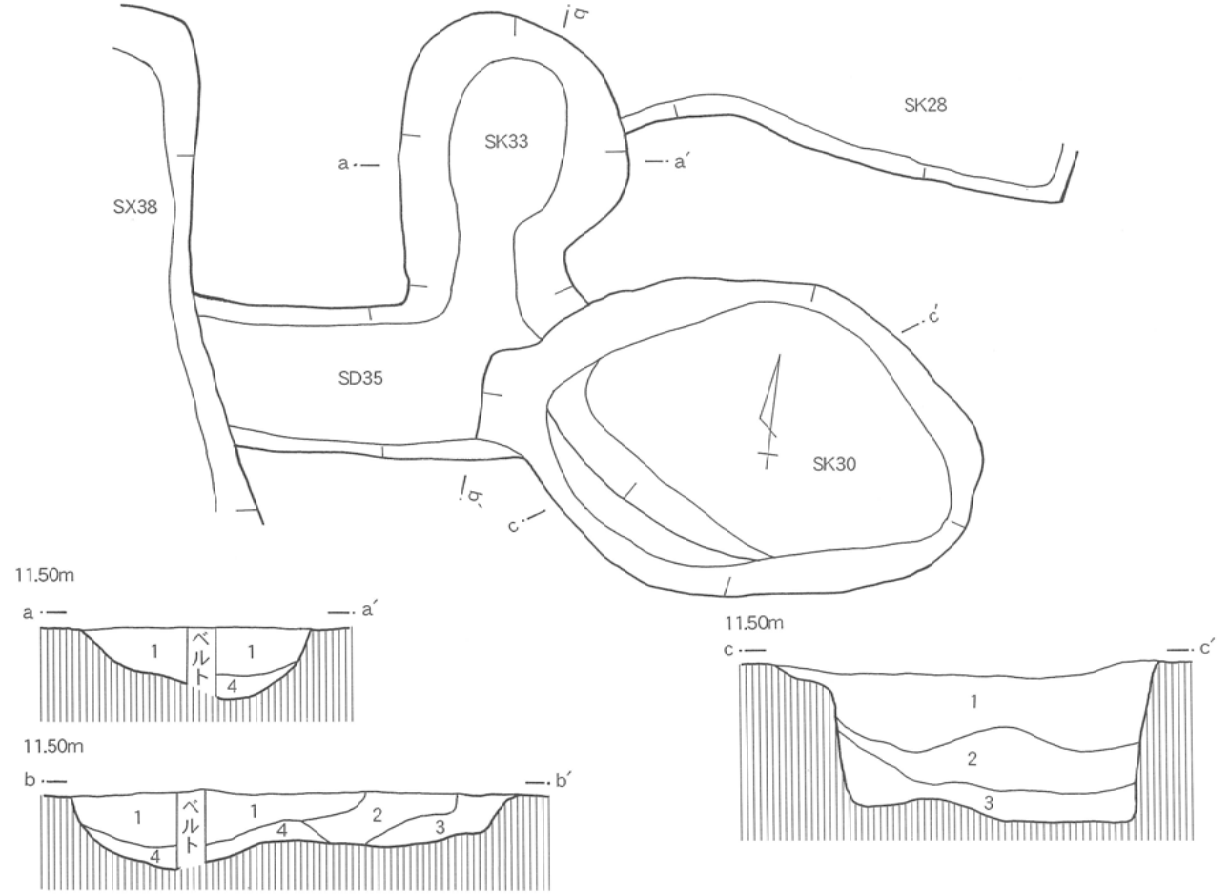


第６図　遺構実測図（３）　ＳＤ

様相と理解される。遺物は最下層を中心に18世紀代に比定できる磁器が最も多く出土しており、器種には坏・碗・皿・徳利・口紅皿などがある。その他にも近世陶器(第19図10、第20図15)、玩具類(第29図114～116)、瓦質(第30図128)、土製人形(第31図141)、砥石(第31図145)などがあり、年代的には18世紀初頭～19世紀後半に属するものであった。

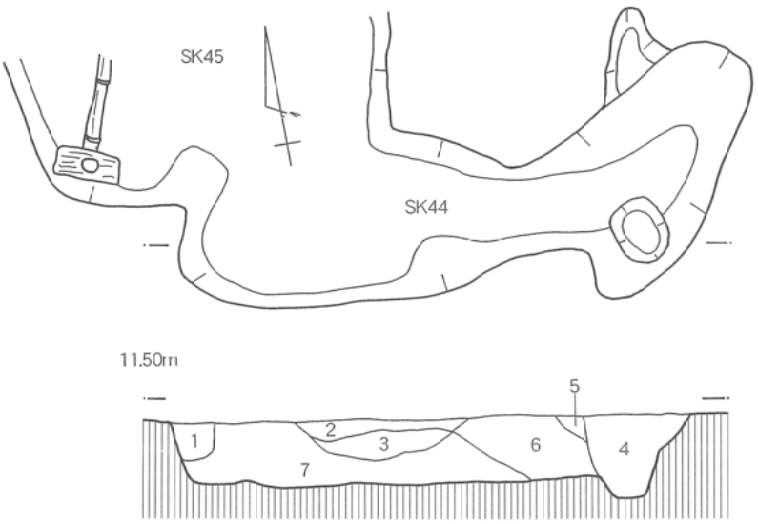
ＳＸ107(第12図)はＢ区中央の北寄り、Ｂ－11グリッドに位置している。プラン確認時の平面規模は東西230cm・南北400cm程の大きさで、隅丸長方形状を呈している。掘り込みに見られる凹凸や形態あるいは断面観察から、複数の遺構が重複しているものと判断された。重複は北半部で認められ、楕円形状の土坑５基程の切り合いと推定される。深さも一様ではなく、全体で７箇所の底面レベルが異なる落ち込みが存在する。遺物はＳＸ76に並んで出土量が多く、全体数の約22％を占めた。甕・擂鉢の陶器類、坏・碗・皿・徳利・口紅皿・レンゲ等の磁器類、焙烙・風口・手あぶり・炭甕・炭壺蓋の瓦質類、石製品の硯、椀・曲物・箸などの木製品といった多様な種別・器種が存在した。また、ＳＸ76出土遺物と接合する事例(第26図89)が認められた。年代的には19世紀代のものが主体と捉えられるが、15世紀に溯るものから近代に属するものまで、時期幅の広い内容のものが含まれていた。

その他、Ａ区のＳＫ36・45・61およびＢ区のＳＫ74・84・91等の各土坑から、少量ながら実測掲載できた遺物が出土している。



ＳＫ３０
1．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色粘土質シルトが粒状に少量混入する。炭化物を含み、下層は酸化鉄に富む。
2．10YR2/1　黒色粘性シルトに、10YR5/2灰黄褐色粘性シルトががブロック状に少量混入する。
3．10YR2/1　黒色粘性シルトに、2.5Y4/1黄灰色粘性シルトがブロック状に混入する。

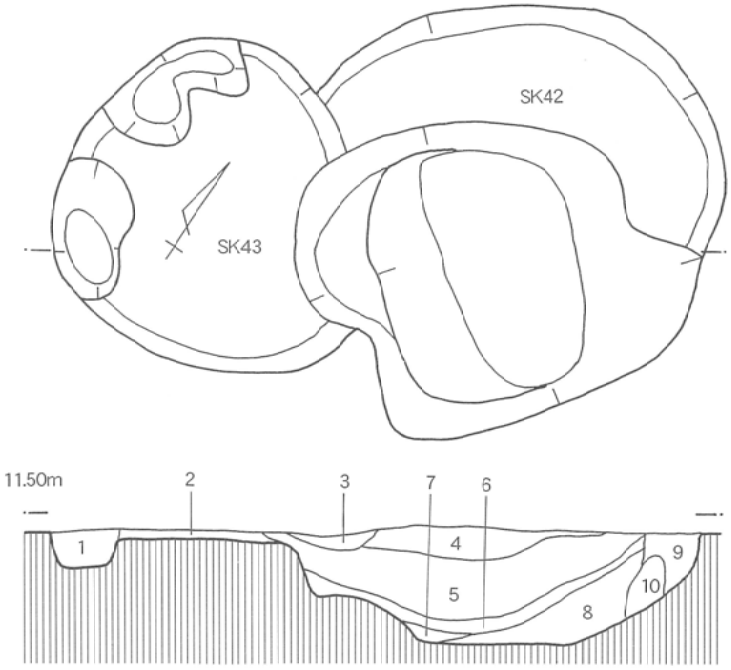
ＳＫ３３
1．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR4/4褐色砂質シルトが粒状に混入する。炭化物を含む。
2．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐粘性シルトがブロック状に混入する。炭化物あり。
3．10YR2/1　黒色シルトに、10YR5/2灰黄褐粘性シルトがブロック状に混入する
4．10YR2/1　黒色砂質シルトに、10YR4/4褐色砂質シルトと、10YR5/2灰黄褐色粘性シルトがブロック状に混入する。炭化物あり。



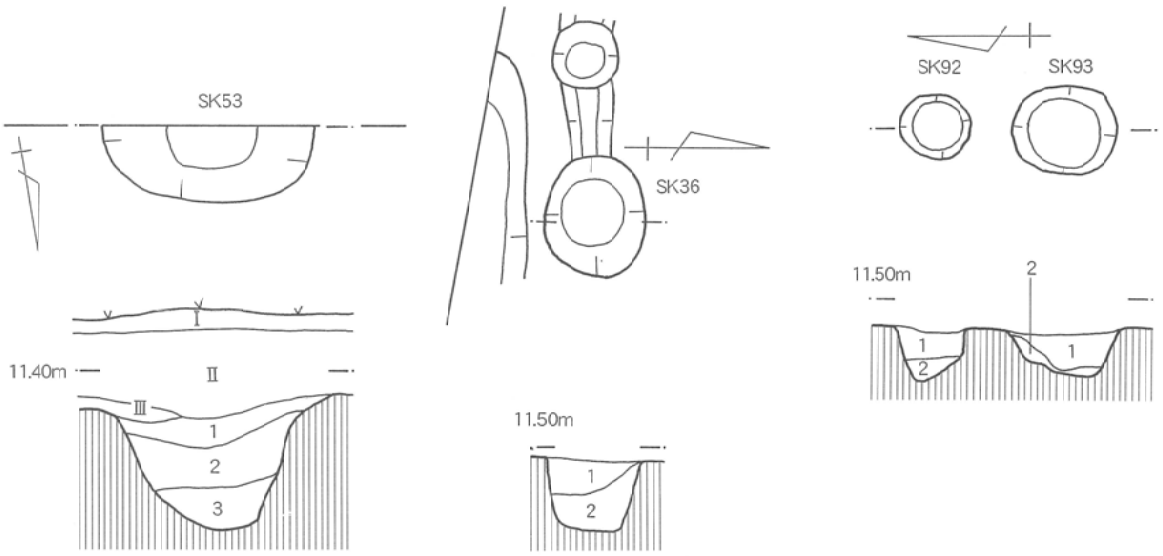
ＳＫ４４
1．10YR3/2　黒褐色細砂に、10YR5/3にぶい黄褐色細砂が粒状かつブロック状に混入する。
2．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色細砂が粒状かつブロック状に混入する。
3．10YR2/1　黒色シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色細砂が粒状かつブロック状に混入する。未分解有機物を含む。
4．10YR3/3　暗褐色砂質シルトに、10YR4/4褐色細砂がブロック状に少量混入する。炭化物を含む。
5．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルトに、10YR3/3暗褐色砂質シルトがブロック状に大量に混入する。
6．２と同じであるが、炭化物を含む
7．2.5Y3/1　黒褐色粘性シルトに10YR3/3暗褐色砂質シルトが粒状かつブロック状に混入する炭化物・酸化鉄・未分解有機物を含む。

0　1m
1：40

第７図　遺構実測図（４）　ＳＫ



ＳＫ４２・４３
1．10Y3/1　黒褐色砂質シルトに2.5Y2/1黒色シルトと、10YR5/2灰黄褐色砂質シルトがブロック状に混入する。
2．10YR5/2　灰黄褐色細砂。酸化鉄を含む。
3．10YR2/1　黒色砂質シルト。未分解有機物を含み、炭化物に富む。
4．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR4/6褐色細砂がブロック状に混入する。炭化物を含む。
5．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR4/6褐色細砂が粒状かつブロック状に混入する。
6．2.5Y3/1　黒褐色粘性シルトに、N2/0黒色シルトが帯状に混入する。
7．10YR2/1　黒色シルトに、10YR4/6褐色細砂がブロック状に混入する。
8．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR4/6褐色細砂と、10YR5/2灰黄褐砂質シルトがブロック状かつまだら状に混入する。酸化鉄を含む。



基本層序
Ⅰ．10YR2/3　黒褐色シルト。小礫を含む（整理面で現地表面）
Ⅱ．10YR2/3　黒褐色シルト。炭化物を含む（旧耕作土）
Ⅲ．10YR2/2　黒褐色砂質シルト。（遺物包含層）

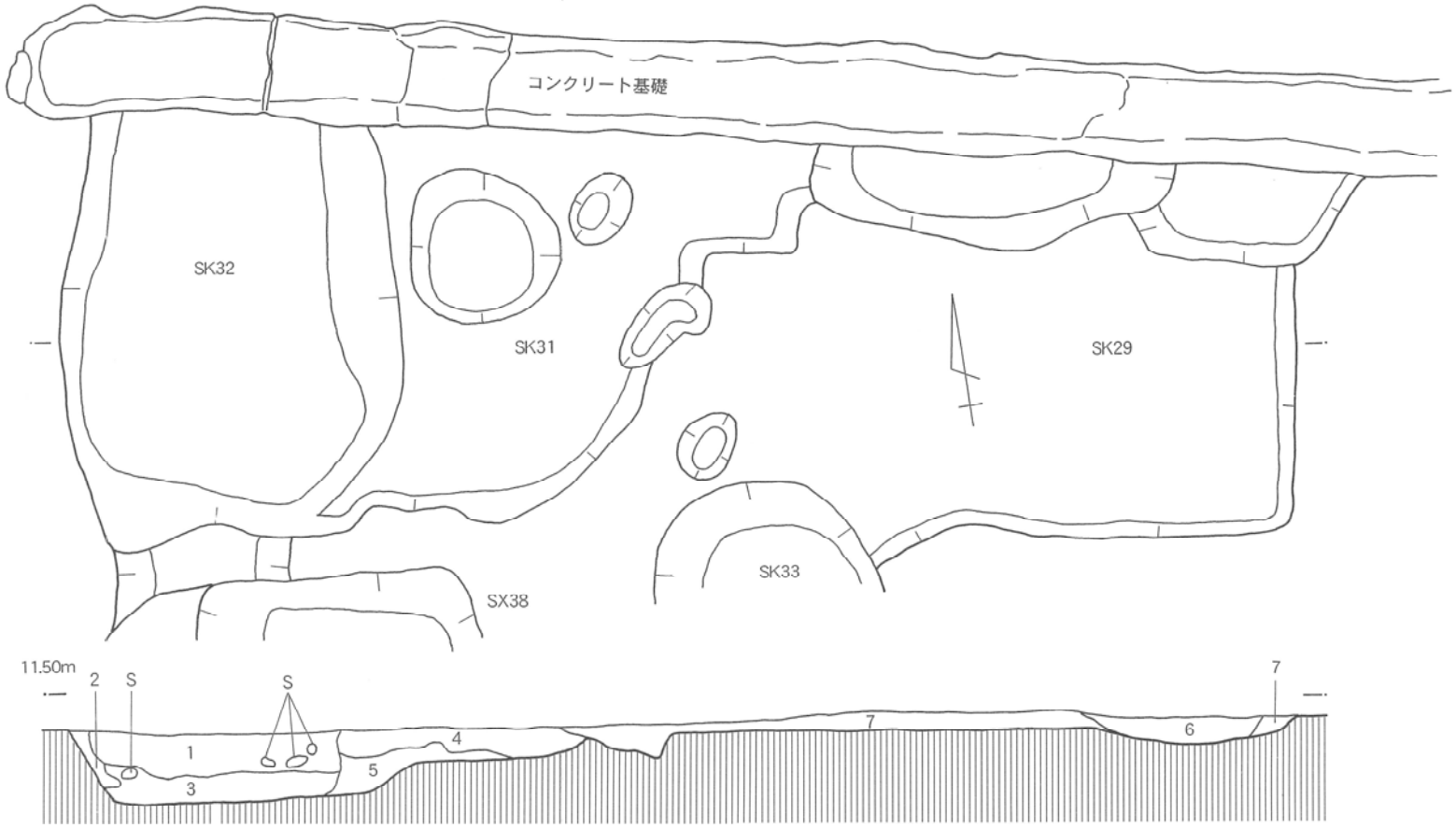
ＳＫ５３
1．N2/0　黒色シルトに、粗砂が混入。炭化物あり
2．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、粗砂が混入する。10YR5/2灰黄褐色砂質シルトがブロック状に混入する。
3．2.5Y3/1　暗褐色粘土質シルト。

ＳＫ３６
1．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、N2/0黒色シルトがブロック状に混入する。炭化物を含む。
2．N2/0　黒色シルトに、10YR3/1黒褐色細砂がブロック状に多量混入する。

ＳＫ９２・ＳＫ９３
1．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR2/1黒色シルトと、2.5Y5/2暗灰黄シルトがブロック状に混入する。
2．10YR4/4　褐色砂質シルトに、2.5Y5/2暗灰黄シルトがブロック状に混入する。

0　1m
1：40

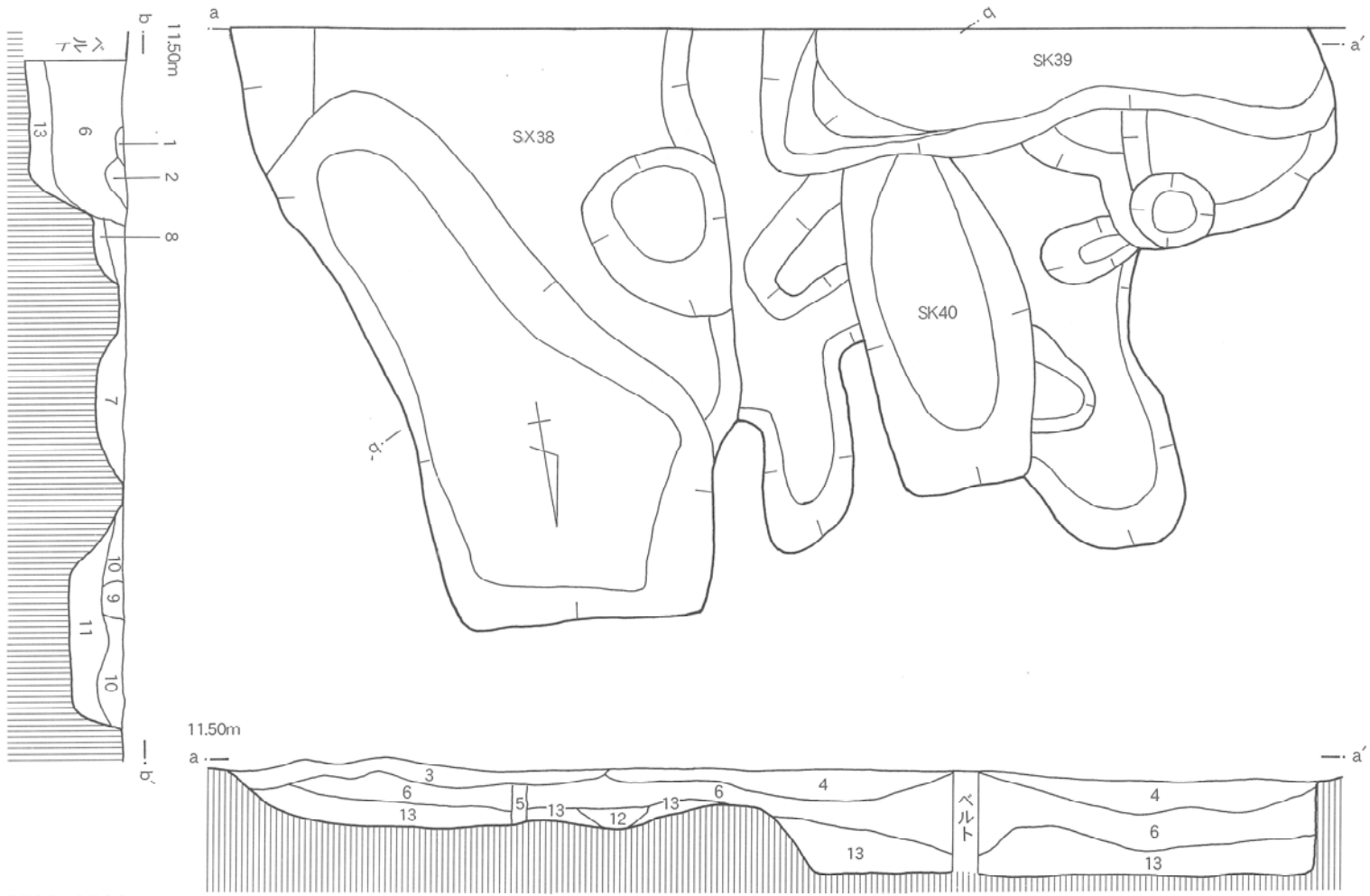
第８図　遺構実測図（５）　ＳＫ



ＳＫ２９・３１・３２
1．10YR2/1　黒色シルト。炭化物を含む。
2．10YR3/1　黒褐色砂質シルト（４よりやや暗い）に、10YR5/2灰黄褐色細砂がブロック状に混入する。
3．2.5Y2/1　黒色粘性シルト。炭化物・小礫・焼石を含む。
4．2.5Y4/1　灰色シルトに、2.5GY5/1オリーブ灰色シルトがブロック状に混入する。
5．5Y2/1　黒色粘性シルトに、酸化鉄を含んだ10YR5/2灰黄褐色砂質シルトが帯状に混入する。
6．10YR2/1　黒色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色細砂がブロック状に混入する。炭化物を含む。
7．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色細砂が粒状に少量混入する。

0　1m
1：40

第９図　遺構実測図（６）　ＳＫ

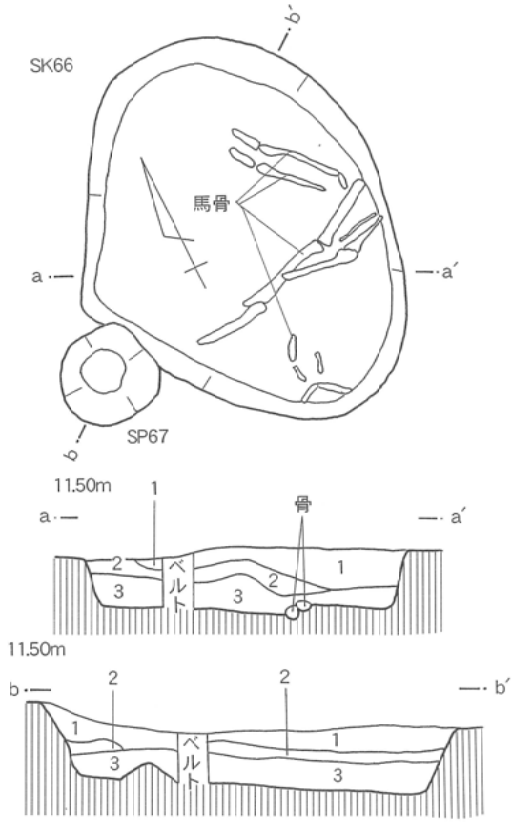


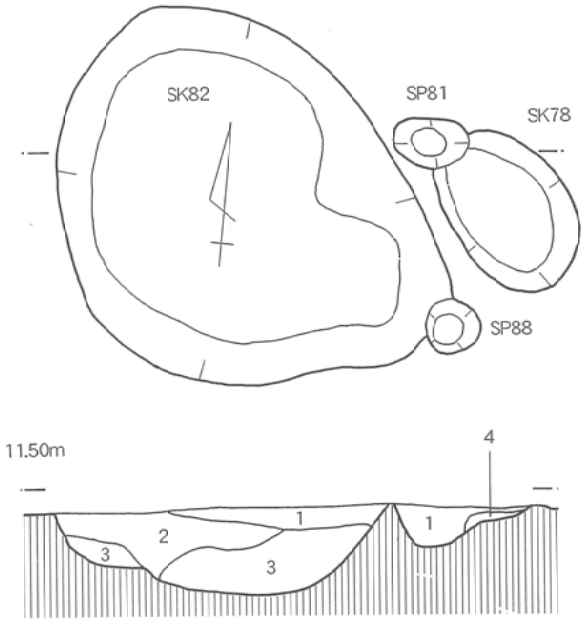
ＳＸ３８・ＳＫ３９

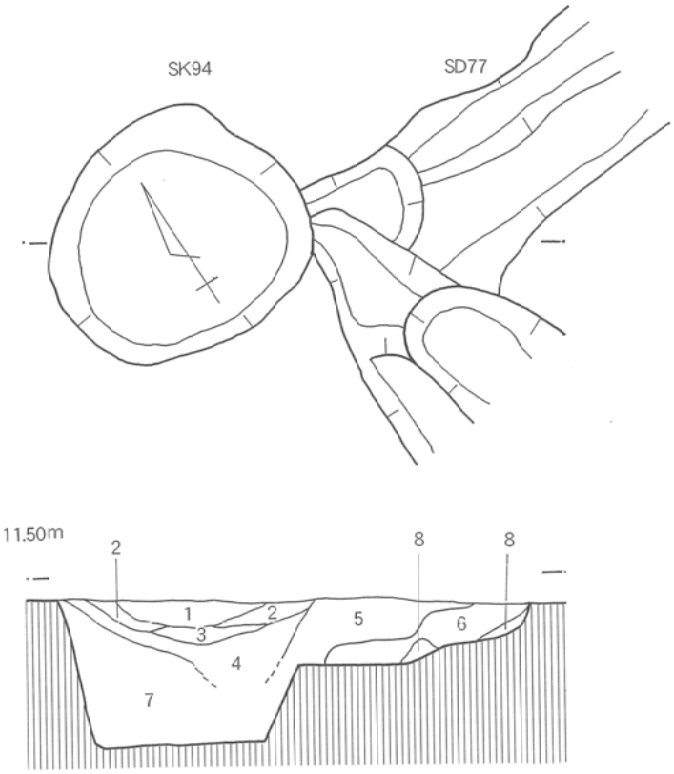
1．7.5YR4/6　褐色粗砂。
2．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色砂質シルトがブロック状に多量混入する。炭化物を含む。
3．10YR2/2　黒褐色砂質シルトに、粗砂が混入する。10YR5/2灰黄褐色砂質シルトがブロック状に混入する（基本層序Ⅲの最下部）。
4．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、粗砂が混入する。炭化物を含む。
5．2.5GY5/1　グライ化したオリーブ灰色細砂（墳砂）。
6．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2黄褐色砂質シルトがブロック状に少量混入する。
7．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐粘性シルトがブロック状に混入する。
8．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、砂が混入する。
9．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐砂質シルトがブロック状に少量混入する。
10．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色砂質シルトと、2.5Y2/1黒色シルトがブロック状に混入する。
11．10YR4/2　灰黄褐色砂質シルトに、10YR3/1黒褐色砂質シルトと、10YR5/2灰黄褐色砂質シルトがブロック状に混入する。
12．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色粘性シルトがブロック状に多量混入する。
13．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR5/2灰黄褐色粘性シルトがブロック状に混入する。酸化鉄を含む

0　1m
1：40

第10図　遺構実測図（7）　ＳＫ







ＳＫ６６・ＳＰ６７

1．10YR3/2　黒褐色砂質シルトに、粗砂が混入する。10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトが粒状かつブロック状に多量混入する。焼土粒・炭化物を含む。
2．7.5YR4/6　褐色砂質シルトに粗砂が混入10YR5/2灰黄褐色色シルトがブロック状に混入。
3．2.5Y3/1　黒褐色砂質シルトに粗砂が混入10YR5/2灰黄色褐色シルトがブロック状に混入。

ＳＫ７８・８２

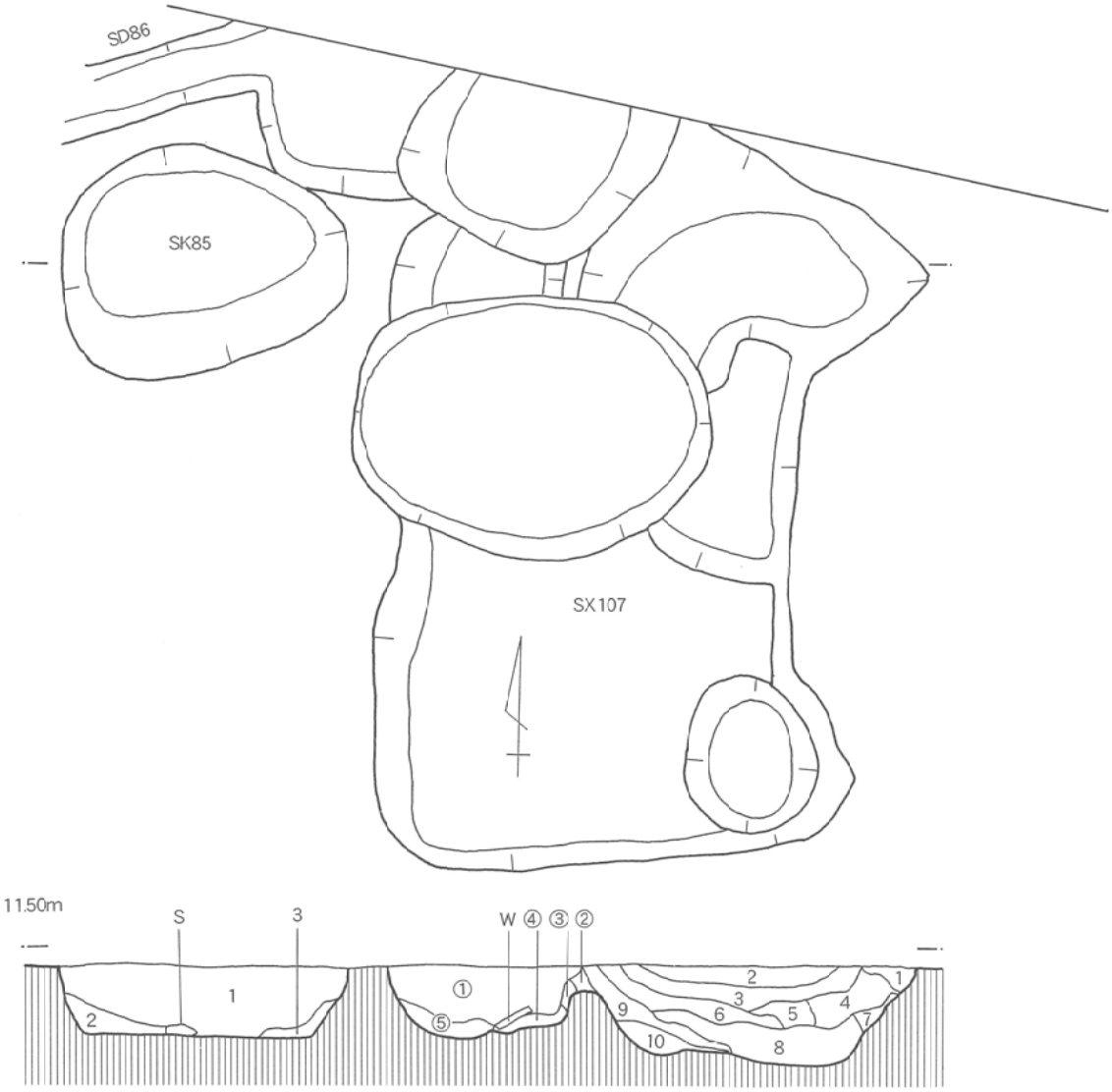
1．2.5Y3/2　黒褐色砂質シルト。酸化鉄・炭化物を大量に含む。
2．2.5Y3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトがブロック状に混入する。酸化鉄・炭化物を含む
3．10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルトに、2.5Y3/2黒褐色砂質シルトがブロック状に多量混入する。酸化鉄を含む。
4．10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルトに、2.5Y3/2黒褐色砂質シルトがブロック状に少量混入する。酸化鉄を含む。

ＳＤ７７・ＳＫ９４

1．2.5Y3/2　黒褐色砂質シルトに、10YR4/1黄灰色シルトがブロック状に少量混入する。
2．10YR4/6　褐色シルトに、2.5Y3/2黒褐色シルトがブロック状に混入する。
3．2.5Y4/1　黄灰色砂質シルト。酸化鉄を含む。
4．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、10YR4/6褐色シルトがブロック状に少量混入する。炭化物酸化鉄を含む。
5．10YR2/1　黒褐色砂質シルトに、2.5Y4/1黄灰色シルトがブロック状に少量混入する。炭化物を含む。
6．10YR4/2　灰黄褐色シルトに、10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトが粒状に少量混入する。
7．10YR2/2　黒色シルト。
8．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト。酸化鉄を含む。

0　1m
1：40

第11図　遺構実測図（８）　ＳＫ



ＳＫ８５
1．10YR3/1　黒褐色粘性シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色粘土と、10YR5/2灰黄褐色細砂がブロック状に混入する。
2．2.5Y3/2　黒褐色砂質シルト。酸化鉄有り。
3．5Y2/1　黒色粘性シルトに、10YR5/1褐灰色細砂がブロック状に混入する。

ＳＸ１０７
1．10YR3/1　黒褐色シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色シルトがまだら状に少量混入する。炭化物を含む。
2．10YR3/1　黒褐色粘性シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色シルトがまだら状に少量混入する。炭化物を含む。
3．10YR3/1　黒褐色シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入する。炭化物を含む。
4．10YR3/1　黒褐色シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色粘土と、同シルトがブロック状に混入多量混入する。
5．10YR3/1　黒褐色シルトに、10YR5/3にぶい黄褐色シルトと、N2/0黒色シルトがブロック状に混入する。
6．10YR2/1　黒色シルトに、N2/0黒色シルトと、10Y5/1灰色細砂がブロック状に混入する
7．10YR2/1　黒色シルトに、N2/0黒色シルトがブロック状に混入する。
8．N2/0　黒色シルトに、10Y5/1褐灰色粘土と、10YR2/1黒色シルトがブロック状に混入する。
9．2.5Y2/1　黒褐色シルトに、10YR5/1褐灰色粘土がブロック状に混入する。
10．2.5Y3/1　黒褐色シルトに、10YR5/1褐灰色粘土がブロック状に混入し、N2/0黒色粘土が帯状で混入する。

①．10YR3/2　黒褐色粘性シルト。酸化鉄・炭化物を含む。
②．5Y2/1　黒色粘性シルト。酸化鉄を含む。
③．10YR5/3　にぶい黄褐色シルトに、10YR3/2黒褐色シルトがブロック状に混入する。酸化鉄を含む。
④．10YR3/1　黒褐色粘性シルト。未分解有機物を含む。
⑤．2.5Y3/1　黒色シルト（純粋）。

0　1m
1：40

第12図　遺構実測図（9）　ＳＫ・ＳＸ

３　第２次調査検出遺構

井戸跡(第13図)　調査で井戸跡と確認されたのは、井戸眼と考えられる曲物が検出されたＳＥ250である。Ｃ１区の中央部Ｂ－35グリッドに位置し、他遺構との切り合い関係はない。径90㎝内外の不整円形を呈している。全周において急激に掘り込まれて底面に至り、底面西側に曲物が設置されている。この部分は円形状に一段深く掘り込まれ、曲物底までの深さは検出面から46㎝であった。井戸眼と推測される曲物は径34㎝・高さ15㎝程の大きさであったが、欠損した痕跡が認められ、本来の高さとは異なるものと理解された。半截した土層断面では垂直方向に覆土の別が観察され、掘り方埋土と井戸眼内堆積土の相異と想定された。構内からの出土遺物はなく構築時期等の推定は困難であるが、周辺包含層の出土遺物から察して19世紀代の所産と考えられる。

溝状遺構(第13～16図)　溝状遺構は６条を検出している。ここでは、藤島城外堀(二の丸)の一部の可能性も考えられるＳＤ222他について概述する。

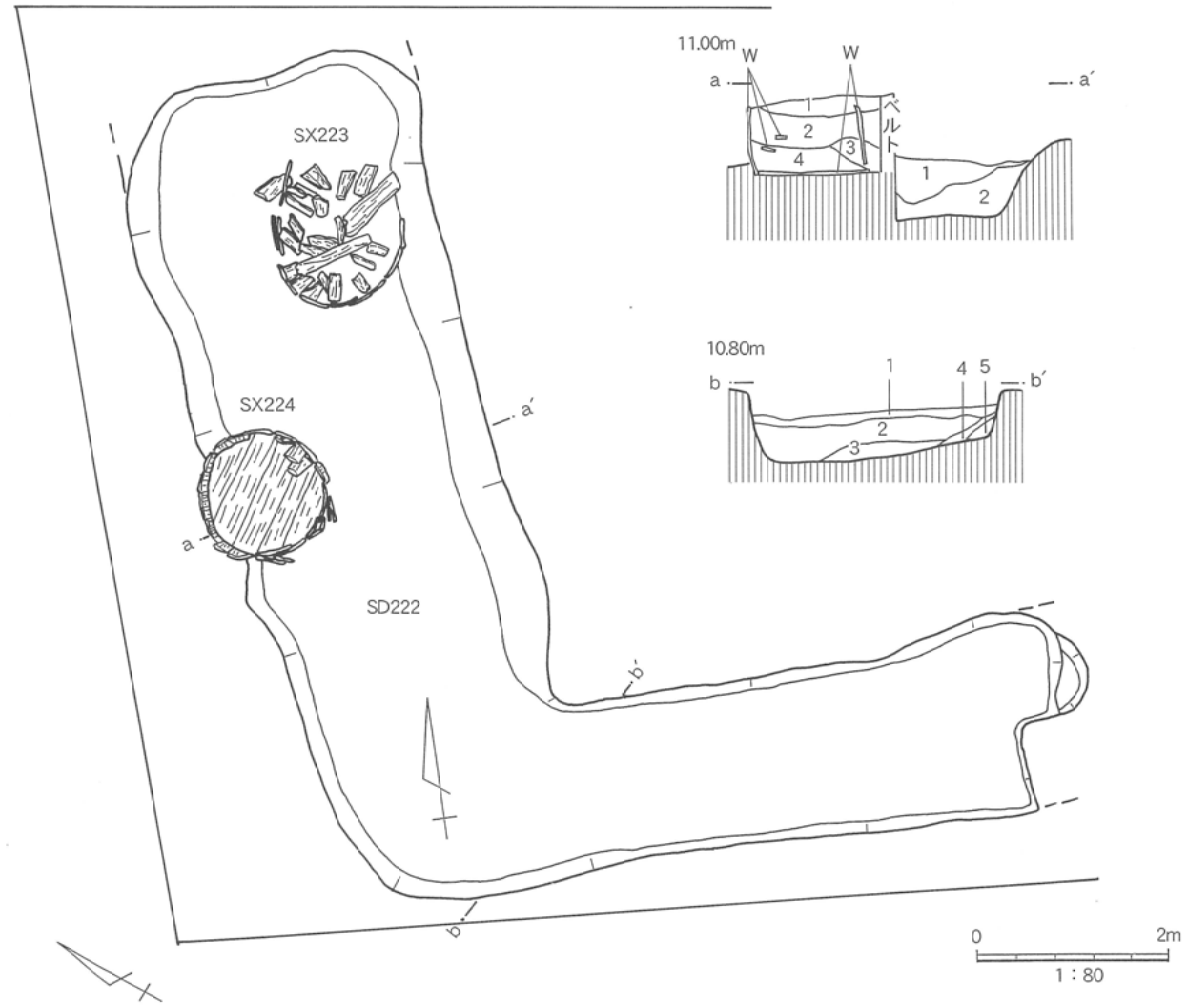
ＳＤ222(第13図)は、Ｃ２区西側において確認されたＬ字形の溝跡である。調査区壁際での検出であったため、全体の規模等は不明である。検出幅は最大4.2ｍで、さらに南・西側への広がりが予想される。調査区は現県道沿いであったことから、崩落防止のため壁際を除いて掘り下げを実施している。検出面上では、後世の産物である用途不明の木樽が２基遺存している。溝跡の深さは掘り下げ部において70～80㎝まで確認したが、壁際に向かってさらに深くなる様相が窺い知れた。覆土は主に泥炭性の粘質土が堆積しており、木片等の未分解有機物を多量に含んでいた。本遺構は規模やＬ字に曲がる形態などの特徴から推察して、藤島城の外堀に当たる可能性が指摘されるが、年代を比定できる出土遺物がないため推定の域を出ない。

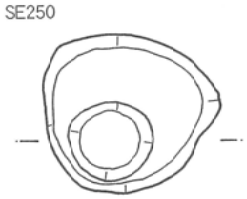
Ｃ１区北西部に位置するＳＤ255(第14図)は、舌状に伸びる溝状の掘り込みである。東端が丸く収まる形状で、西側は調査区外へ続く。西側へ行くほど深さが増し、底面の傾斜が認められる。東端部には径80㎝程の木樽が、検出面からやや浮いた状態で遺存している。出土遺物は磁器の細片がほとんどで、時期を判断できる資料はない。

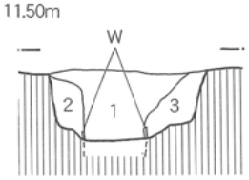
その他、Ｄ区検出のＳＤ265・274やＣ６区のＳＤ205等の溝跡は、明治期の地籍図に見られる水路跡と考えられるものである。

土坑等(第17・18図)　Ｃ１・２区を中心に、53基の遺構を土坑として登録した。形状や規模・掘り込みの深さ等様々であるが、構内に遺物を伴うものは極く少数であった。以下に、実測図掲載した何基かについてその概要を記す。

ＳＫ230(第18図)はＣ１区東部中央において検出された土坑で、東側に隣接するＳＫ228と重複関係にある。長径130㎝・短径74㎝を測る８の字状の楕円形を呈し、急激に掘り込まれるため周壁の立ち上がりが垂直的となる。確認面から70㎝程で底面に至り、底面には人頭大の礫３個が認められた。本土坑は平面規模に比較して深く掘り下げられることが特徴で、底面のグライ化した砂質層からは恒常的に湧水があった。これらの事由から察して、素掘りの井戸跡の可能性も考えられる。なお、黒色粘質土を基調とした覆土内を含め時期を推定できる出土遺物がなく、構築年代等は不明である。







ＳＤ２２２・ＳＸ２２４

ａ－ａ'

ＳＸ２２４

1．2.5Y3/1　黒褐色シルトに、2.5Y4/1黄灰シルトが粒状に少量混入する。
2．2.5Y3/1　黒褐色シルトに2.5Y4/1黄灰シルトと、2.5Y2/1黒色砂質シルトが粒状に少量混入する。
3．N2/0　黒色砂質シルト。
4．2.5Y2/1　黒色砂質シルト。

ＳＤ２２２

1．10YR2/1　黒色シルトに、10YR3/1黒褐色シルトがブロック状に少量混入する。未分解有機物有り。
2．10YR3/1　黒褐色粘性シルト（純粋）。

ｂ－ｂ'

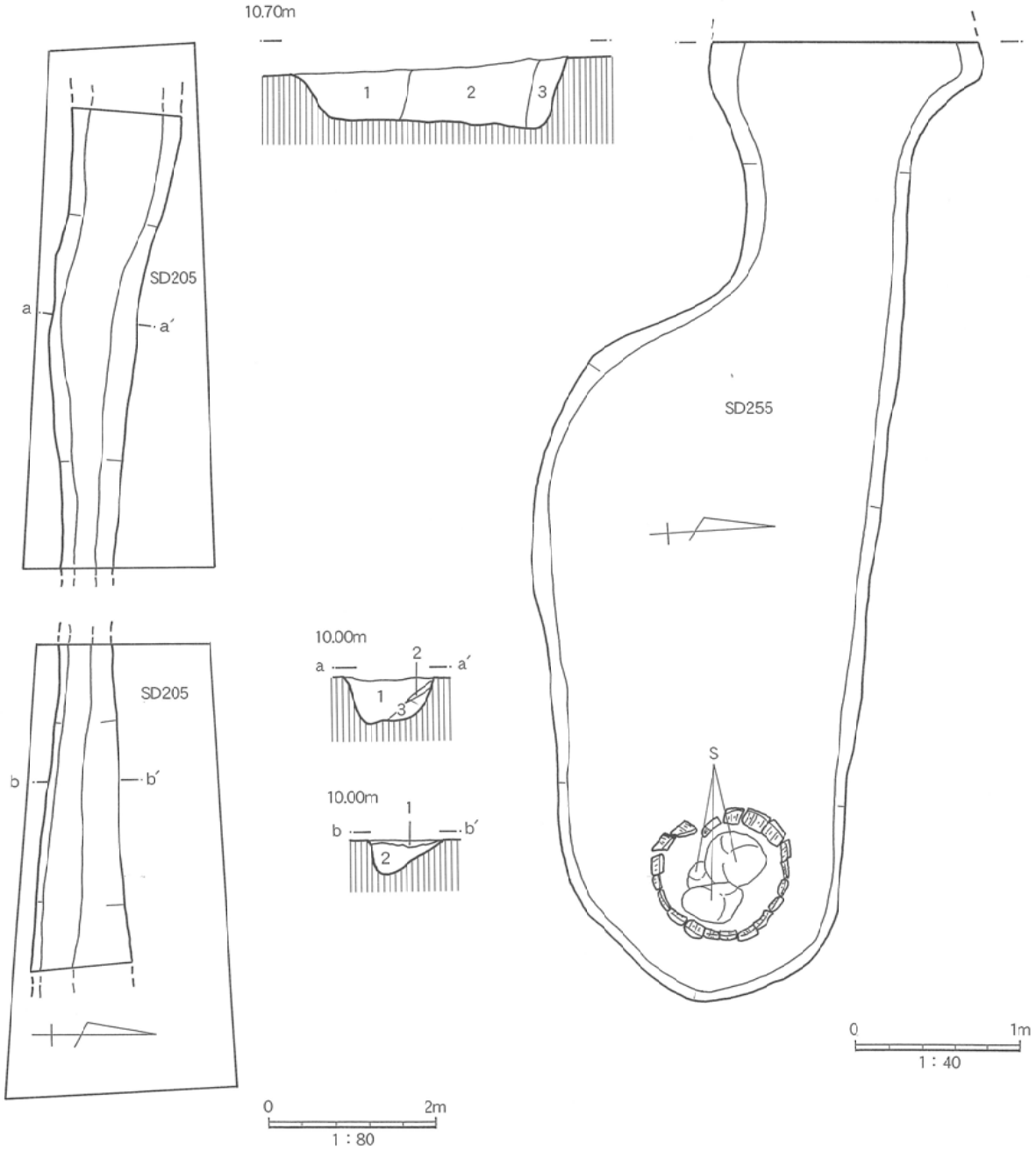
1．10YR2/1　黒色シルトに10YR4/1褐灰色シルトが粒状かつブロック状に混入する。
2．2.5Y3/1　黒褐色シルトに、10YR4/1褐灰色シルトが粒状かつブロック状に混入する。炭化物を含む。
3．2.5Y4/1　黄灰色粘土に、10YR4/1褐灰色シルトが粒状に混入する。
4．10YR4/1　褐灰色シルト。
5．10YR4/1　褐灰色シルトに、10YR4/1褐灰色シルトが粒状に混入する。

ＳＥ２５０

1．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、7.5Y4/1灰色砂質シルトがブロック状に少量混入する。
2．2.5Y4/1　黄灰色砂質シルトに、7.5Y4/1灰色砂質シルトがブロック状に少量混入する。
3．2.5Y2/2　黒褐色砂質シルトに、7.5Y4/1灰色砂質シルトがブロック状に少量混入する。

0　1m
1：40

第13図　遺構実測図（10）　ＳＤ・ＳＸ



ＳＤ２０５

ａ－ａ'

1．10YR3/1　黒褐色シルトに、10YR4/1褐灰色シルトが粒状かつブロック状に混入する。炭化物有り。
2．2.5Y2/1　黒色シルトに、10YR4/1褐灰色シルトがブロック状に混入する。炭化物を含む。
3．10YR4/1　褐灰色シルトに、2.5Y2/1黒色シルトがブロック状に混入する。炭化物を含む。

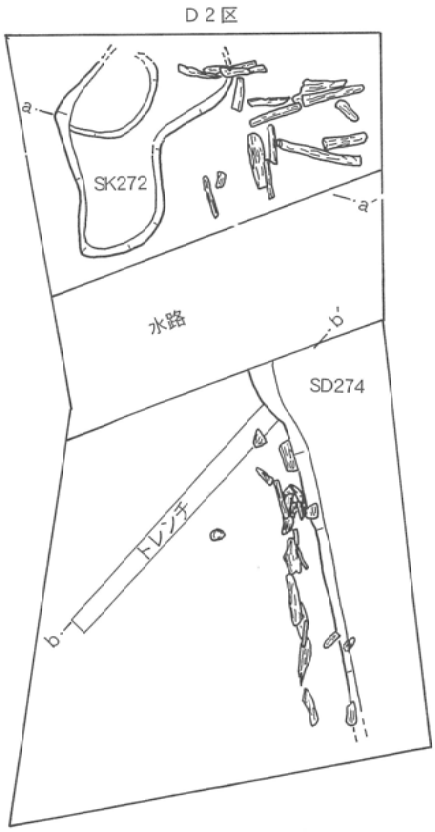
ｂ－ｂ'

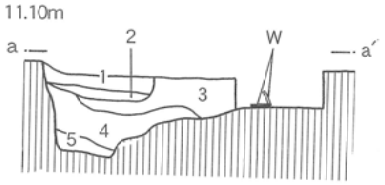
1．10YR3/1　黒褐色粘土に、2.5Y4/1黄灰色粘土が粒状かつブロック状に混入する。
2．2.5Y5/1　黄灰色粘土に、5Y4/1灰色砂質シルトが粒状かつブロック状に混入する。

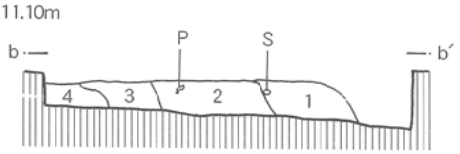
ＳＤ２５５

1．10YR4/1　褐灰色砂質シルトに、10YR2/1黒色シルトがまだら状に多量混入する。
2．7.5Y2/1　黒色シルトに、10YR3/1黒褐色粘土がブロック状に少量混入する。
3．10YR3/1　黒褐色粘土に、10YR4/1褐灰色粘土がブロック状に少量混入する。

第14図　遺構実測図（11）　ＳＤ

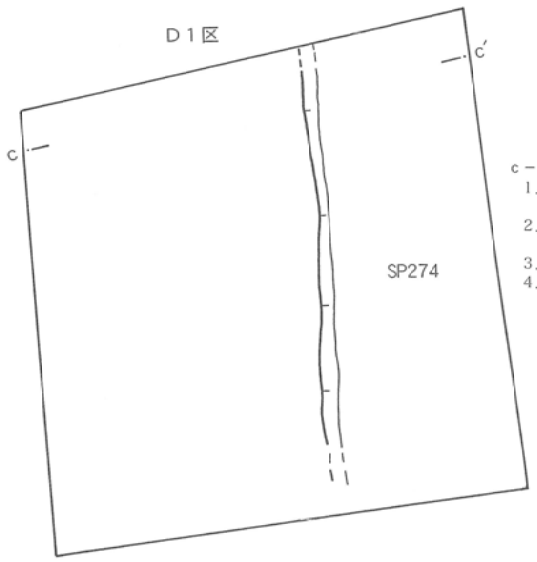


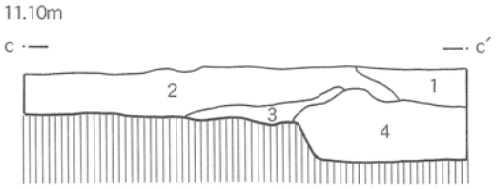




a－a'
1．10YR2/1　黒色粘性シルトに、2.5YR3/1黒褐色粘性シルトがブロック状に混入する。
2．2.5Y4/1　黄灰色砂質シルトに、2.5Y3/1黒褐色砂質シルトがブロック状に混入する。
3．2.5Y3/1　黒褐色砂質シルトに、2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが粒状かつブロック状に混入する。炭化物・未分解有機物を含む。
4．2.5Y3/1　黒褐色砂質シルトに2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトがブロック状かつまだら状に混入炭化物・未分解有機物あり。
5．2.5Y2/1　黒色砂質シルトに、粗砂が混入する。2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトが粒状に少量混入する。

b－b'
1．10YR3/1　黒褐色砂質シルト。礫・未分解有機物が混入する。
2．10YR3/1　黒褐色砂質シルトに、2.5Y4/2暗黄灰色砂質シルトがブロック状に混入する。
3．2.5YR4/1　黄灰色砂質シルトに、10YR3/1黒褐色砂質シルトがブロック状に混入する。
4．2.5Y3/1　黒褐色砂質シルトに、2.5YR4/1黄灰砂質シルトが粒状に少量混入する。炭化物有り。

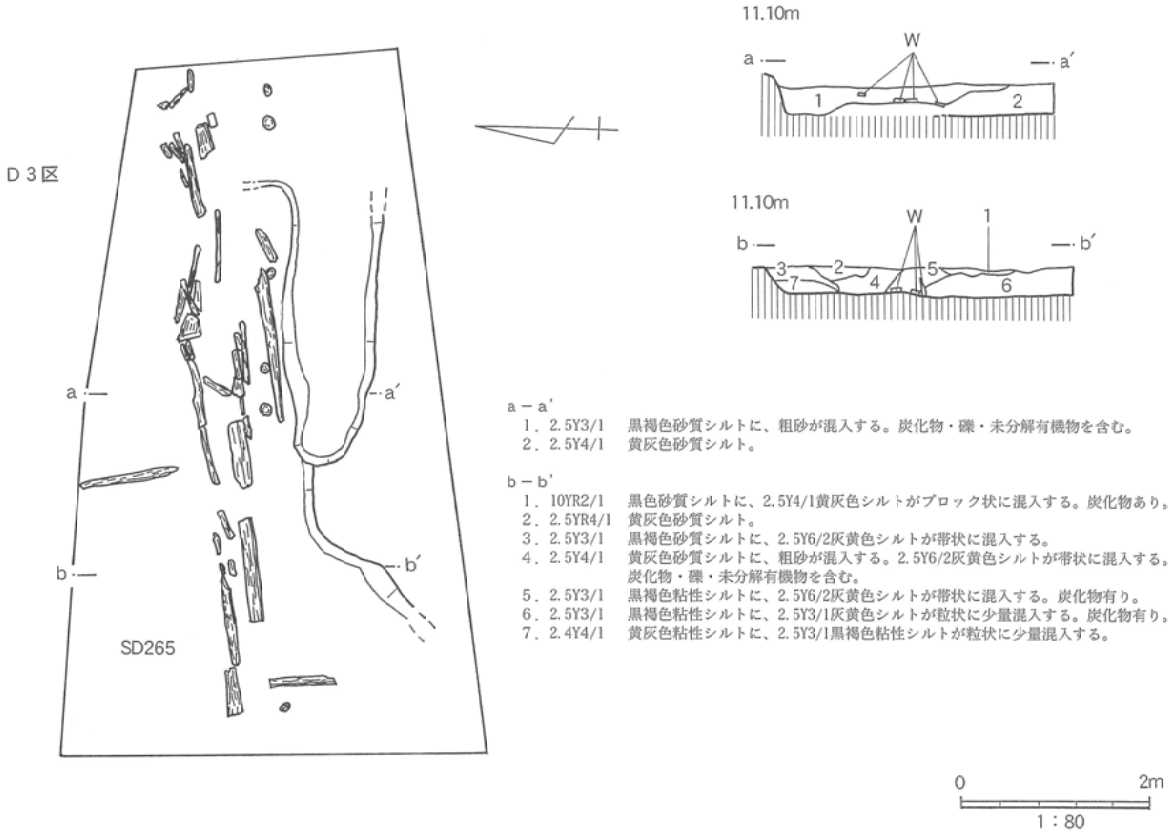




c－c'
1．2.5Y4/2　暗灰黄色粘性シルトに、2.5Y4/1黄灰色粘性シルトがブロック状かつまだら状に混入する。炭化物あり。
2．10YR3/1　黒褐色シルトに、2.5Y4/2暗灰黄色粘性シルトがブロック状に大量混入する。炭化物有り。
3．2.5Y3/1　黒褐色粘性シルトに、2.5Y4/1黄灰色粘性シルトが粒状に少量混入する。
4．2.5Y3/1　黒褐色シルト。炭化物を含む。

0　2m
1：40

第15図　遺構実測図（12）　ＳＤ



第16図　遺構実測図（13）　ＳＤ

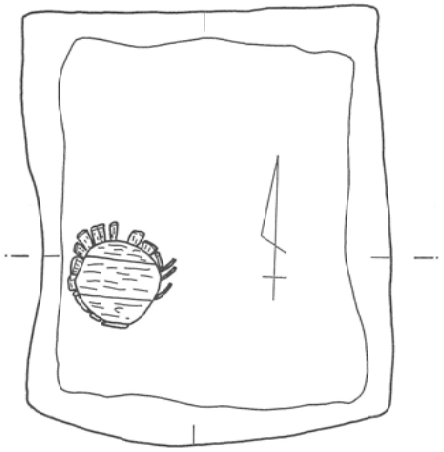
Ｃ３区で検出したＳＫ201(第17図)は、方形様を呈する竪穴状の遺構である。東西190cm・南北230cmの大きさで、約50cmの深さを測る。３層からなる覆土は、黒色粘土層の間に黄灰シルト層を挟む水平な堆積状況を示し、水位の変動が原因した結果と理解される。粘土層はＳＤ222同様、炭化物や未分解有機物に富んだ腐植土である。底面西側からは、遺構に伴うと想定される中板を要する木樽が検出された。

ＳＫ221(第17図)はＣ２区のＡ－31グリッドに位置し、略円形を呈する土坑である。他遺構との重複はなく、径120cm内外・検出面からの深さ46cm程を測る。掘り方は全周において均等な傾斜で行われ、ほぼ平坦な底面に至る。５層の別に分けた覆土は、基本的に黒色土・黒褐色土・褐色土の３層準からなる。

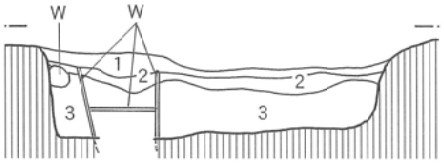
Ｃ１区Ｂ・Ｃ－35グリッドに位置するＳＫ241(第18図)は、隅丸方形のプランを持つ土坑である。南北長軸175cmを測る平面規模を有し、南東隅部でＳＫ240と切り合い関係にある。深さ40cm前後で、底面はほぼ平坦である。廃棄後、遺構の北側から埋まっていった様相が覆土の堆積状況から判断され、覆土には４層の別が観察された。

ＳＫ248(第17図)はＣ１区北辺中央域で検出した。長径160cm・短径140cmを測り、平面形が隅丸長方形となる土坑である。掘り方は検出面から10cm程下げられた後、底面中央部がさらに楕円状に落ち込み、最深部までは約30cmの掘り込みがなされる。３層からなる覆土は自然堆積の様相が窺われ、中央部に落ち込む形状に沿って埋積していったと理解された。遺物は近世磁器の細片が数点出土したが、時期を特定できるものではない。

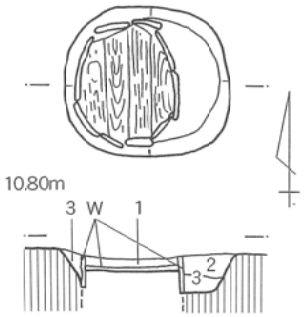
SK201



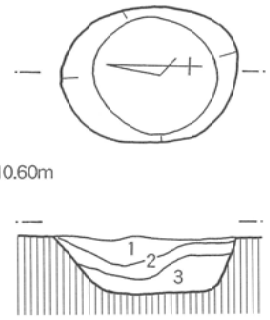
10.00m



SK215



SK225



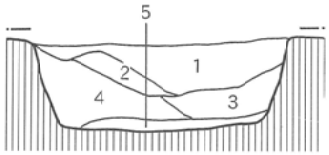
ＳＫ２１５
1．10YR5/3　にぶい黄褐色細砂に、10YR2/1黒色シルトがブロック状に少量混入する　小礫を大量に含む。
2．10YR2/1　黒色シルトに、10YR4/2灰黄褐色シルトがブロック状に混入する。
3．10YR4/2　灰黄褐色シルトに、10YR2/1黒色シルトがブロック状に少量混入する。

ＳＫ２２５
1．10YR2/1　黒色シルトに、2.5Y4/2暗灰黄色シルトが粒状に少量混入する。
2．2.5Y4/2　暗灰黄色シルトに、2.5Y2/1黒色シルトが粒状に少量混入する。
3．2.5Y2/1　黒色シルトに、7.5y4/1灰色粘性シルトがブロック状に混入する。

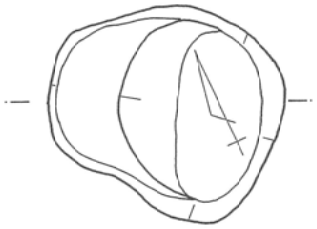
ＳＫ２０１
1．2.5Y3/2　黒褐色粘性シルトに2.5Y4/1黄灰色粘性シルトが帯状に混入する。炭化物を含む。
2．2.5Y4/1　黄灰色シルトに、2.5Y3/2黒褐色粘性シルトがブロック状に混入する。
3．2.5Y3/2　黒褐色粘性シルト。炭化物・未分解有機物を含む。

SK221

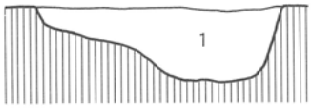
10.70m



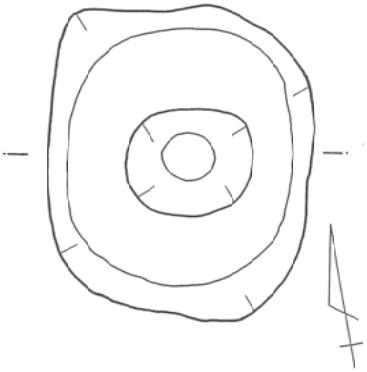
SK235



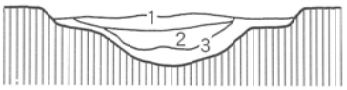
10.60m



SK248



10.60m



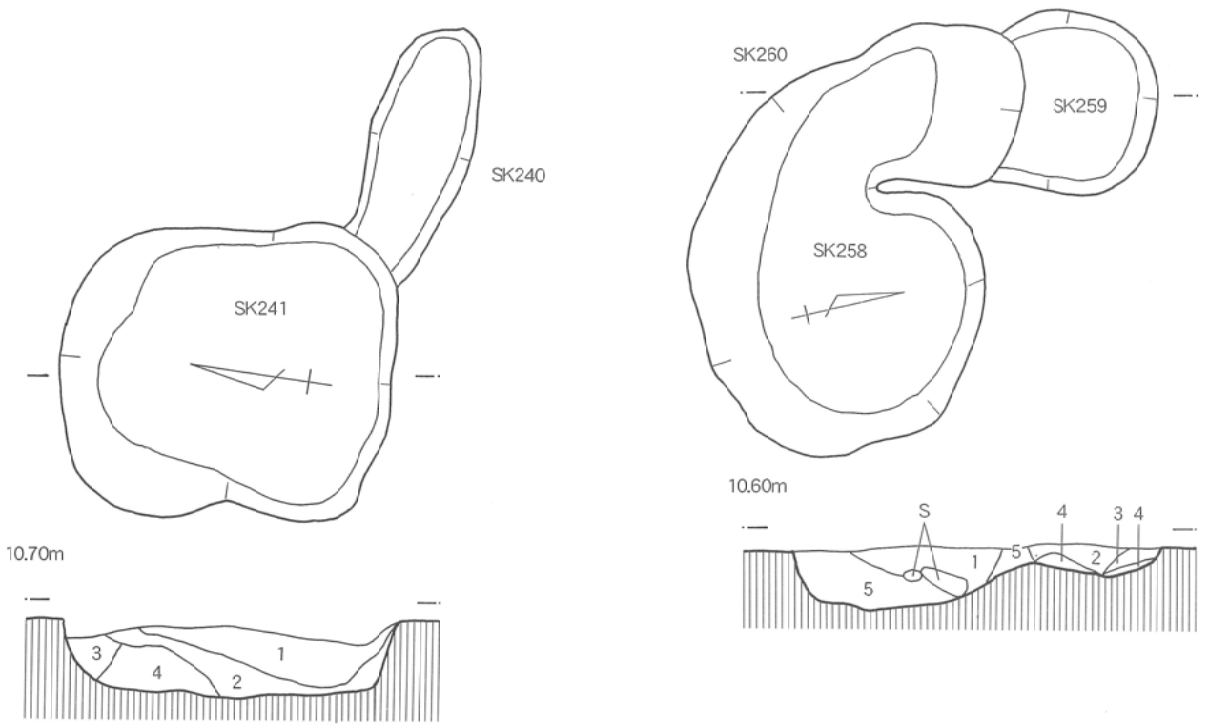
ＳＫ２２１
1．10YR2/1　黒色シルトに、10YR4/1褐灰色シルトがブロック状に少量混入する。炭化物を含む。
2．10YR3/1　黒褐色粘性シルトに、10YR4/1褐灰色粘性シルトと、同細砂がブロック状に少量混入する。炭化物・酸化鉄を含む。
3．10YR4/1　褐灰色粘性シルト。
4．10YR4/1　褐灰色粘性シルトに、5Y3/2オリーブ黒色粘性シルトがまだら状に混入する。炭化物・酸化鉄あり。
5．2.5Y3/1　黒褐色粘性シルトに、10YR4/1褐灰色粘性シルトが粒状に少量混入する。

ＳＫ２３５
1．10YR2/1　黒色シルトに、2.5Y4/1YR4/1黄灰色シルトがブロック状に混入する。

ＳＫ２４８
1．10YR2/1　黒色シルトに、2.5Y4/2暗灰黄色シルトがまだら状に混入する。
2．10YR3/1　黒褐色シルトに、10YR2/1黒色シルトがブロック状かつまだら状に混入する。
3．7.5Y4/1　灰色粘性シルトに、2.5Y4/2暗灰黄シルトがブロック状に混入する。

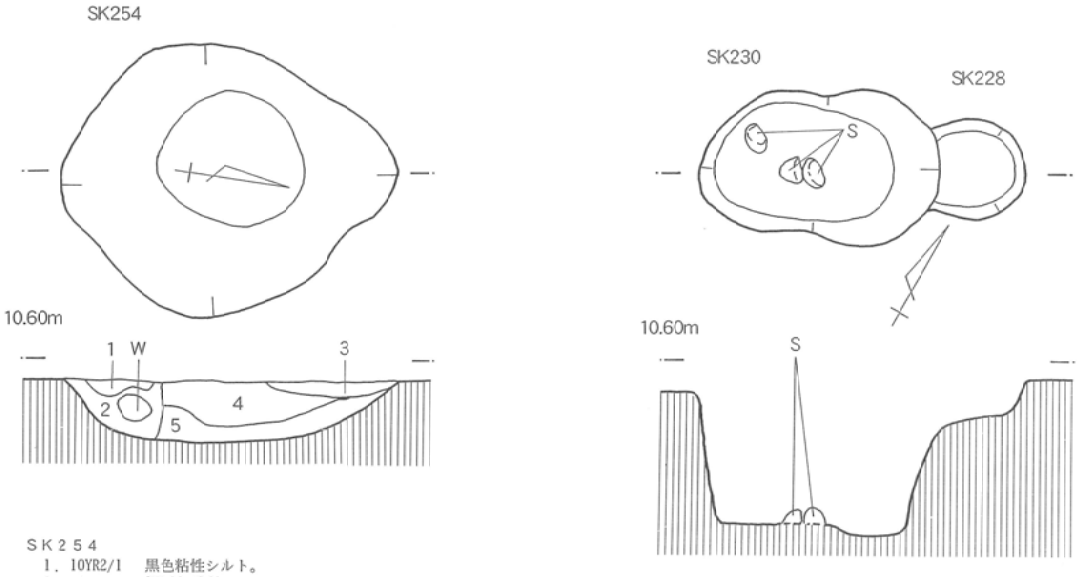
0　1m
1：40

第17図　遺構実測図（14）　ＳＤ



ＳＫ２４１
1．5Y4/1　灰色粘性シルトに、2.5Y5/2暗灰黄粘性シルトと、2.5Y2/1黒色粘性シルトが粒状かつブロック状に多量混入する。
2．2.5Y2/1　黒色粘性シルトに、2.5Y5/2暗灰黄粘性シルトが粒状かつブロック状に混入する。
3．5Y4/1　灰色粘性シルトに、2.5Y2/1黒色粘性シルトがブロック状に混入し、2.5Y4/2オリーブ褐色粘性シルトがまだら状に混入する。酸化鉄を含む。
4．３とほとんど同じであるが、2.5Y4/2オリーブ褐色粘性シルトの混入の割合が高い。

ＳＫ２５９・２６０
1．2.5Y2/1　黒色シルトに、2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトがブロック状に混入する。
2．2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルトに、2.5Y4/1黄灰色シルトがブロック状に混入する。
3．2.5Y3/1　黒褐色シルトに、2.5Y4/1黄灰色シルトがまだら状に混入する。
4．2.5Y4/1　黄灰色シルトに、2.5Y3/1黒褐色シルトがブロック状に混入する。
5．2.5Y4/1　黄灰色シルト。



ＳＫ２５４
1．10YR2/1　黒色粘性シルト。
2．10YR4/1　褐灰色砂質シルトに、2.5Y2/1黒色粘性シルトが粒状に混入する。
3．2.5Y4/2　暗灰黄色粘性シルトに、2.5Y2/1黒色粘性シルトが粒状に少量混入する。
4．2.5Y2/1　黒色粘性シルトに、2.5Y4/1黄灰色粘性シルトが粒状かつブロック状に混入する。
5．2.5Y4/1　黄灰色粘性シルトにと2.5Y2/1黒色粘性シルトと、2.5Y4/2暗灰黄色粘性シルトがブロック状に混入する。

0　1m
1：40

第18図　遺構実測図（15）　ＳＫ

Ⅳ　出土遺物

1　第１次調査出土遺物

第１次調査では、土器・陶器・磁器・瓦器・土製品・石製品・金属製品・木製品など多様な中近世の遺物が出土し、数量的にコンテナ20箱に相当した。その分布は遺構のそれと軌を一にしていると捉えられ、特にＢ区所在のＳＸ76･107の遺構内から多くの遺物が出土した。これらの年代は15世紀から20世紀前葉までの範疇で、主体的時期は18世紀後半～19世紀代に属するものであった。以下では、種別ごとに遺物の特徴等を記述する。なお、遺物個々の属性等については観察表(表３～11) を参照されたい。

かわらけ(第29図118・119)

ＳＤ23より破片資料で２点出土している。口径90㎜程の小型のもので、ロクロ成形品である。底部が遺存する118は回転糸切りによるもので、119の外面には指押痕が観察される。胎土は精製されているが、一部に砂粒の混入が認められる。118の口縁部内外面に煤が付着しており、燈明皿としての使途が窺われる。年代的には、15世紀代の所産と考えられる。

陶　器(第19～21図)

中世陶器の珠洲・古瀬戸、近世陶器の瀬戸・肥前・唐津・萩・備前・大宝寺の各地製作品が出土している。

中世陶器の珠洲(１～７)の器種に甕･擂鉢がある。甕は口縁部および体部の小破片であり、内外面調整は平行タタキ・楕円アテによって行われる。擂鉢も全形の判明する資料はなく、摺り目の単位が10条と12条のものが認められる。９は古瀬戸の卸皿である。口縁部の細片で、自然釉が認められる。

近世陶器の瀬戸(11・12・15・22)には碗・皿・壺・甕の各器種がある。碗・皿は口径115㎜前後のもので、11の内面に草花サビ絵が､12の見込みに菊文型押しが施される。唐津焼(13・23～25)の器種には碗・甕・捏鉢がある。13はケズリ出し高台を有する輪花型の碗で、飴釉が施される。24は捏鉢の口縁部資料で、灰釉が施され、外面に波型を呈する刷毛目痕を有する。21は器種不明であるが、萩焼の染付けである。透明釉が施され、文様は筆描きによるものである。34～37は備前焼の擂鉢である。法量の相異から大・小の２種に分類され、前者は口径310㎜を超えるもの、後者は235㎜内外を測るものと認識される。大宝寺焼(17・26～30)には甕と筆筒が認められた。褐釉または海鼠釉が施され、17の筆筒は口縁に打痕があり、後に灰落としに転用されたと考えられる。

磁　器(第22～29図)

近世の国産品で、坏・碗・皿・徳利・蓋(身)・紅皿・レンゲ・仏花瓶・仏飯器などの各器種が出土している。

坏・碗では瀬戸および肥前産が大半を占め、唐津と伊万里のものが数点存在する。39～43は瀬戸の坏である。39には焼継ぎ痕が認められ、42の底部には「玩品」の銘が打たれる。72の碗は、端反型を呈する形態的特徴が窺われる。44～57・59～70は肥前の坏・碗である。47は

底部に「大明年製」の銘が打たれる。50～52は波佐見の「くらわんか碗」である。53～55は筒型形状の湯呑み茶碗で、見込みにはコンニャク印判が認められる。59はⅢ期、17世紀後半に比定されるもので、外面文様に網目文が施される。63は広東碗で、焼継ぎ痕が認められる。丸型形態の66は、その特徴から村木窯の所産と判断されるものである。58は伊万里の赤絵茶碗で、鮮やかな色絵が特徴的である。方格区画内に「寿」の文字が認められる。71は唐津の平茶碗で、体部は直線的に外傾する。鉄釉によって全面施釉される。

皿は瀬戸・肥前の他、有田の色絵皿が出土している。73～76・78・88は瀬戸の皿で、口径100㎜前後のものと200㎜超を測る大小の２種を認める。73・74は輪花型の口縁形態を呈すもので、73の底部には「成化年製」の銘が入る。75は見込みに「渦福」の略書がある。76の染付けは、片刷り紙絵付けによるものである。78の外面には「富貴牡丹花」の銘が認められる。88は輪花型の大皿である。肥前の皿(77・81～86・89・90)には、法量的な大・中・小が存在する。蛇の目高台を持つ83は、波佐見の「くらわんか皿」で釉ハギを有する。84はⅣ期に位置付けられる中皿である。90は口径148㎜を測る段重皿で、梅花散文が施される。有田焼の色絵皿14号である87は、口縁が輪花型となる。

91～94の４点は瀬戸の徳利である。91・92は遠山山水絵柄の揃い徳利で、92の底部には「兵」の墨書銘が記される。109は肥前の御神酒徳利と思われる。

蓋身(95)と蓋３点(96～98)は、肥前焼のものである。96には青白釉が施釉され、蛸唐草文が描かれる。17世紀末の年代観が与えられるものである。

99・100は対になる備前の口紅皿で、白色釉が手持ち掛けによって施される。101は肥前の紅皿で、102はそれとセットになる蓋である。

その他、文房具の水滴(104・105)、仏花瓶(106～108)、仏飯器(110～113)、玩具の類(115～117)が出土している。104は型押し成形される箱型のもので、箪笥様である。105は鷹型品の頭部資料である。108は灰釉が施され、有田焼の青磁かと思われる。112は有田色絵である。玩具には仏花瓶・御神酒徳利・鉢・福助人形が認められた。

瓦質土器・陶器(第29～31図)

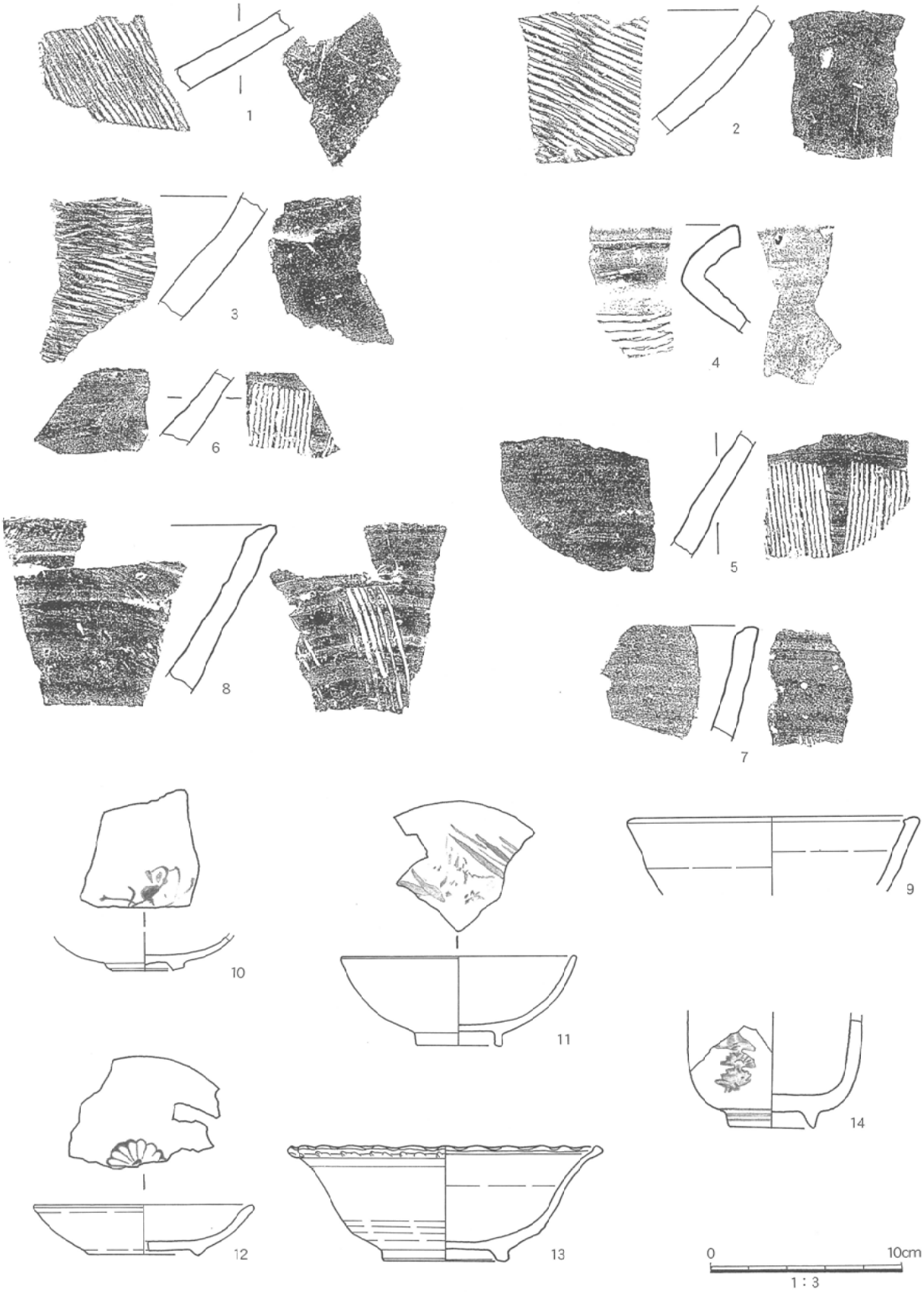
在地系もしくは江戸在地系のもので、19世紀代の産物である。瓦質土器の器種に焙烙(120～122)、コンロ(123～125)、風口(126)、七輪(127)、手あぶり(128・129・133)、火鉢(130)、炭壺(131)・甕(132)とその蓋(134～136)などがある。128は口縁部と体部中央に側帯があり、この部分に褐釉が施される。また、二対ある把手には獣面彫刻が施される。137は擂鉢で、赤褐色胎土の瓦質陶器である。

土製品・石製品・金属製品(第31図138～148)

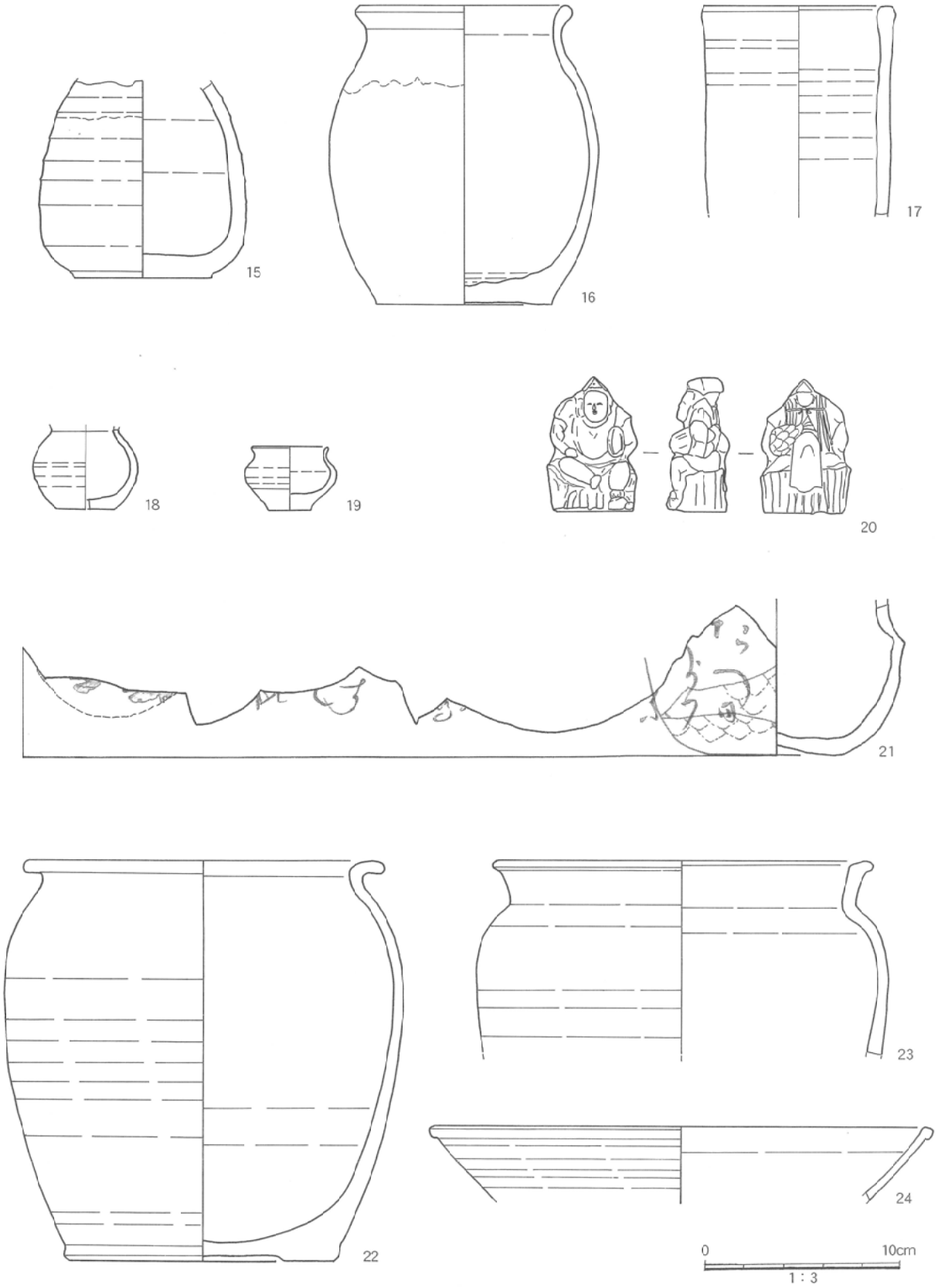
土製品では型押し成形の雛人形が４点出土している。138は官女、139・140は内裏雛、141は母子像と認識される。

石製品では硯２点(142～143)と、砥石３点(144～146)が認められた。

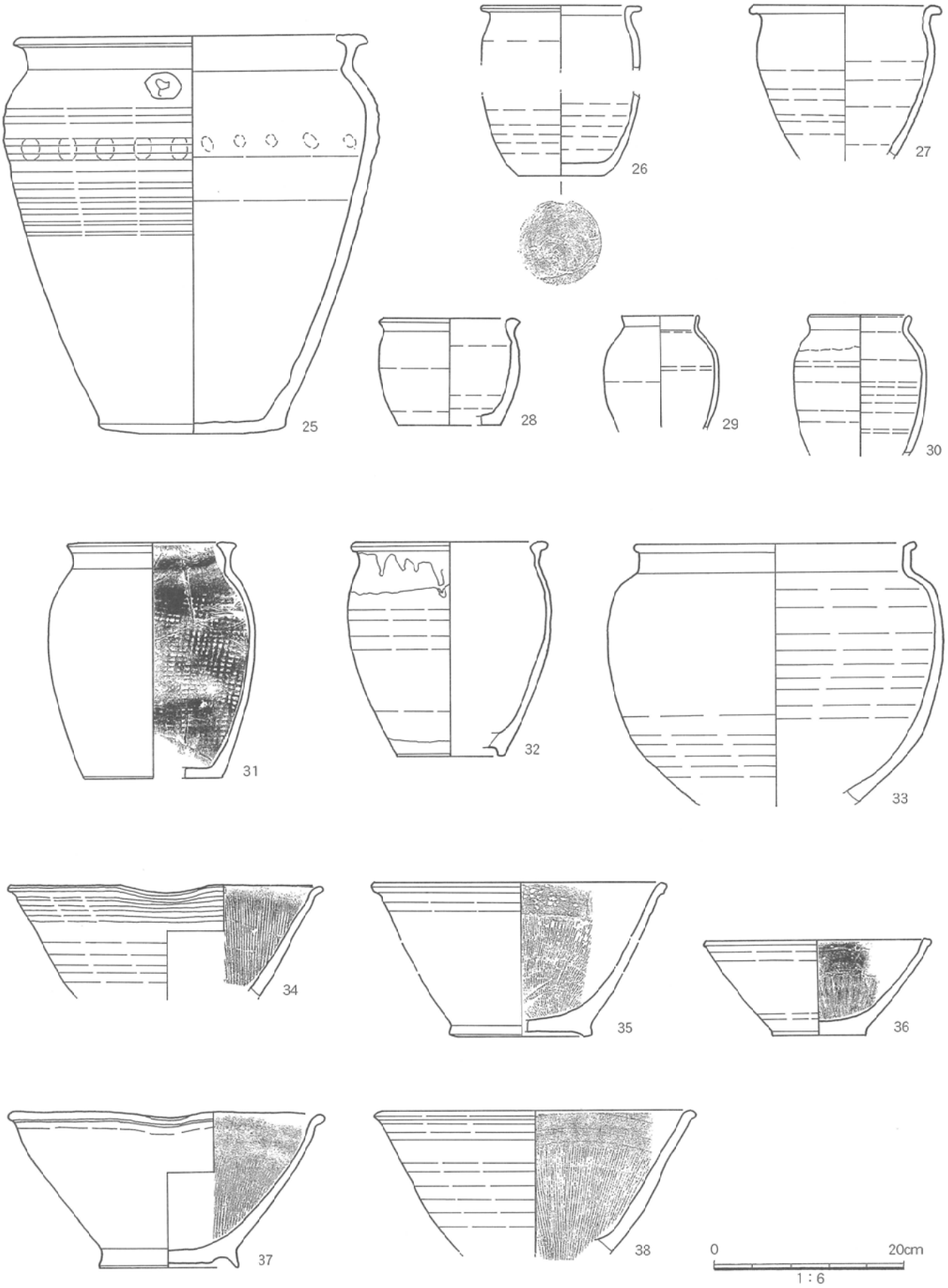
金属製品では寛永通寶(147・148)が２点出土している。



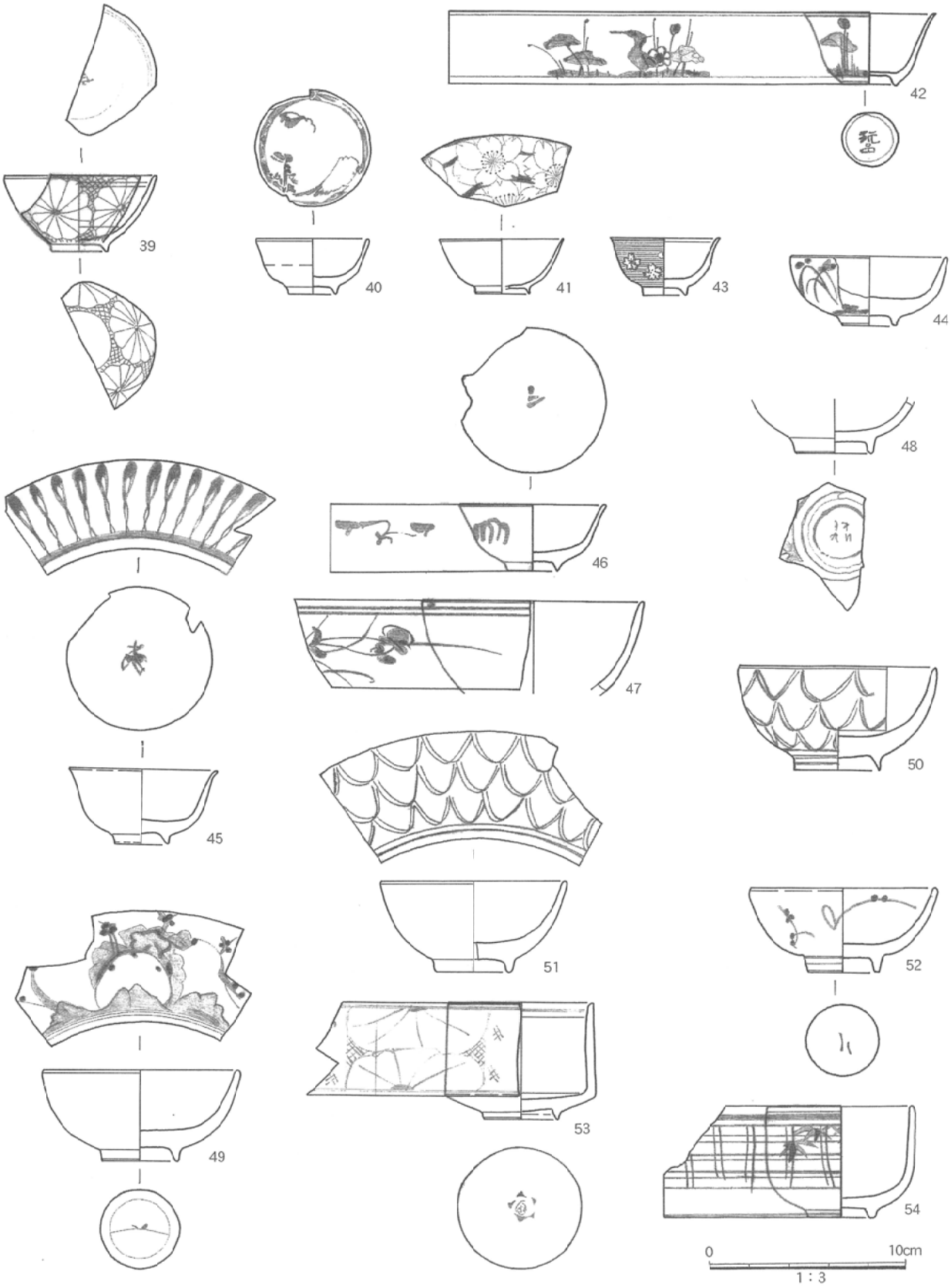
第19図　遺物実測図（1）　陶器



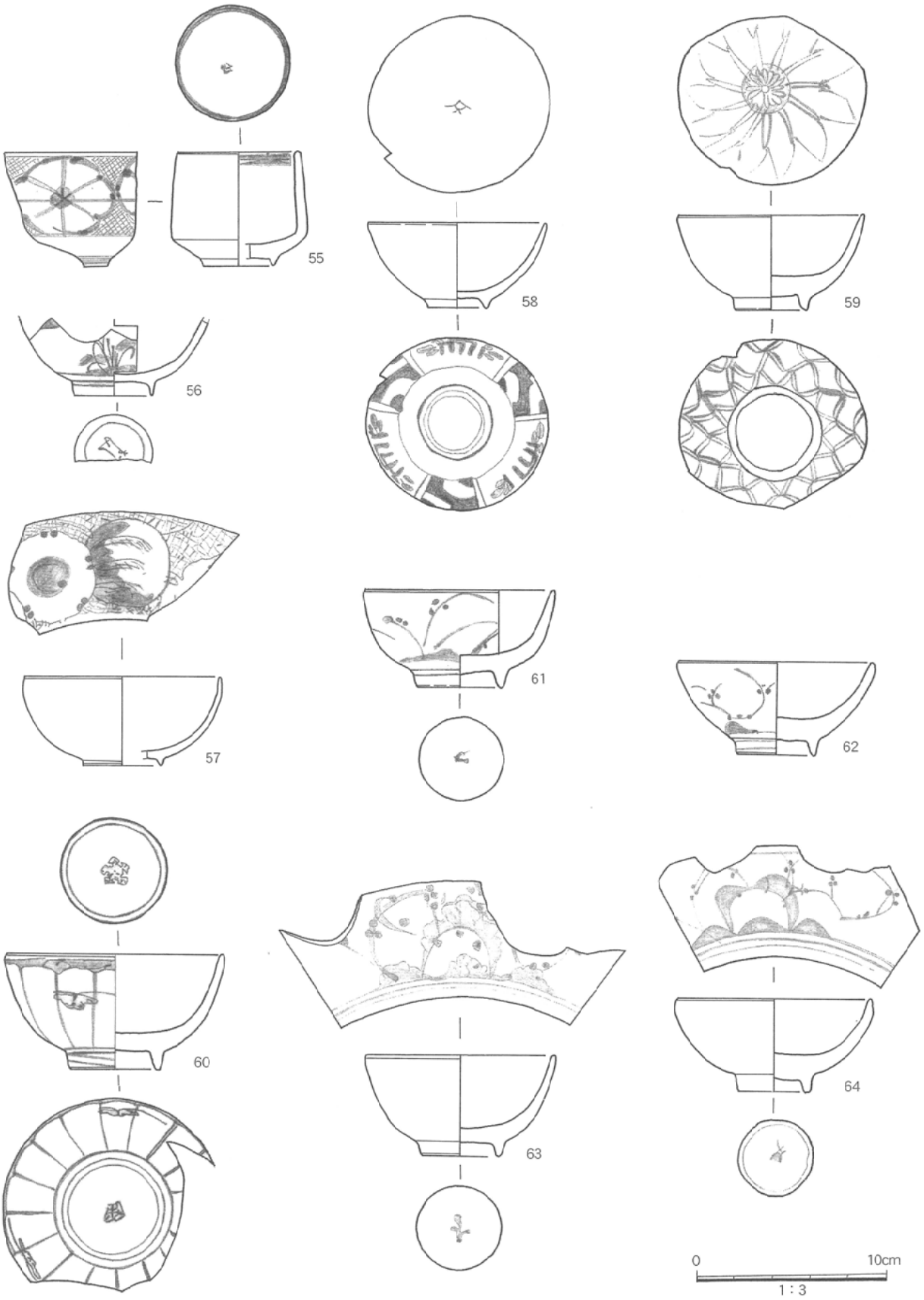
第20図　遺物実測図（2）　陶器



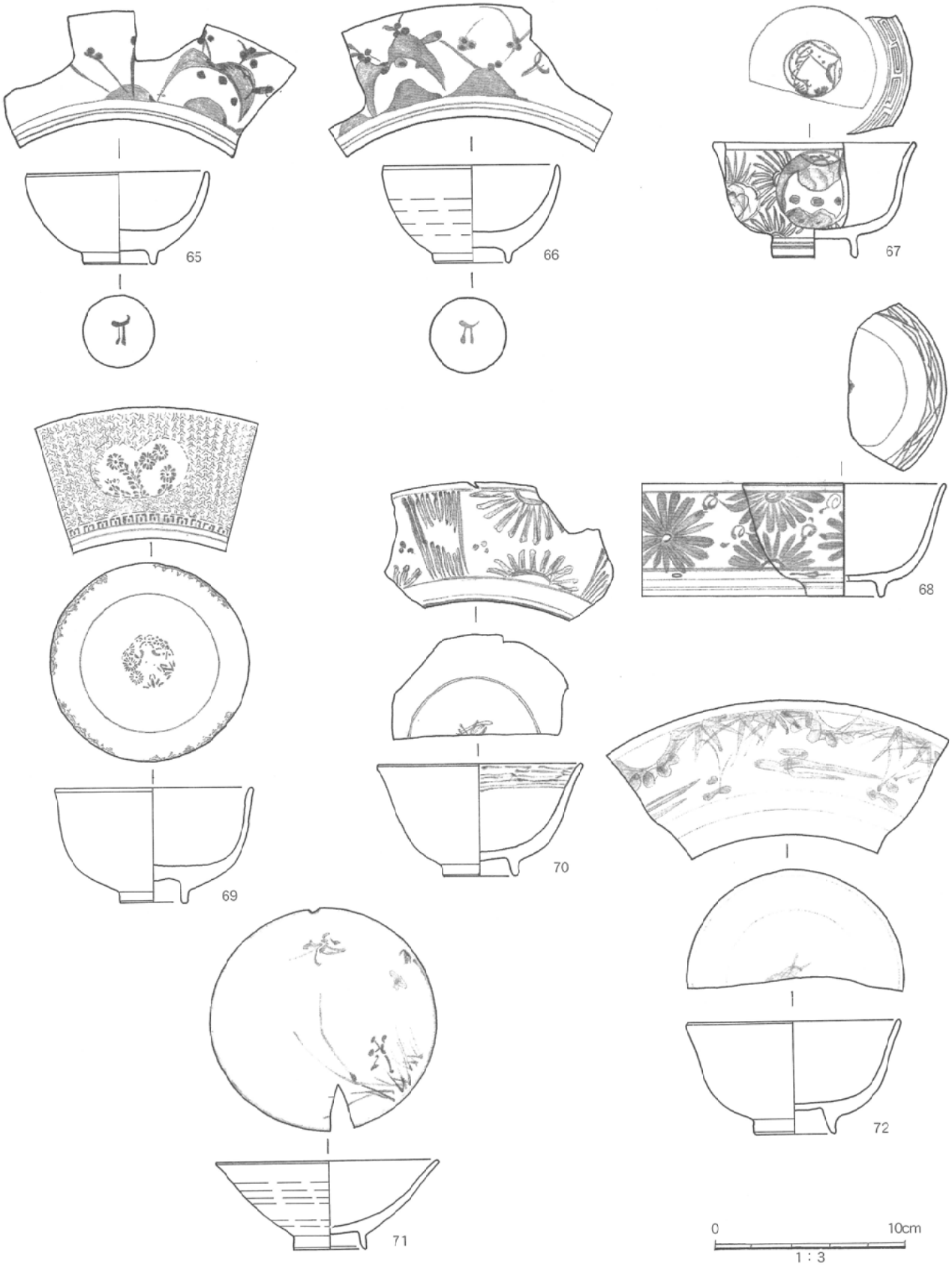
第21図　遺物実測図（3）　陶器



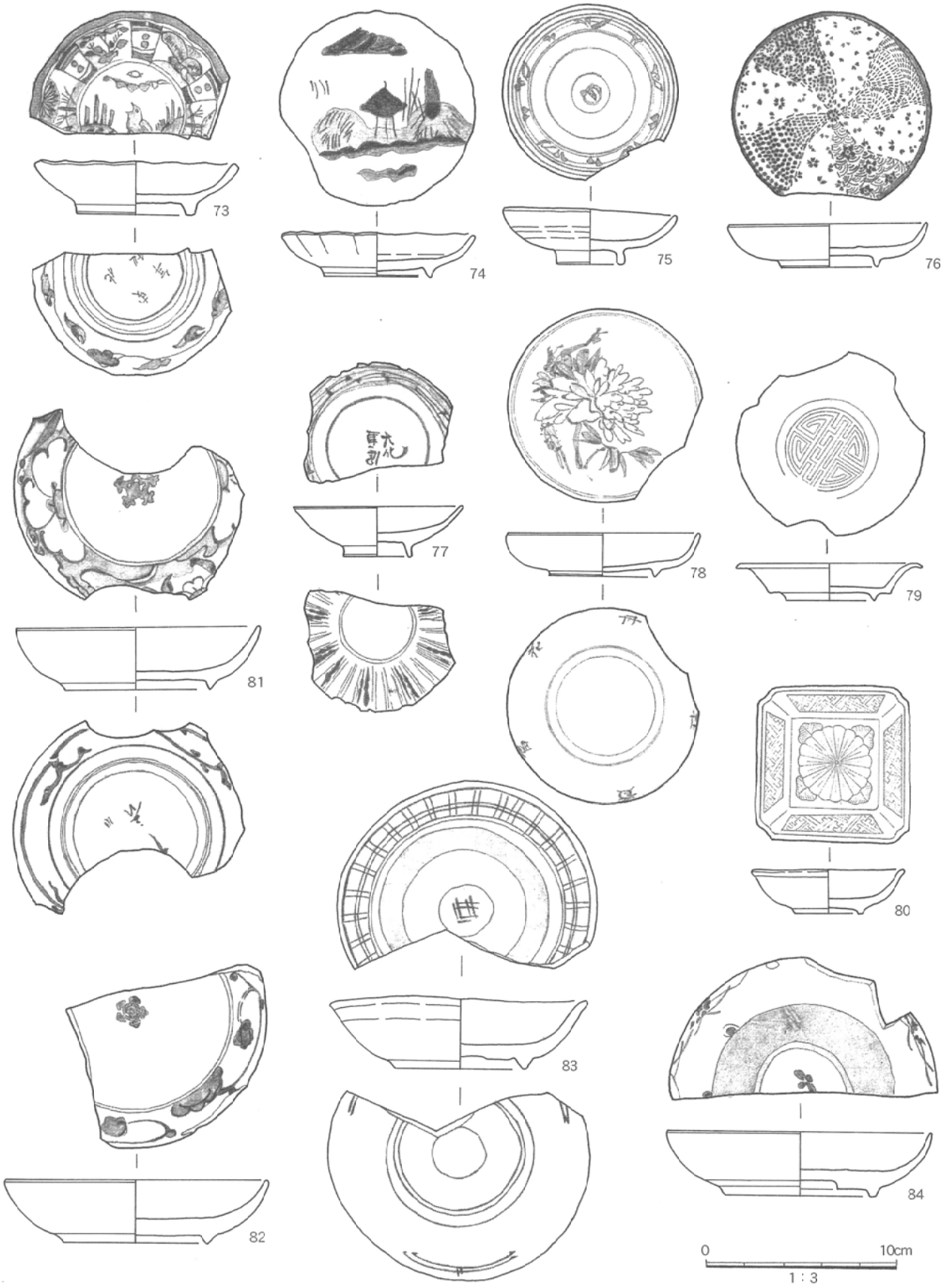
第22図　遺物実測図（4）　磁器



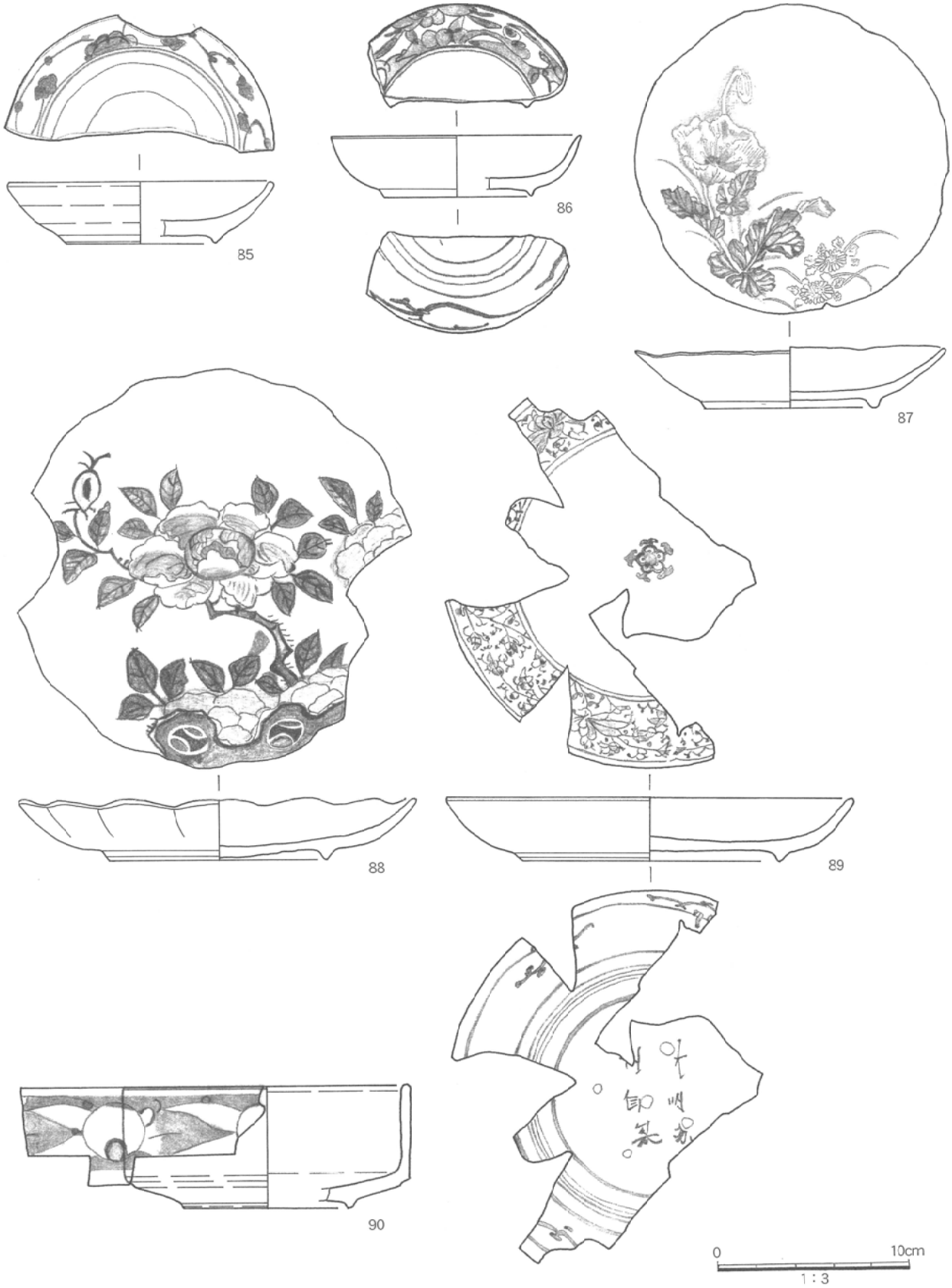
第23図　遺物実測図（5）　磁器



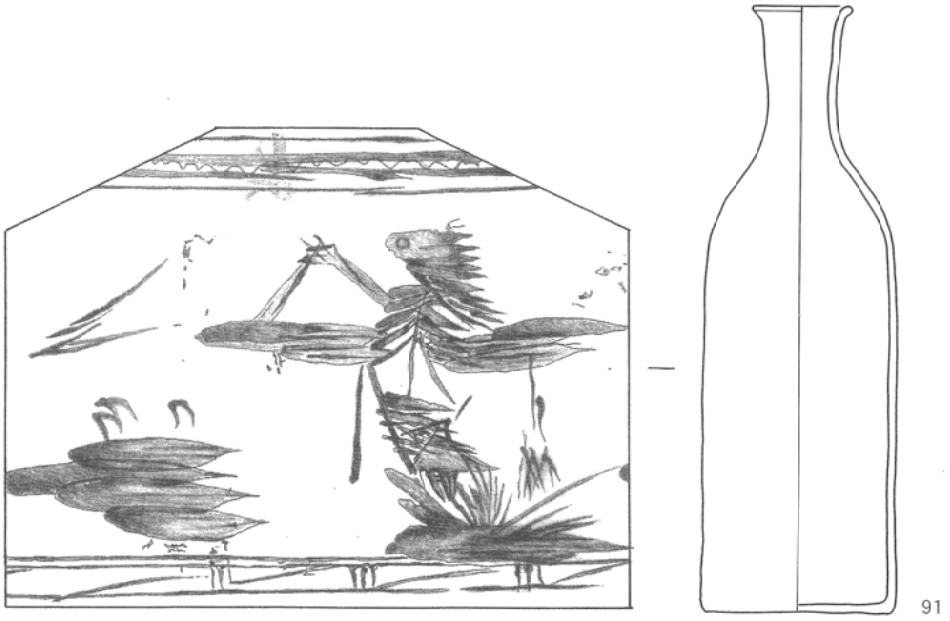
第24図　遺物実測図（6）　磁器

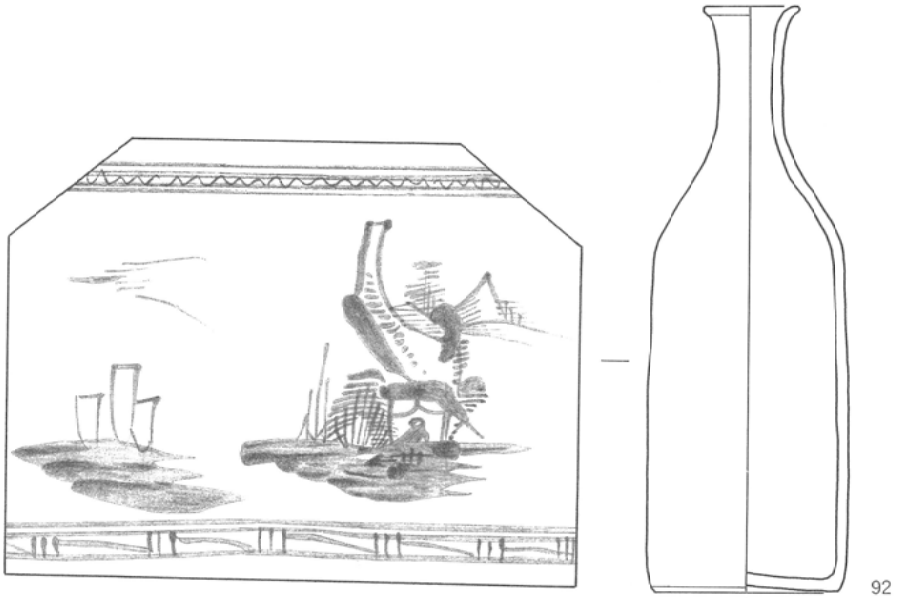


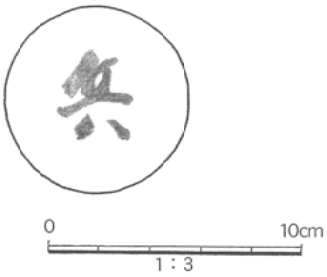
第25図　遺物実測図（7）　磁器



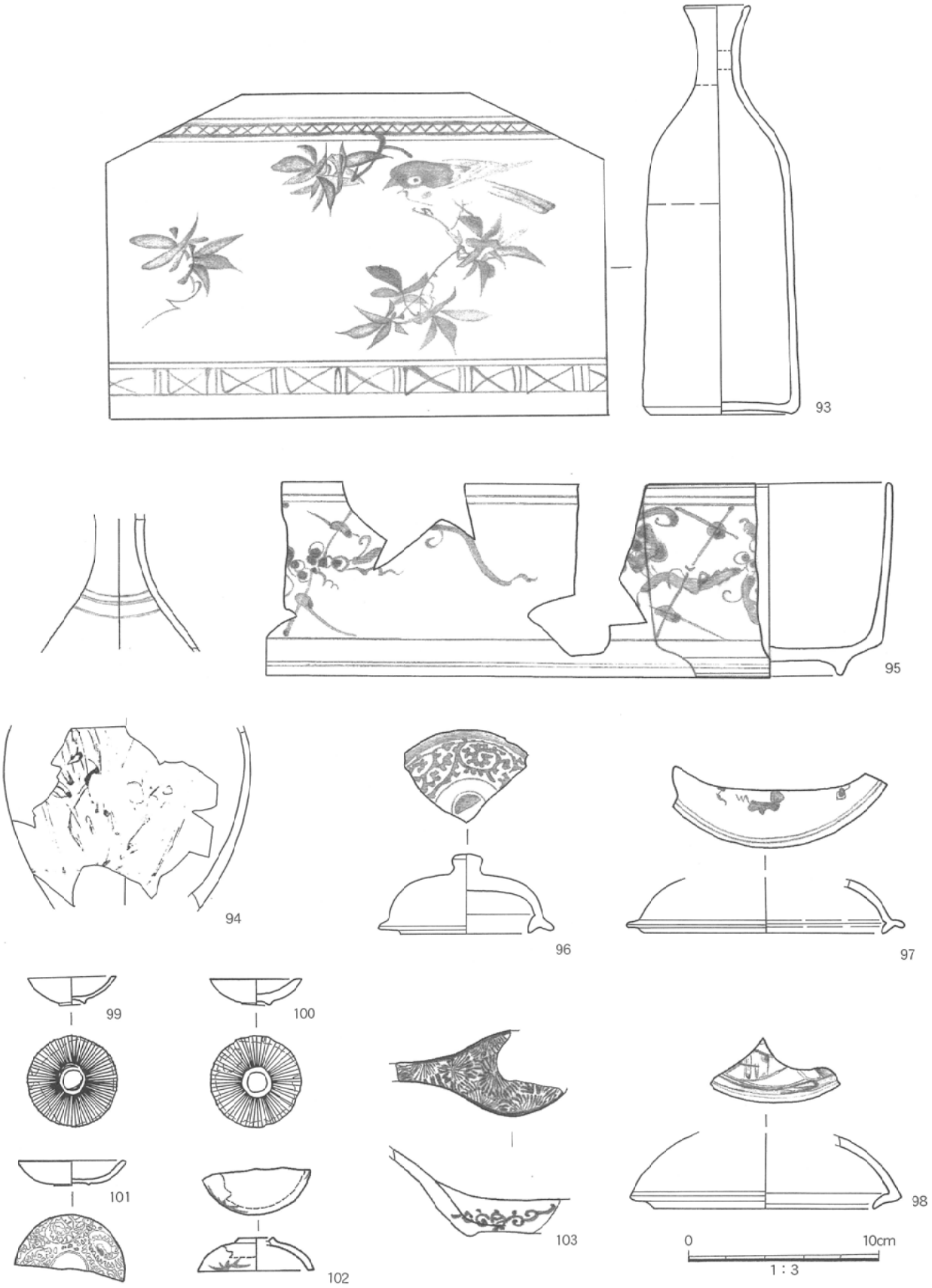
第26図　遺物実測図（8）　磁器



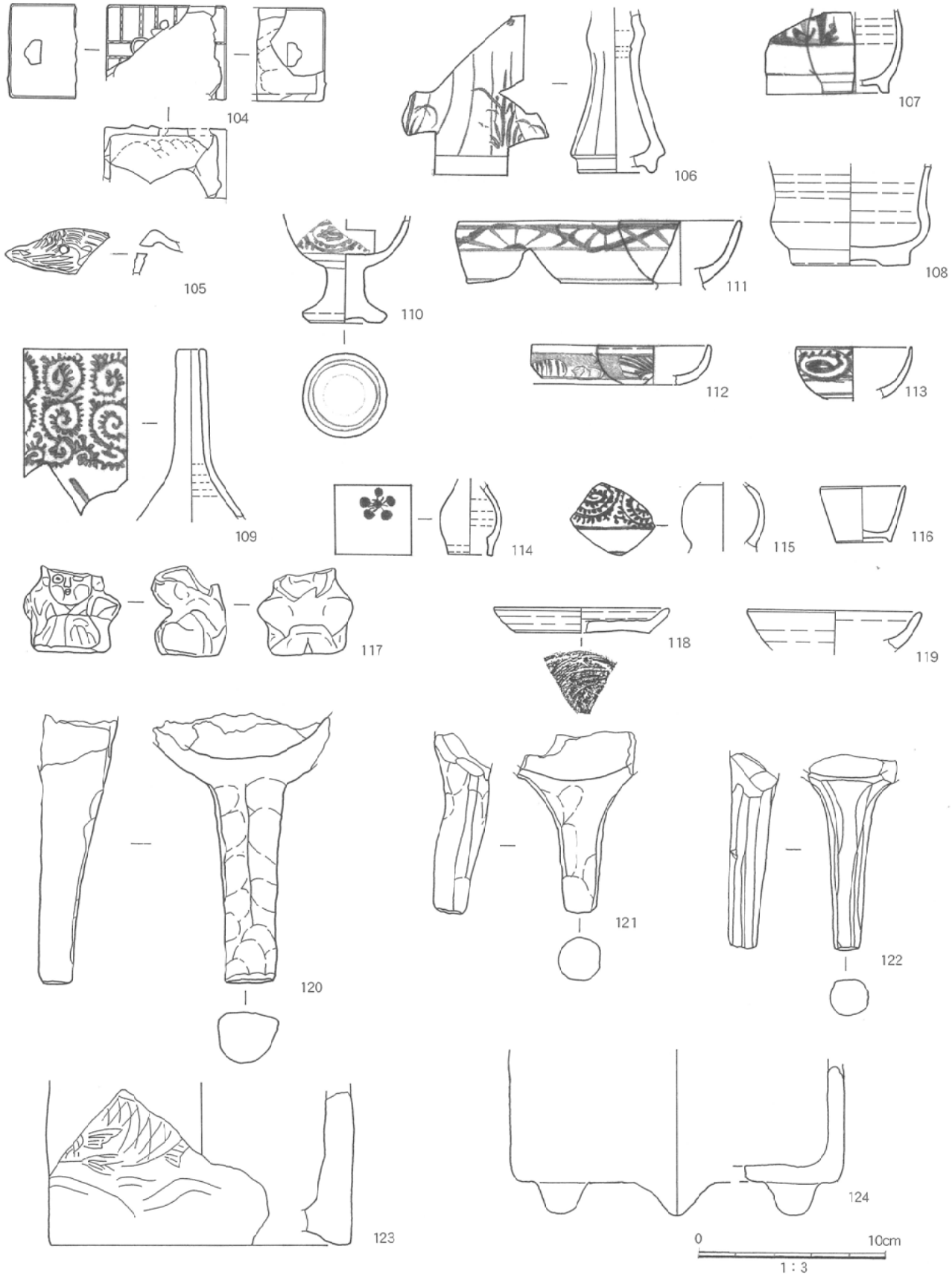




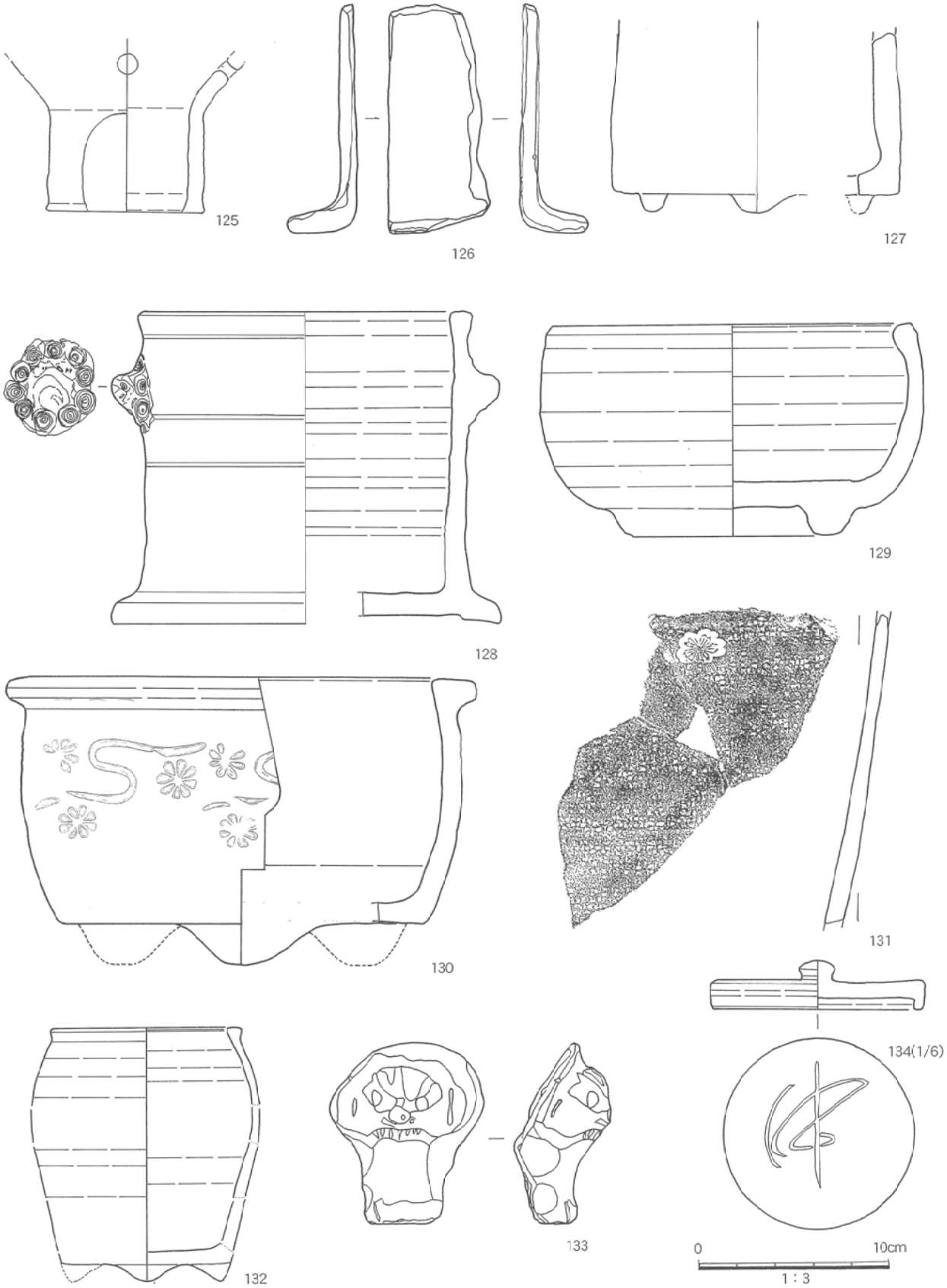
第27図　遺物実測図（9）　磁器



第28図　遺物実測図（10）　磁器

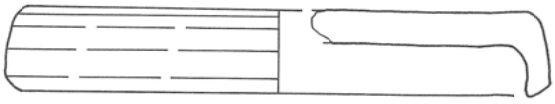


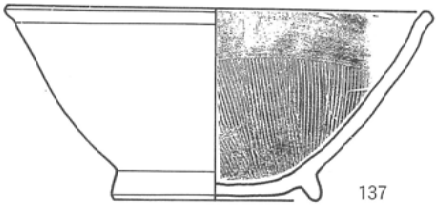
第29図　遺物実測図（11）　磁器・土器



第30図　遺物実測図（12）　土器

135


136

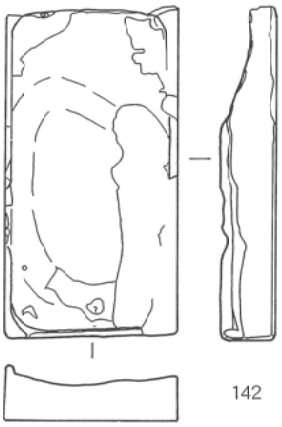

137

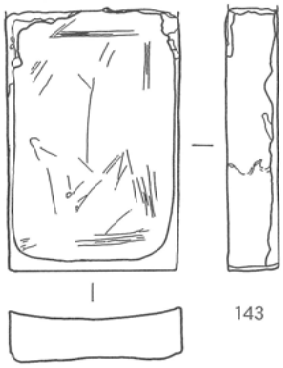
138

140

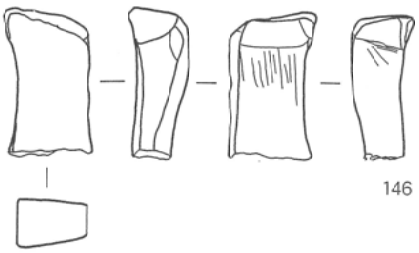
139

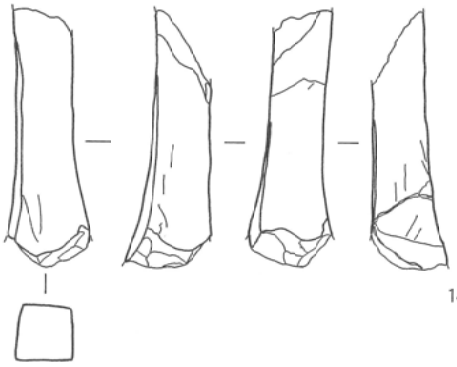
141


142


143

145


146


144

0　10cm
1：3

147

148

0　5cm
1：2

第31図　遺物実測図（13）　土器・石製品・古銭

2　第２次調査出土遺物

第２次調査で出土した遺物の種別は、陶器・磁器・瓦質土器・石製品・木製品・骨格器などがあり、数量的にはコンテナ18箱に相当した。遺物の分布状況は第１次調査と異なり、遺構に伴うものは極く少なく、大半のものが包含層から出土している。年代的には１次調査同様、18世紀後半～19世紀が主体と捉えられたが、藤島城に関わる14世紀代の遺物も若干数確認された。以下では、種別に沿って遺物の特徴等を概述する。

陶　器(第32・33図)

中世に帰属する珠洲、近世陶器の唐津・備前・相馬・大宝寺などの各地製作品が出土している。１は珠洲系陶器大甕の口縁部資料である。肥厚してくの字状に屈曲する口縁形態が知られ、外面の口縁直下から平行タタキ目が観察される。14世紀代に比定され、本遺跡から出土した遺物の中で最も古いものである。

２は唐津の碗、４・７は鉢である。４は八角鉢で灰釉が施され、底部には墨書による銘が認められる。口径386㎜を測る大型品の７は体部が外傾して大きく開く形態で、内面に波濤状の刷毛目文が施される。３・５は相馬の土鍋と鍋蓋である。５の土鍋は口縁にのみ白色釉が施釉されるもので、外面には煤が付着している。６は大宝寺焼の小壺、９・10は湯通し、11は甕である。海鼠釉が施されるが、６は内面と口縁部にかけて施釉される。なお８は、白釉が施される染付けの湯通しで、在地系の製品である。11の甕は、外面の釉が火被りによって変色している。12～15は擂鉢で、12が備前系、その他は在地系の所産と認識される。

磁　器(第34～42図)

近世の国産品で、坏・盃・碗・碗蓋・皿・鉢・徳利・紅皿・仏飯器・香炉などの各器種が出土している。

坏(16・17)は緑釉が施される青磁で、16は肥前産と思われる。17には貫入が認められる。19・20は瀬戸・美濃産の盃である。

碗には瀬戸・肥前・有田・伊万里のものが認められる。18・22・27～31は瀬戸の碗である。22の底部には「青山年製」の銘が入る。31は端反型の器形を呈し、30は形態的特徴から蓋を伴うものと判断される。23は有田の碗で、24の蓋はこれと対になると思われる。双方とも色絵による花鳥図などが描かれる。25・26は伊万里の碗で、松竹梅などが赤絵で描かれる。

皿は瀬戸(35～37・44～47・49)と、肥前(32～34・38～41)のものが目に付く。他に、伊万里(42)と有田(43)のものが存在する。形態的に輪花型を呈する32・38・47・48、方角型の36、変形型となる42、平型の43、浅胴丸型で段重皿となる41などが特徴的である。38・45・47は蛇の目高台を有する。39・40は見込みにコンニャク印判が押される。49は外面に七言絶句と考えられる「風門外水流柳口」の銘が認められる。

５点掲載した鉢(50～54)は、50が瀬戸、51・52が伊万里、53・54は肥前産のものである。これらは口縁形態が輪花型を呈しており、蛇の目高台を有している。

蓋には瀬戸(55・56)と伊万里(57)があり、３点とも形態と法量が異なるものである。57は19世紀前半の古伊万里に属し、底部に「冨貴長春」の銘が入る。

58～62は肥前の徳利で、59と61は染付け絵柄から揃いになるものである。63～65は肥前の紅皿である。白釉が施され、蛸唐草型押し文で共通する64・65は対になると思われる。

その他、ミニチュアの壺や桶といった玩具の類(66～68)、仏飯器(69)、香炉(70)が出土している。仏飯器は肥前、香炉は伊万里のものである。

瓦質土器・石製品・骨格器(第42図71～77)

瓦質土器では、火鉢(71)とコンロ(72)が出土している。いづれも19世紀代の江戸在地系に比定され、火鉢の把手には獣面彫刻が施される。

石製品には、戸車(73・74)と硯(75・76)が認められる。75はよく使い込まれており、ＳＤ274溝跡内から出土したものである。

77はＳＫ239土坑から出土した骨格器の格箆で、基部に紐通し用の孔がある。

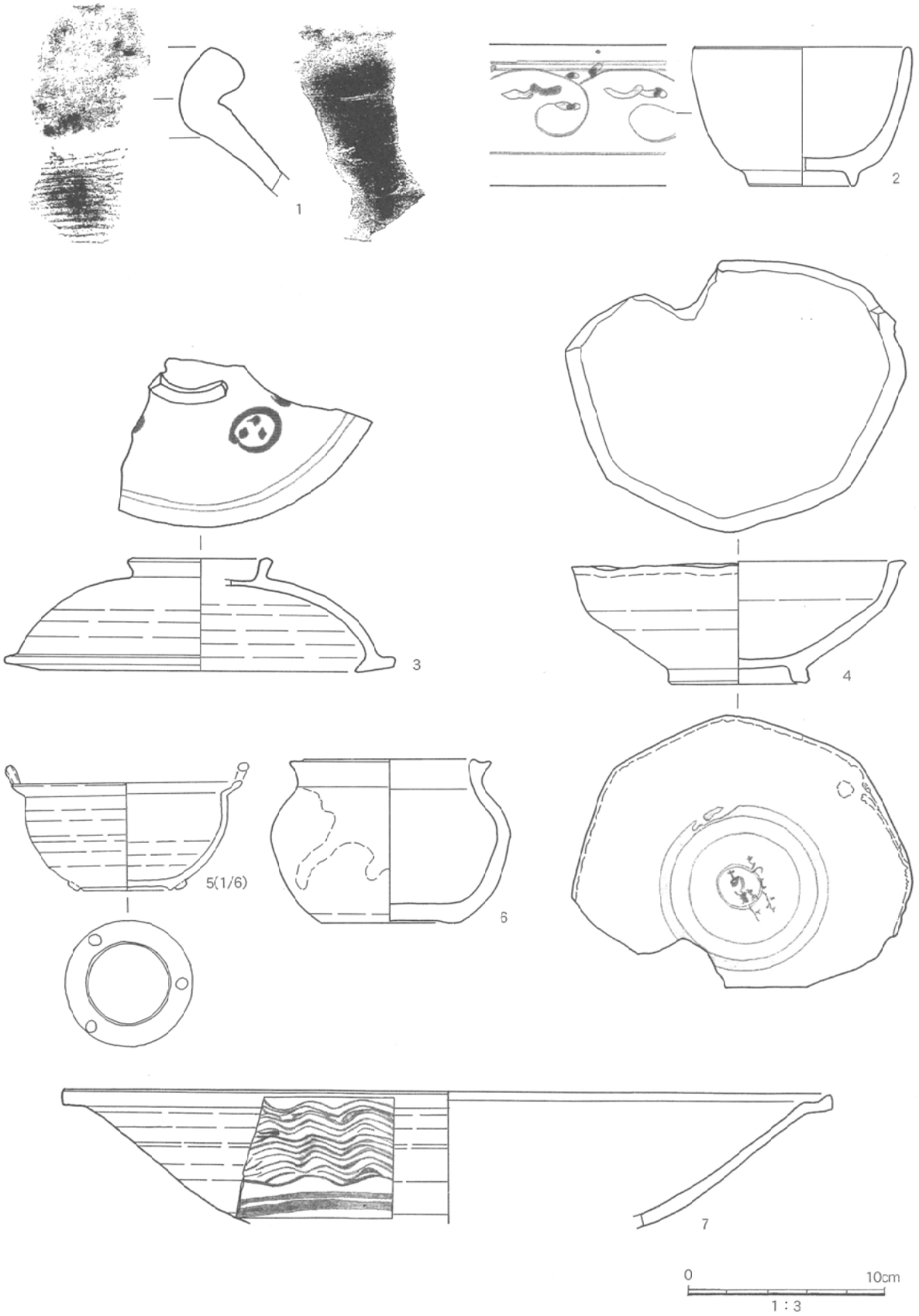
３　木製品(第43図)

第１・２次調査併せて、11箱相当の木製品が出土している。井戸跡に伴う曲物類をはじめ、漆器椀・箸・箆などの食器類、用途不明ながら農・工具と考えられる棒状や板状の加工品、それに下駄などの種が認められる。なお、実測掲載したのは遺存状態が良好で、ほぼ完形に近い極く一部のものに限ったことを付記しておく。

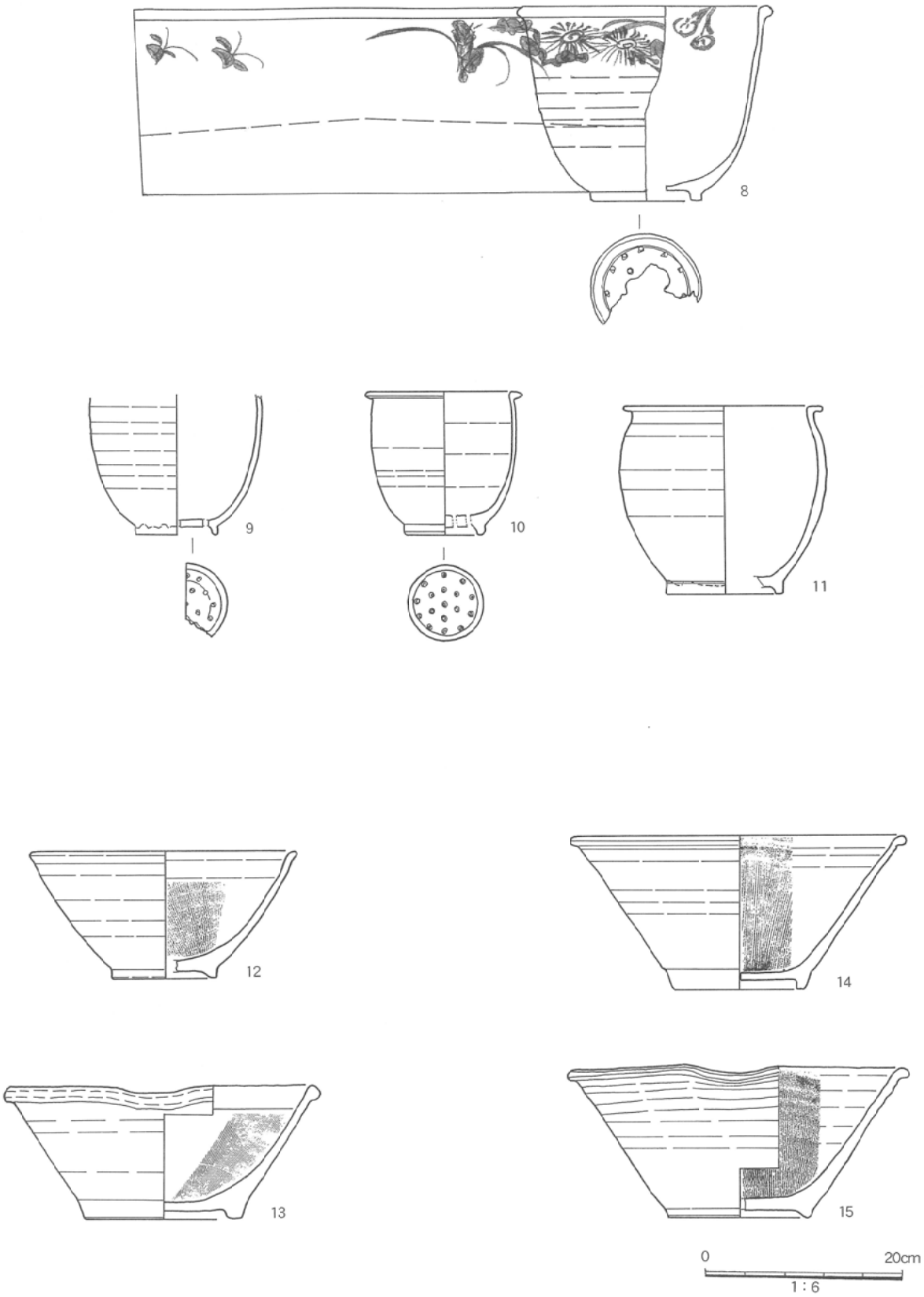
１はＡ区のＳＫ39土坑底面から出土した漆器椀である。土圧により押し潰されて変形している。加飾は内外面ともに黒色漆を塗布した後、赤色漆で絵付けを施している。絵付けには赤色漆の濃淡による表現の相異が認められる。２・３は対になる漆器椀で、Ｂ区のＳＸ107から出土したものである。外面黒色漆、内面は赤色漆で全面塗布される。

４は底板を伴う小型の曲物である。側板はほぼ２周したところで、桜皮と推測される樹皮によって固定される。

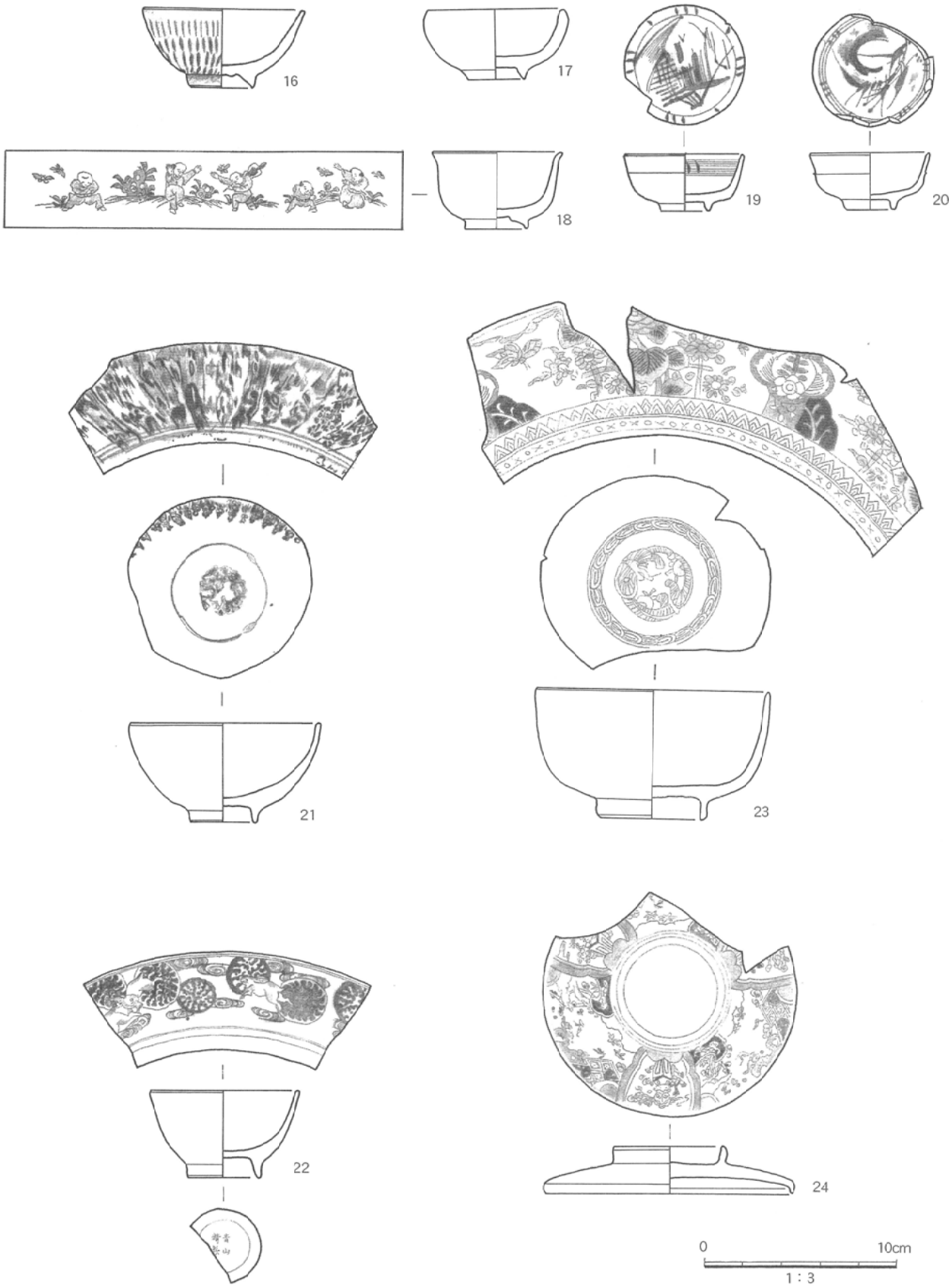
５は差歯下駄である。平面形が隅丸長方形を呈し、台形様の歯は先が摩耗して砂粒がくい込んでいる。



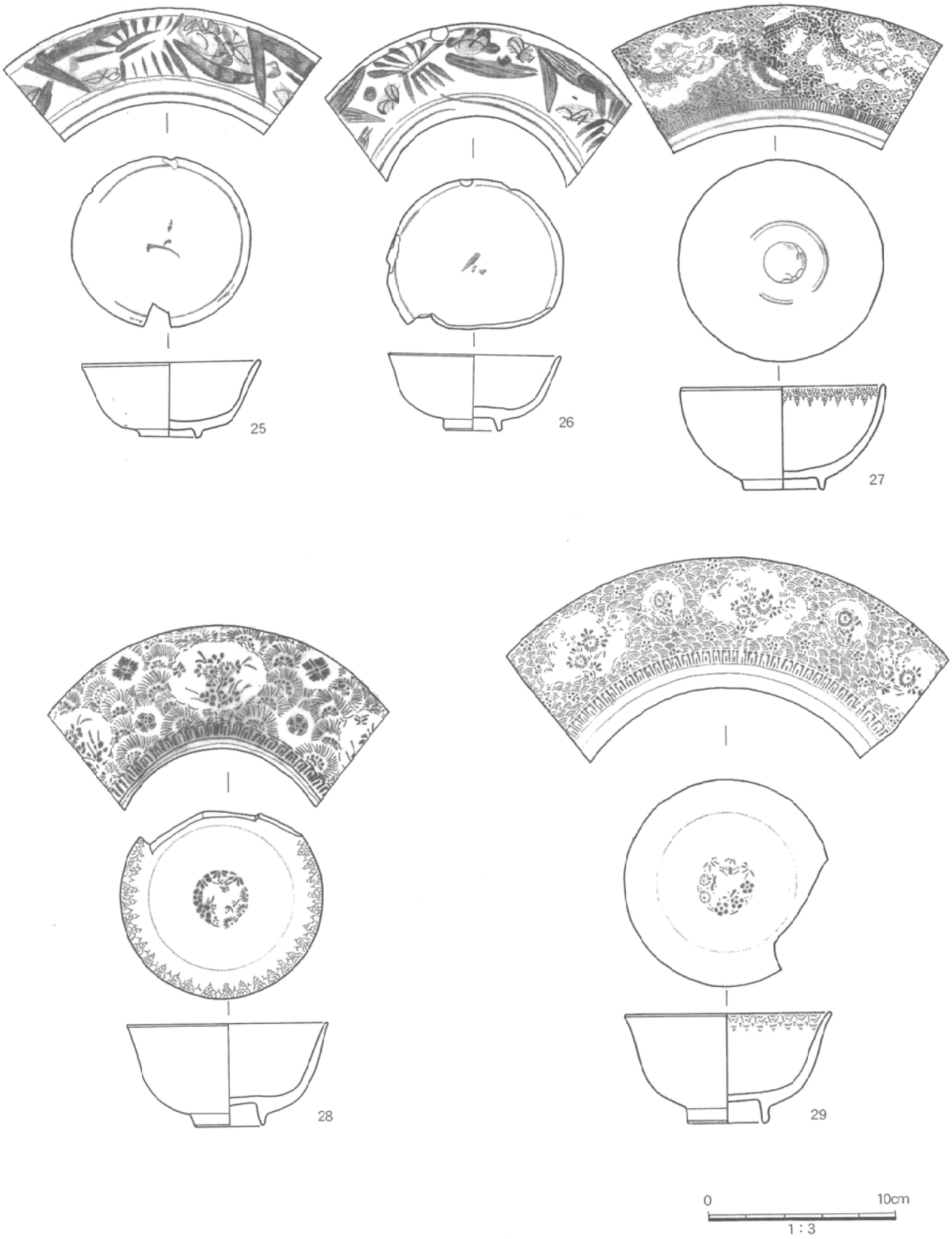
第32図　遺物実測図（14）　陶器



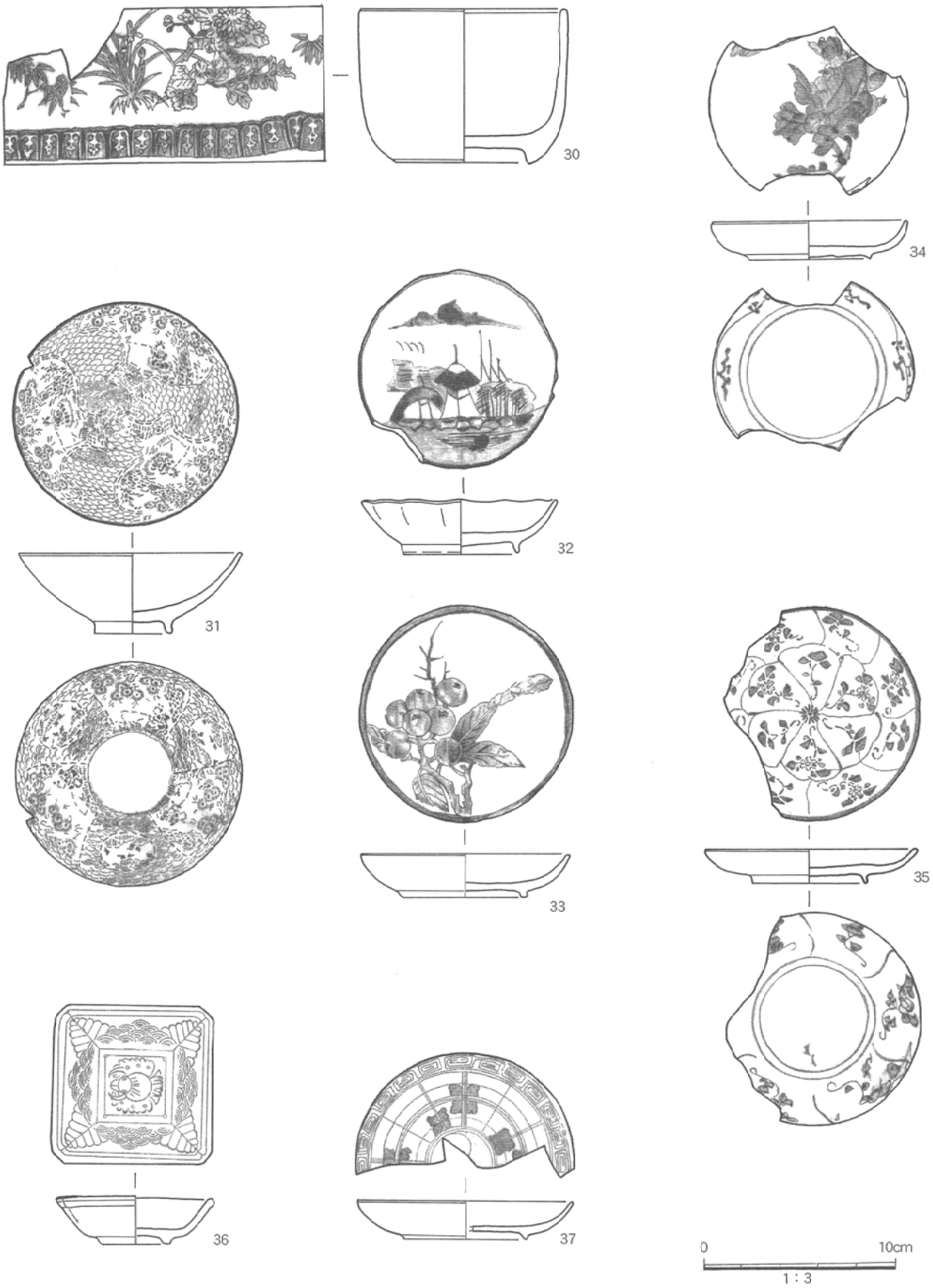
第33図　遺物実測図（15）　陶器



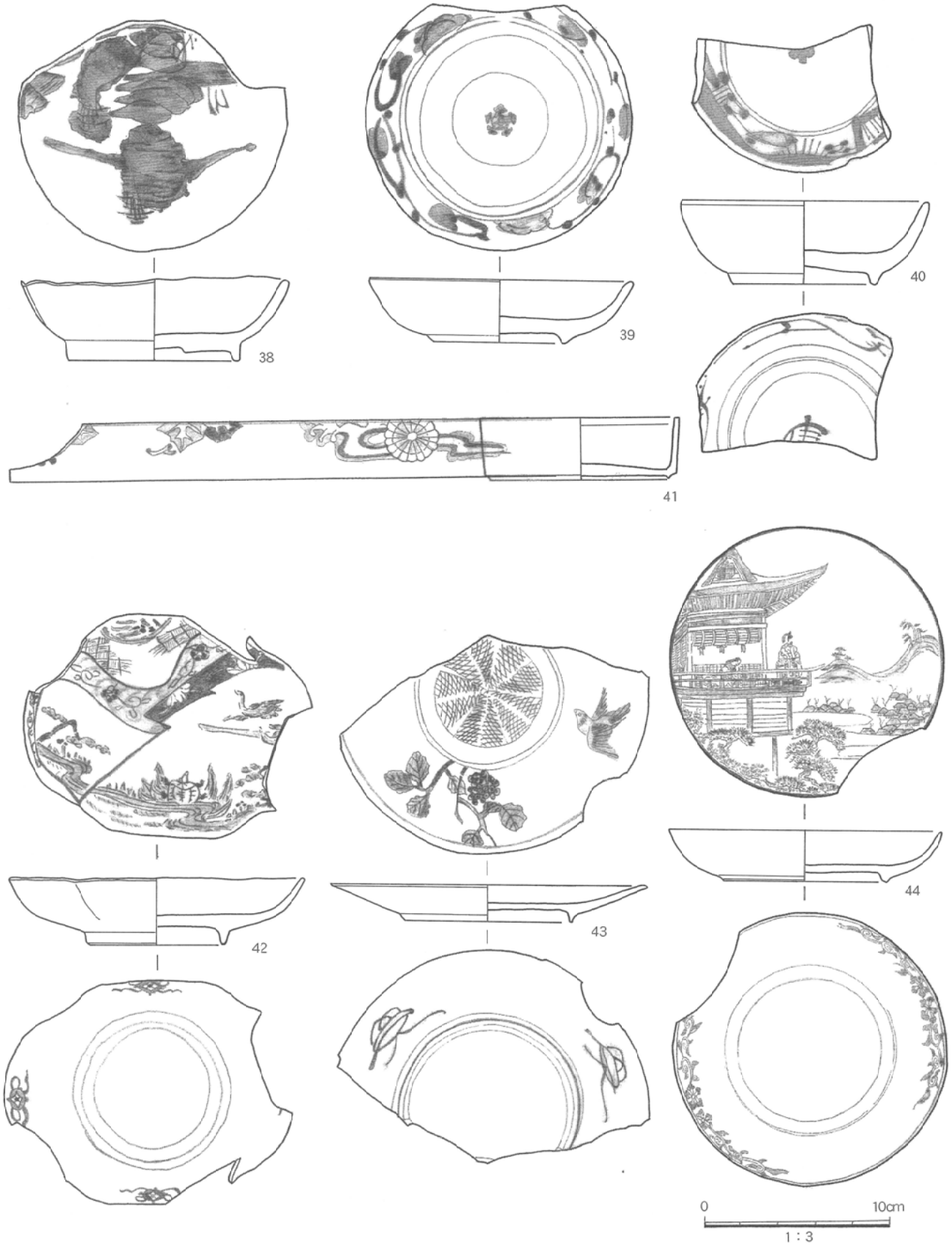
第34図　遺物実測図（16）　磁器



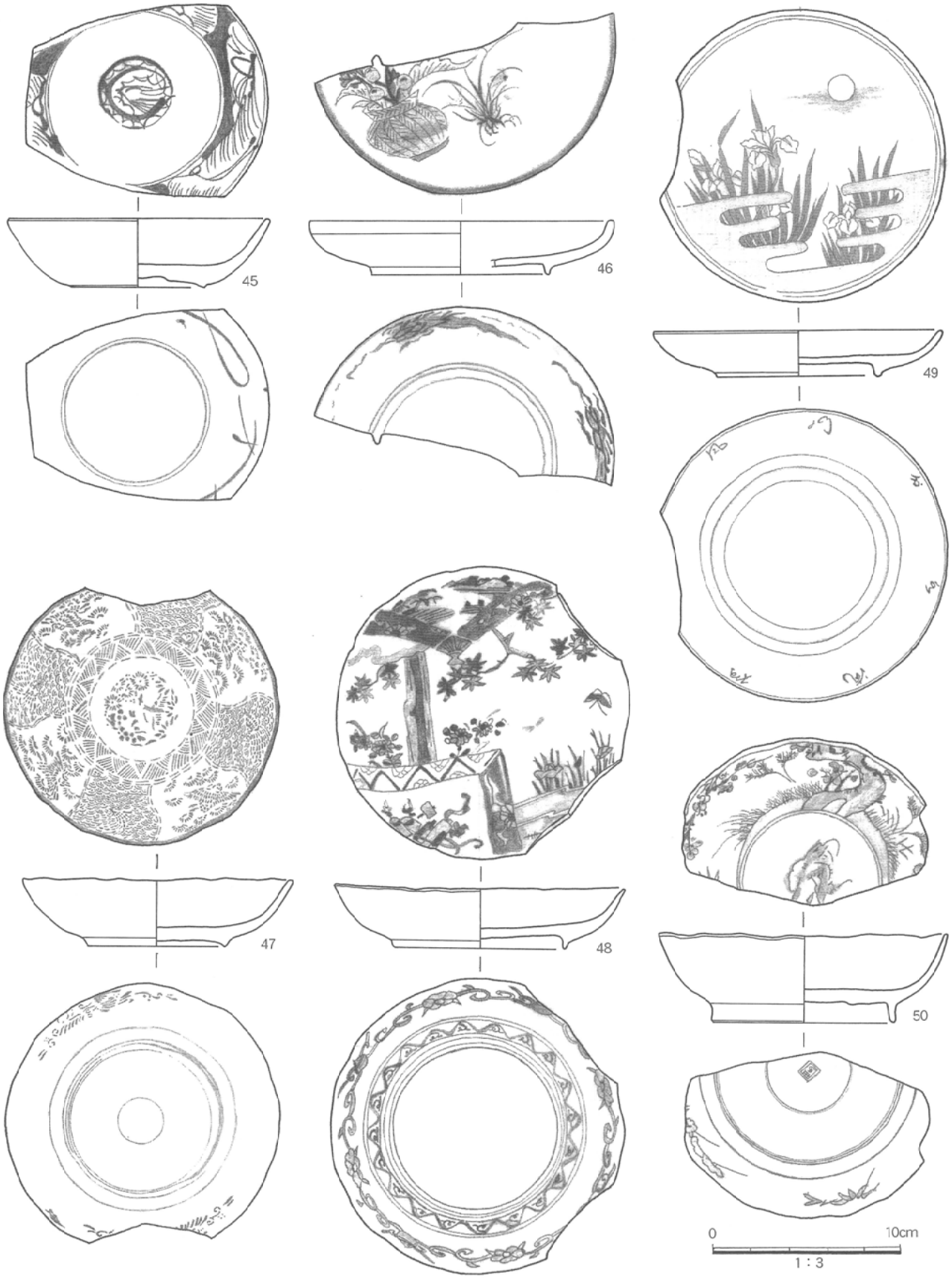
第35図　遺物実測図（17）　磁器



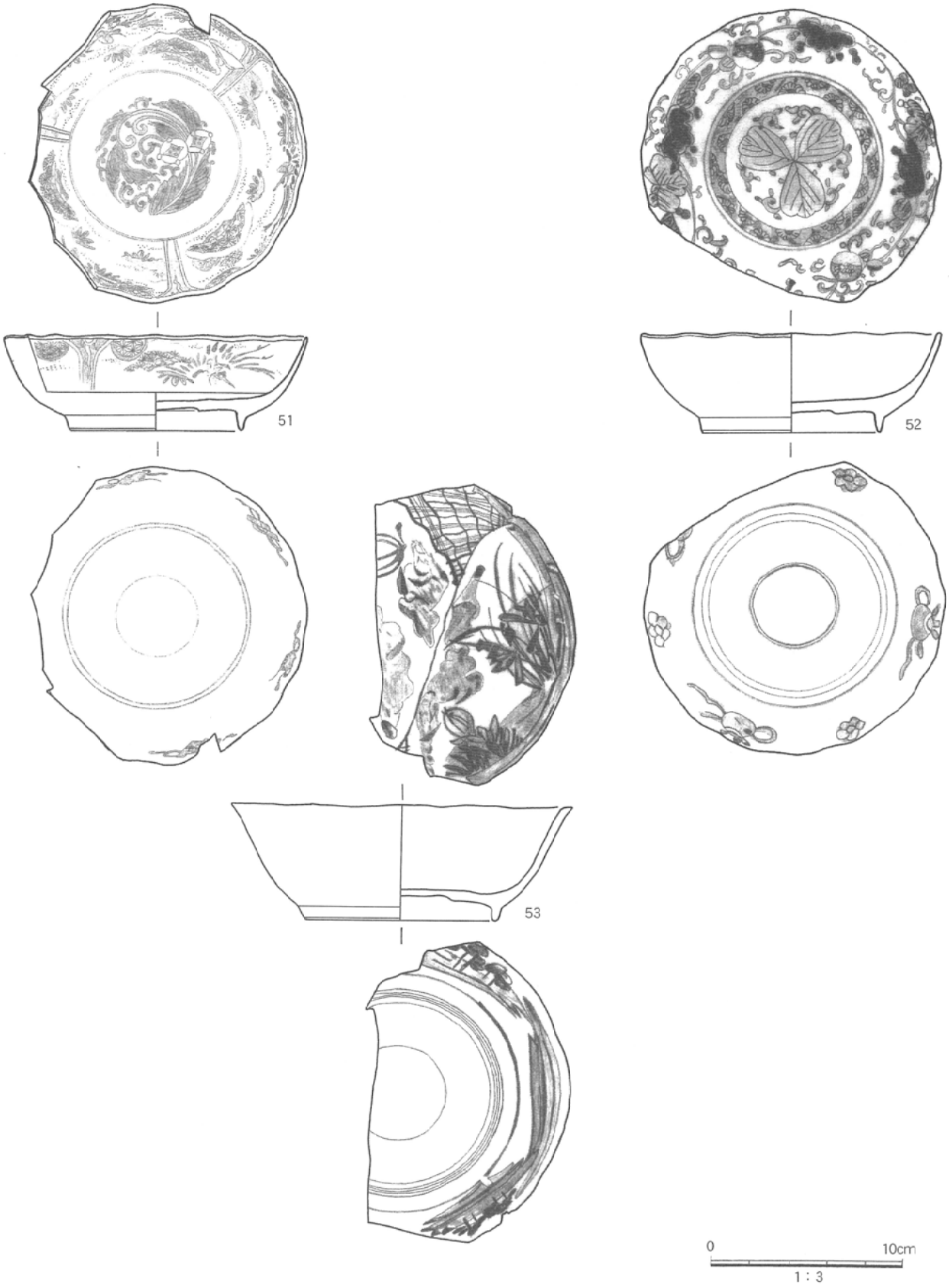
第36図　遺物実測図（18）　磁器



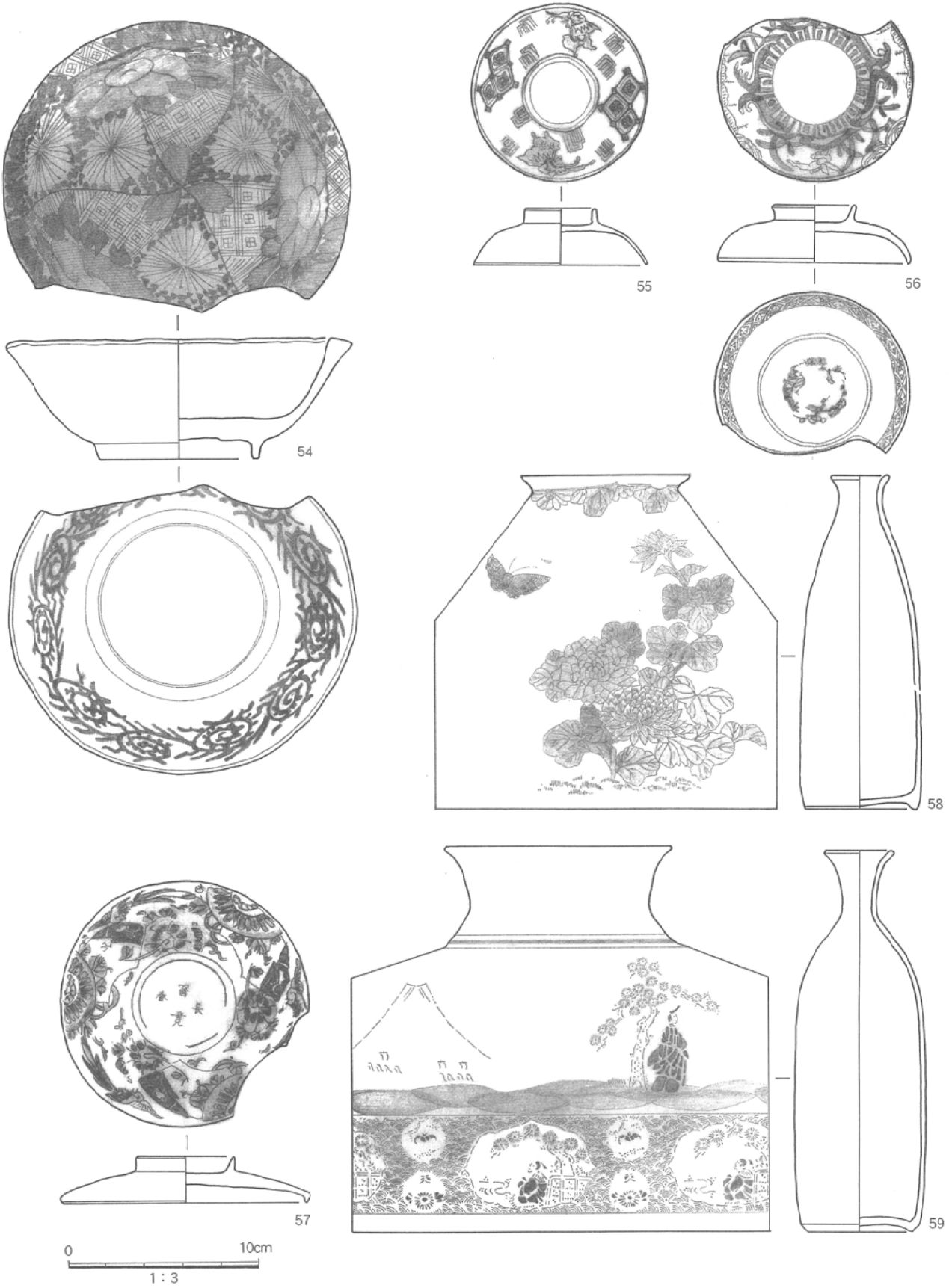
第37図　遺物実測図（19）　磁器



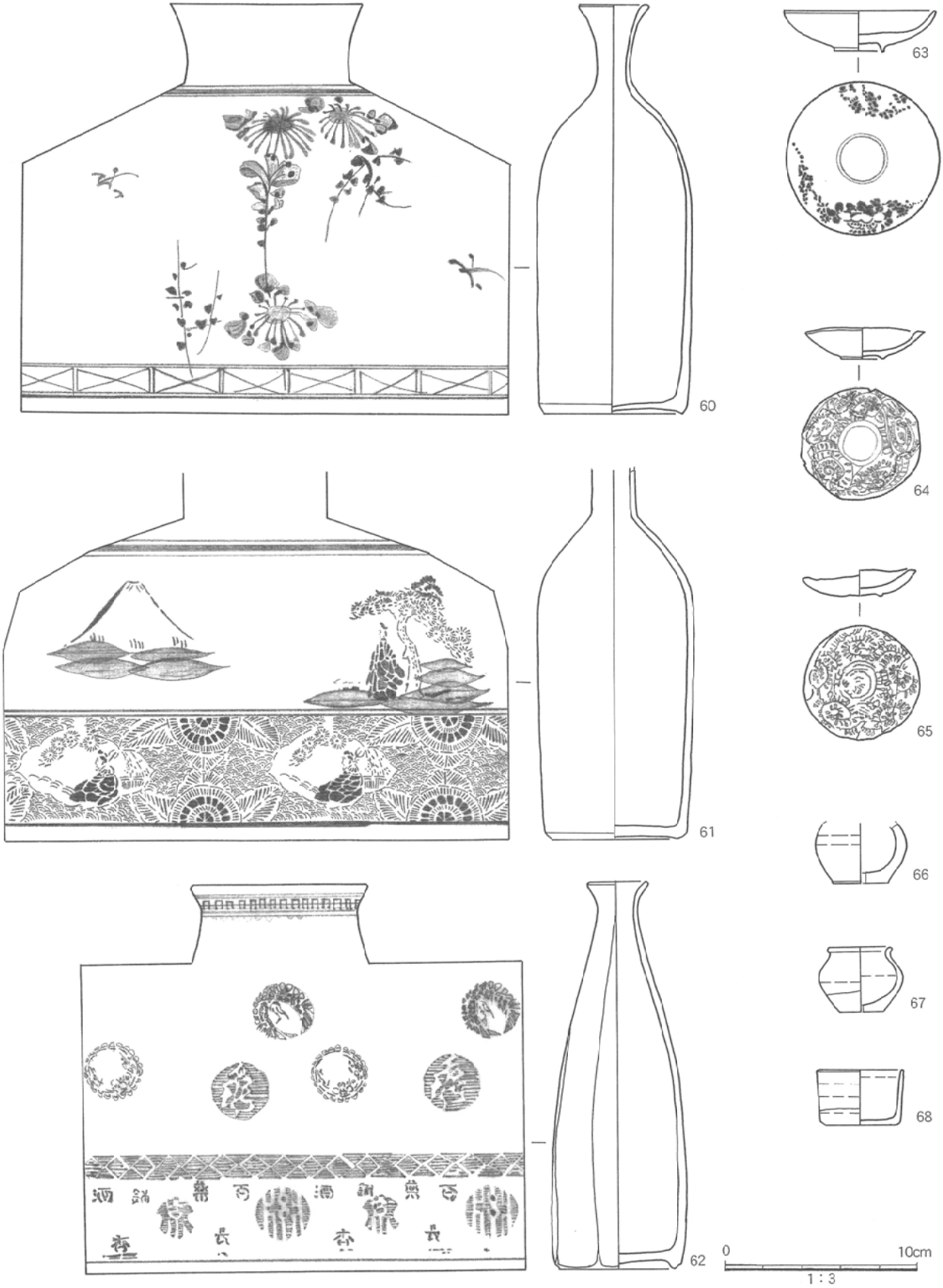
第38図　遺物実測図（20）　磁器



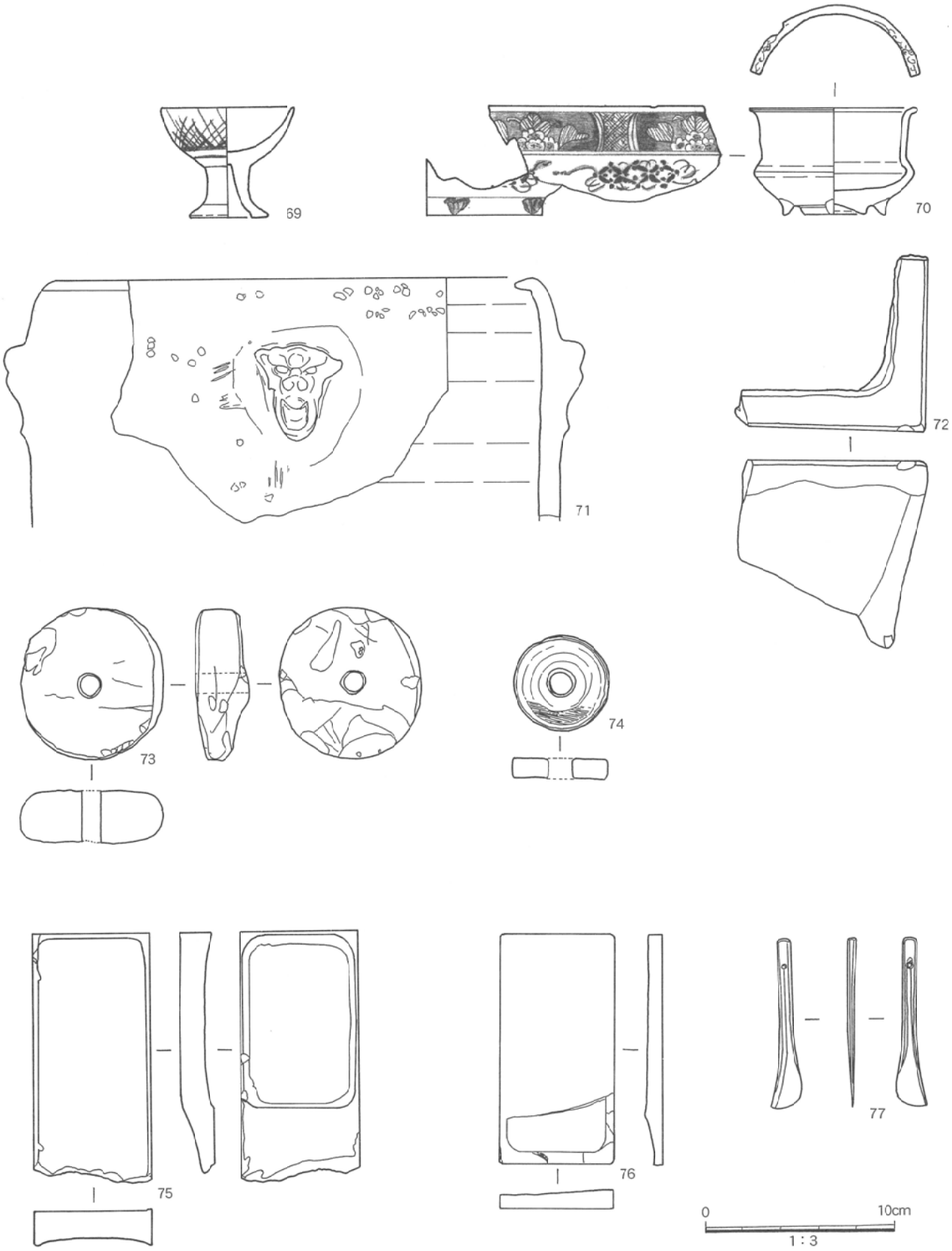
第39図　遺物実測図（21）　磁器



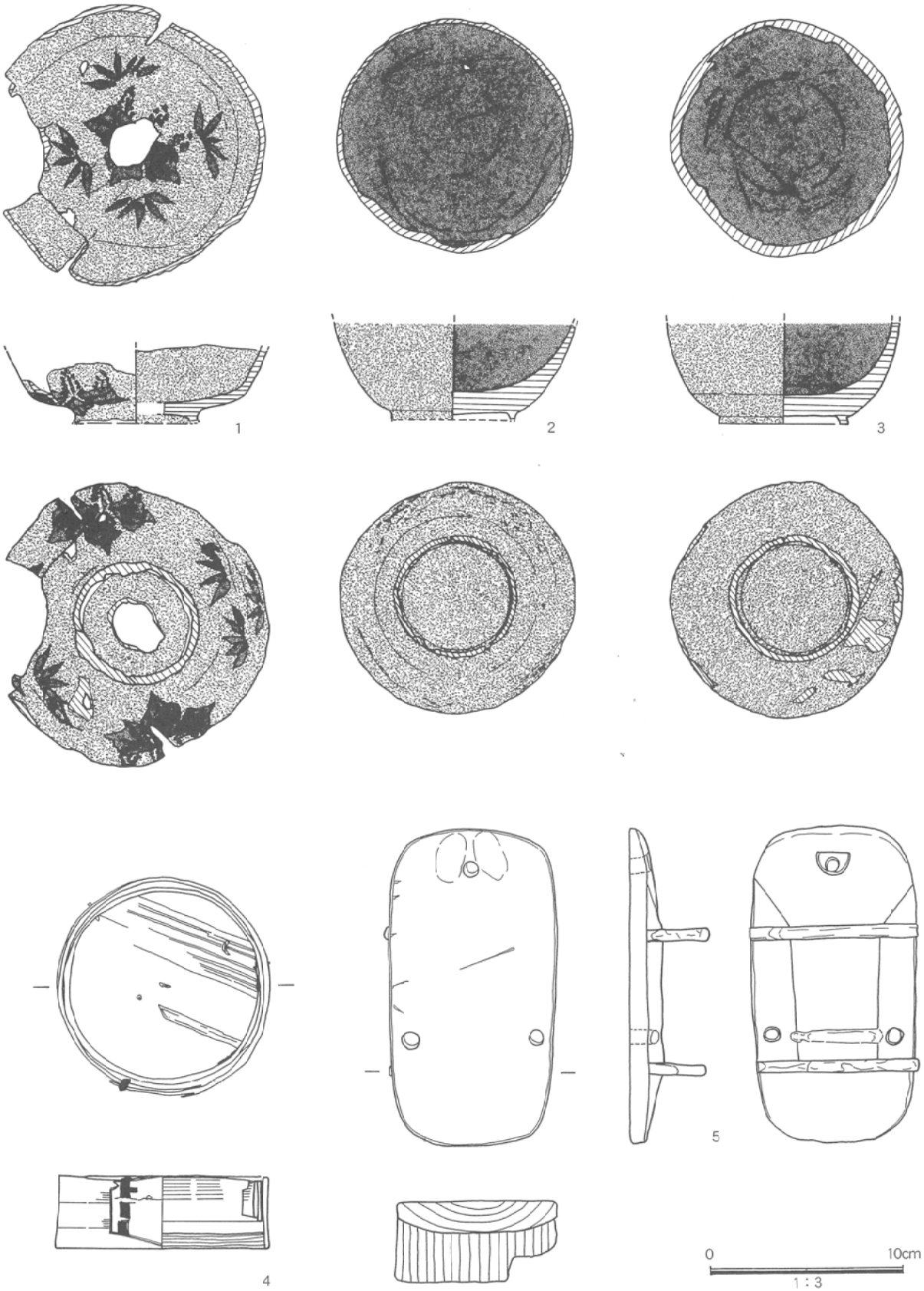
第40図　遺物実測図（22）　磁器



第41図　遺物実測図（23）　磁器・陶器・玩具



第42図　遺物実測図（24）　仏具・土器・石製品・骨格器



第43図　遺物実測図（25）　木製品

表3　第1次調査出土遺物観察表(1)

挿図番号	遺物番号	器種	形状特徴	計測値(mm) 口径	底径	器高	最大径	釉薬	胎土色	装飾 印 銘 染付 文様 その他	製作 製作地	製作年代	出土地点
第19図	1	陶器 甕							灰	内面-楕円アテ 外面-平行タタキ	珠洲	15世紀	SX76-F2
	2	陶器 甕							灰	内面-楕円アテ 外面-平行タタキ	珠洲	15世紀	SX49-F
	3	陶器 甕							灰	内面-楕円アテ 外面-平行タタキ	珠洲	15世紀	SD108-F
	4	陶器 甕							赤褐	外面-ロクロ痕 内面-アテ痕	珠洲	15世紀	SD23-F
	5	陶器 擂鉢							灰	内外面-ロクロ痕 内面-12条の摺り目	珠洲	15世紀	SD23-F
	6	陶器 擂鉢							灰	外面-ロクロ痕 内面-10条の摺り目	珠洲	16世紀	SX39-F
	7	陶器 擂鉢							灰	内面・外面-ロクロ痕 摺り目有り	珠洲	中世	SX91-F
	8	陶器 擂鉢							灰	内外面-ロクロ痕 内面-摺り目	在地系	15世紀	SX107-F
	9	陶器 卸皿		(152)				自然釉	灰白	内外面-ロクロ痕	瀬戸 (古瀬戸)	15世紀	SK36-F
	10	陶器 皿			40			透明釉	灰白	見込み-草花サビ絵	肥前 (京焼写し)	1700～1750	SK94-F
	11	陶器 中碗		118	46	47	122	透明釉	灰	内面-草花サビ絵 生地に貫入有り	瀬戸 京焼写し	1750～1800	SK96-F
	12	陶器 小皿	方角型	(115)	(60)	26	(116)	緑釉	褐	見込み-菊文型押し	瀬戸	1850～1900	SD98-F
	13	陶器 碗	輪花型	158	67	60	164	飴釉	灰茶	口縁-輪花 ケズリ出し高台	唐津	1900～1950	SX107-F
第20図	14	磁器 中碗				46		透明釉	灰	外面-松葉文コンニャク印判 生地に貫入有り?	瀬戸	1800～1850	SK94-F
	15	陶器 壺			69		102	緑釉	褐	内面・外面-ロクロ痕有り 底面-糸切り痕有り	瀬戸	19世紀後	SK94-F
	16	陶器 壺		102	90	15	138	海鼠釉	茶	内外面-ロクロ痕	金太郎焼	1800～1879	SX76-F
	17	陶器 筆筒	筒型	96			100	海鼠釉	褐	口縁-打痕有り のちに、灰落としに転用	大宝寺	19世紀後	SX76-F3
	18	陶器玩具 壺			30			褐釉 海鼠釉	褐	口縁部から肩部にかけて海鼠釉	不明	1750～1800	SX76-F1
	19	陶器玩具 炊飯道具		40	23	33	48	褐色釉	褐	内面・外面-ロクロ痕 底面-糸切り痕	唐津	1850年頃	C-10 Ⅲ
	20	陶器玩具 人形		縦 75	横 42	厚さ 29			不明	雛飾り(大黒天) 型押し成形　メッキ痕有り	不明	1850～1900	SX76-F
	21	陶器 不明			72			透明釉	灰茶	染付　内面-指押し痕有り 外面-体部に筆書き	萩	1900年頃	C-9 Ⅲ
	22	陶器 甕		(186)	136	(206)		褐色釉	灰	内外面-ロクロ痕	瀬戸	1950～1980	C-8 Ⅲ
	23	陶器 甕		196					茶	内外面-ロクロ痕 外面-文様有り	唐津	1870～1920	SX76-F2
	24	陶器 捏鉢		(520)				灰釉	赤褐	内外面-ロクロ痕有り 刷毛目痕有り	唐津	1870～1920	SX76-F1
第21図	25	陶器 甕		(362)	(205)	(422)	(376)	褐釉	赤褐	外面-ロクロ痕 内面-アテ痕	唐津	1850～1900	SX76-F
	26	陶器 甕			88			海鼠釉	灰茶	内外面-ロクロ痕有り 底面-糸切り痕有り	大宝寺	1820～1880	SX76-F
	27	陶器 甕			178		202	海鼠釉	茶	内外面-ロクロ痕	大宝寺	1820～1880	SX76-F
	28	陶器 甕		(146)	(107)	113		褐釉	褐	内外面-ロクロ痕有り 火被り	大宝寺	1900～1940	SX76-F2
	29	陶器 甕		80				褐色釉	灰茶	内外面-ロクロ痕有り 火被り	大宝寺	1900～1940	SX76-F2
	30	陶器 甕		110			138	海鼠釉	褐	内外面-ロクロ痕	大宝寺	1900～1940	SX76-F
	31	陶器 壺		(136)	(145)	247	(218)	褐釉	褐	内外面-ロクロ痕 内面-耕子目アテ	在地系	1850～1890	SX76-F2
	32	陶器 甕			112	224	214	海鼠釉	白茶	内外面-ロクロ痕	在地系	1880～1930	SX107-F
	33	陶器 甕		(290)		(272)	(354)	白色釉	赤褐	刷毛目痕有り	在地系	1880～1930	SX107-F
	34	陶器 擂鉢		(326)			(332)	褐色釉	茶	内外面-ロクロ痕有り	備前	19世紀後	SX76-F2・3
	35	陶器 擂鉢		(310)	(152)	(163)		褐色釉	茶		備前	19世紀後	SX76-F2

表４　第１次調査出土遺物観察表（２）

挿図番号	遺物番号	器種	形状特徴	計測値(mm) 口径	底径	器高	最大径	釉薬	胎土色	装飾　印　銘　染付　文様　その他	製作 製作地	製作年代	出土地点
第21図	36	陶器 擂鉢		236	97	102	241	褐色釉	茶		備前	20世紀初	SX76-F2
	37	陶器 擂鉢		234	145	164	224	褐色釉	茶	内外面－ロクロ痕	備前	20世紀初	SK94-F
	38	陶器 擂鉢		306				褐釉	褐	内面－摺り目	在地系	1850～1890	SX107-F
第22図	39	磁器 坏		76	30	40	78	透明釉	灰白	染付　外面－永割り菊ちらし文 焼継ぎ痕有り	瀬戸	1750～1800	SK94-F
	40	磁器 坏		59	26	29		透明釉	白	染付　卵殻手絵付け　口紅有り 縁帯－唐草つなぎ　内面－富士に松原	瀬戸	1750～1800	SX107-F
	41	磁器 坏		62	28	29	63	透明釉	白	内面－桜花ちらし綿書	瀬戸	1850～1900	SX107-F
	42	磁器 坏		67	68	37	68	透明釉	白	染付　外面－水辺に鵜の絵 底裏に「玩品」銘	瀬戸	1850～1900	SX107-F
	43	磁器 坏			23	30	56	透明釉	白	染付 外面－桜花ちらし	瀬戸	1900～1860	SK45-F
	44	磁器 坏		80	26	36	81	透明釉	白	染付 外面－草花文	肥前	1850～1900	SK94-F
	45	磁器 坏		72	27	39	76	透明釉	白	染付 見込み－「寿」字　外面－紐ずり文	肥前	1900年頃	C-12　Ⅲ
	46	磁器 坏		74	20	35	74	透明釉	白	染付　見込み－「寿」略字 外面－松葉ちらし	肥前	不明	C-10　Ⅲ
	47	磁器 小碗		112			113	透明釉	白	染付　外側－草花文	肥前	1780～1820	SK84-F
	48	磁器 小碗			40			透明釉	白	底裏に「大明年製」銘 73と同一か	肥前	1780～1820	SK84-F
	49	磁器 小碗		99	40	47	102	透明釉	灰白	染付 外面－松竹梅文	肥前	1780～1810	SK94-F
	50	磁器 小碗		100	44	53	102	透明釉	灰	染付 外面－網目文	肥前　波佐見 くらわんか碗	1740～1780	SD77-F
	51	磁器 小碗		(95)	(40)	47		透明釉	灰	染付 外面－網目文	肥前　波佐見 くらわんか碗	1740～1780	D-8Ⅲ
	52	磁器 小碗		93	(37)	44	96	透明釉	白	染付　外面－草花つなぎ 底裏に銘有り	肥前　波佐見 くらわんか碗	1740～1790	SK94-F
	53	磁器 小碗	筒型	62	38	61	76	透明釉	白	染付　見込み－五弁花渦福くずしコンニャク印判　外面－永割菊文ちらし	肥前	1800～1850	SK94-F
	54	磁器 小碗	湯呑み	76	35	57		透明釉	白	染付 外面－竹に耕子文	肥前	1850～1900	SX107-F
第23図	55	磁器 小碗	湯呑み	64	38	60	72	透明釉	白	染付　見込み－五弁花コンニャク印判 外面－永割菊文ちらし	肥前	1800～1850	SX107-F
	56	磁器 小碗			40			透明釉	白	染付 外面－草花文　底裏に銘有り	肥前	1900～1925	SK84-F
	57	磁器 小碗		(102)	(42)	47	(104)	透明釉	白	染付　外面－氷割丸窓月見・ススキ文 焼継ぎ痕有り	肥前	1900～1950	SK94-F
	58	磁器 小碗		93	32	45	94	透明釉	白	色絵 外面－方格区画内に「寿」字	伊万里 赤絵茶碗	不明	SX107-F
	59	磁器 中碗		96	38	50	98	透明釉	灰	染付　見込み－菊花文 外面－網目文	肥前　Ⅲ期	1650～1690	SX76-F1
	60	磁器 中碗		112	46	61	114	透明釉	白	染付　見込み－五弁花コンニャク印判 外面－扇窓蝶蝶ちらし　底裏に「角福」略書	肥前	1680～1710	SK94-F
	61	磁器 中碗		98	44	52	100	透明釉	白	染付　外面－草花文 底裏に銘有り	肥前	1750～1780	SK94-F
	62	磁器 中碗		100	40	49	102	透明釉	白	染付　外面－草花文	肥前	1780～1810	SK94-F
	63	磁器 中碗		(100)	42	53		透明釉	白	染付　外面－松竹梅草花文 底裏に銘有り　焼継ぎ痕有り	肥前 広東碗	1780～1810	SK94-F
	64	磁器 中碗		(100)	39	49	(104)	透明釉	灰白	染付 外面－松竹梅文	肥前	1780～1810	SX107-F
	65	磁器 中碗		(96)	38	49	(98)	透明釉	灰	染付 外面－松竹梅文	肥前	1810～1840	SX107-F
	66	陶器 中碗	丸型	(92)	41	52	(94)	透明釉	灰	外面－梅文つなぎ	肥前　村木窯 (くらわんか碗)	19世紀初	包含層Ⅱ層
	67	磁器 中碗		103	42	61	106	透明釉	白	染付　見込み－松竹梅印判 縁辺－雷文　外面－丸窓草花文	肥前	1800～1850	SX107-F
	68	磁器 中碗		(106)	(40)	60		透明釉	白	染付　縁辺－耕子文 外面－菊花ちらし	肥前	不明	C-10　Ⅲ
	69	磁器 中碗		104	36	61	106	透明釉	白	染付　口縁－ろうらく文 外面－丸窓菊花文	肥前	1850～1900	SK49
	70	磁器 中碗		104	44	49	108	透明釉	白	染付　見込み－「寿」字　縁辺－方耕子文 外面－菊略文・方耕子文	肥前	1850～1900	SX107

表5　第1次調査出土遺物観察表(3)

挿図番号	遺物番号	器種	形状特徴	計測値(mm) 口径	底径	器高	最大径	釉薬	胎土色	装飾 印 銘 染付 文様 その他	製作 製作地	製作年代	出土地点
第24図	71	磁器 中碗		112	38	46	118	鉄釉	白	染付 内面-水仙文	唐津 (平茶碗)	19世紀	A区包含層
	72	磁器 中碗	端反型	110	43	60	114	透明釉	白	染付 外面-松竹梅文	瀬戸	1850年頃	D-8　Ⅲ
第25図	73	磁器 小皿	輪花型	100	62	28	107	透明釉	白	染付　底裏に「成化年製」銘　外面-松葉つなぎ 見込み-鶯　縁辺-松・竹・草花・二つ丸	瀬戸	1850～1900	SX107-F
	74	磁器 小皿	輪花型	102	58	22		透明釉	白	染付　内面-楼閣山水絵 口サビ有り	瀬戸	1850～1900	SX107-F
	75	磁器 小皿		91	35	30	93	透明釉	白	染付　見込み-「渦福」略書 縁辺-花散らし文様　釉ハギ有り	瀬戸	1850～1900	SX107-F
	76	磁器 小皿		104	50	23	105	透明釉	白	染付　片刷り紙絵付け 内面-風車・菊花・桜・波文	瀬戸	大正～昭和初期	SK49
	77	磁器 小皿		(88)	(36)	27	(90)	透明釉	白	染付 見込み-「大化年製」銘	肥前	1900年頃	B-10　Ⅲ
	78	磁器 小皿		101	58	24	103	透明釉	白	染付　外面-「富貴牡丹花」銘 見込み-牡丹花絵	瀬戸	1850～1900	SX107-F
	79	磁器 小皿		90	48	20	98	透明釉	白	見込み-寿文型押し 仏具皿の可能性有り	不明	昭和戦後?	SX107-F
	80	磁器 小皿	方角型	81	36	24		透明釉	白	見込み-菊花型押し 縁辺-雷文型押し	不明		SX107-F
	81	磁器 中皿		(128)	76	33	(129)	透明釉	白	染付　内面-梅ちらし　底裏に「大明年製」銘 見込み-五弁花コンニャク印判　口紅有り	肥前　波佐見	1740年代	SX76-F3
	82	磁器 中皿	輪花型	137	76	34	140	透明釉	白	染付　見込み-五弁花コンニャク印判 縁辺-松葉つなぎ　釉ハギ有り	肥前　波佐見	1750～1790	SK94-F
	83	磁器 中皿		136	68	37	136	透明釉	白	染付　縁辺-耕子文　外面-松葉文 蛇の目高台　,砂目有り　釉ハギ有り	肥前　波佐見 くらわんか皿	1810～1860	SX107-F
	84	磁器 中皿		(140)	(78)	34		透明釉	白	染付　縁辺一木の葉文 見込み-コンニャク印判　釉ハギ有り	肥前　Ⅳ期	1690～1780	SX76-F2
第26図	85	磁器 中皿		136	77	32	137	透明釉	白	染付　縁辺-草花文・唐草つなぎ 釉ハギ・焼継ぎ痕有り	肥前	1750～1790	SK94-F
	86	磁器 中皿		128		76	32	透明釉	白	染付 縁辺-草花文　外面-唐草つなぎ	肥前	1750～1790	SX76-F2
	87	磁器 中皿	輪花型	156	90	31	160	透明釉	白	色絵 内面-菊ちらし　口紅有り	有田 色絵皿14号	1950～	SD37-F
	88	磁器 大皿	輪花型	206	112	31		透明釉	白	染付　内面-牡丹絵 トキン有り	瀬戸	1900～1950	SD86-F
	89	磁器 大皿		(210)	(134)	33	(212)	透明釉	白	染付　見込み-五弁花コンニャク印判　焼継ぎ痕 縁帯-唐草つなぎ　底裏に「大明成化年製」銘	肥前	1690～1720	SX76-F SX107-F
	90	磁器 段重皿		148		63		透明釉	白	染付 外面-梅花散文	肥前	1750～1780	SX76-F2
第27図	91	磁器 徳利		76	7	24	16	透明釉	白	染付　外面-遠山山水絵に帆掛け舟 92と揃い徳利	瀬戸	1800～1850	SX107-F
	92	磁器 徳利		38	72	232		透明釉	白	染付　外面-遠山山水絵に庵寄人絵 底裏に「兵」字墨書銘	瀬戸	1800～1850	SK94-F
第28図	93	磁器 徳利		(34)	82	26		透明釉	白	染付 外面-南天に雀	瀬戸	1800～1850	SX107-F
	94	陶器 徳利			(130)			透明釉	灰	外面-草花文	瀬戸	1750～1775	SX76-F2
	95	磁器 蓋物(身)		(130)	76	102		透明釉	灰	染付 外面-竹囲いに朝顔	肥前	1750～1800	SK94-F
	96	磁器 蓋		(66)		42	(92)	青白釉	白	染付 外面-蛸唐草文	肥前	1690年代	B・C- 16～19　Ⅲ
	97	磁器 蓋		(146)		(28)		透明釉	白	染付　焼継ぎ痕有り 外面-草花文	肥前	1700～1750	SX76-F2
	98	磁器 蓋		115				透明釉	白	染付 外面-草花文	肥前	1750～1800	SX76-F2
	99	磁器 口紅皿		47	14	15	48	白色釉	白	型押し成形 手持ち掛け釉　100と対	備前	1860～1900	SK94-F
	100	磁器 口紅皿		47	14	15	48	白色釉	白	型押し成形 手持ち掛け釉	備前	1860～1900	SX107-F
	101	磁器 紅皿		57	29	13	29	透明釉	白	外面-蛸唐草文型押し	肥前	1850年頃	C-10　Ⅲ
	102	磁器 紅皿蓋		(61)	(17)	(17)		透明釉	白	染付 生地に一部貫入有り	肥前	1850年頃	C-7　Ⅱ
	103	磁器 レンゲ						透明釉	白	染付　型押し成形 内面-菊ちらし　外面-唐草つなぎ	瀬戸	1900～1940	SX107-F
第29図	104	文房具 水滴	箱型	たて 60	よこ 46			透明釉	灰	型押し成形 筆筒様	瀬戸	1900～1940	SK74-F
	105	文房具 水滴	鷹型	たて	よこ	高さ		透明釉	灰		瀬戸	1860～1900	SX76-F2

表6　第1次調査出土遺物観察表(4)

挿図番号	遺物番号	器種	形状特徴	計測値(mm) 口径	底径	器高	最大径	釉薬	胎土色	装飾　印　銘　染付　文様　その他	製作 製作地	製作年代	出土地点
第29図	106	磁器 仏花瓶			(42)	(84)		透明釉	白	染付　外面- 水仙文 火受け有り	瀬戸	1760～1800	SK95-F2
	107	磁器 仏花瓶			(36)			透明釉	灰	染付	瀬戸	1820～1860	包含層Ⅲ層
	108	磁器 仏花瓶		(40)	63	(53)	(43)	灰釉	灰白 赤褐	内面の胎土が酸化	肥前　有田 (青磁)	1900年頃	包含層Ⅱ層
	109	磁器 御神酒徳利		15		(100)		透明釉	灰	染付　外面- 蛸唐草文	肥前	1750～1800	SX76-F2
	110	磁器 仏飯器			46	37		透明釉	白	染付　外面- 蛸唐草文	肥前	1700～1750	SX76-F
	111	磁器 仏飯器		62			64	透明釉	灰	染付　外面- 菊ちらし	肥前	1750～1800	SX76-F2
	112	磁器 仏飯器		56			60	透明釉	白	染付　外面- 丸窓耕子文 見込みに銘有り	肥前　有田 (有田色絵)	1900年頃	包含層Ⅱ層
	113	磁器 仏飯器		60			62	透明釉	灰	染付　外面- 渦蛸唐草文 蛇の目高台	肥前	1800～1850	SX76-F1
	114	玩具 仏花瓶			(24)	(37)	(32)	透明釉	白	外面- 文様有り(種類不明)	肥前	1750～1800	SK94-F
	115	玩具 御神酒徳利					44	透明釉	灰	外面- 蛸唐草文	肥前	1800～1850	Sk94-F
	116	玩具 鉢		(46)	(30)	(30)	(46)	透明釉	灰		瀬戸	1850～1900	SK94-F
	117	磁器玩具 人形						透明釉	白	雛飾り(福助) 型押し成形	瀬戸	1850～1900	A区包含層
	118	かわらけ 燈明皿		92	72	13	94		褐	内外面- ロクロ痕 底面- 糸切り痕有り	在地系	15世紀	SD23-F
	119	かわらけ 小皿		(92)		(20)	(93)		褐	内外面- ロクロ痕 外面- 指押し痕	在地系	15世紀	SD24-F
	120	瓦質 焙烙							褐	取っ手- 指押し痕有り 型押し成形	江戸在地系	1820～1860	SX107-F
	121	瓦質 焙烙							灰褐	型押し成形	江戸在地系	1820～1860	SX107-F
	122	瓦質 焙烙							灰褐	取っ手- 指押し痕有り 型押し成形	江戸在地系	1850～1890	SX107-F
	123	瓦質 コンロ			162				灰褐	外面- 鯉線刻絵	江戸在地系	1820～1860	SX76-F2
	124	瓦質 コンロ			150				褐	型押し成形	江戸在地系	1820～1860	SX76-F1
第30図	125	瓦質 コンロ			(84)	(78)			褐		在地系	1850～1880	B8- Ⅲ
	126	瓦質 風口							灰褐	型押し成形	江戸在地系	1820～1860	SX107-F
	127	瓦質 七輪							褐	型押し成形	在地系	1850～1900	SX76-F
	128	瓦質 手あぶり		168	200	163	204	褐釉	灰茶	内面- ロクロ痕 把手- 獣面彫刻	江戸在地系	1850～1890	SK94-F
	129	瓦質 手あぶり	短筒型	172	134	111	186		灰茶	内外面- ロクロ痕 糸切り痕有り	江戸在地系	1850～1880	SX107-F
	130	瓦質 火鉢			(244)				灰茶	外面- 菊花押印 型押し成形	江戸在地系	1820～1860	B-10　F
	131	瓦質 炭壺							茶	内面- ロクロ痕	江戸在地系	1820～1860	B8- Ⅲ
	132	瓦質 炭壺		170	160	264	239		灰茶	内外面- ロクロ痕	江戸在地系	1820～1860	SX107-F
	133	瓦質 手あぶりの獣足		タテ 93	ヨコ 78	高さ 42			灰茶		江戸在地系	1820～1860	SD77-F
	134	瓦質 炭壺蓋		196	194	48	223		灰	内面- ヘラ書き有り	江戸在地系	1850～1880	SX107-F
第31図	135	瓦質 炭壺蓋		(232)		33			褐		江戸在地系	1850～1900	SK61-F
	136	瓦質 炭壺蓋		196	199	33	200		赤褐		在地系	1850～1900	SK61-F
	137	瓦質陶器 擂鉢		329	162	154	340		赤褐	内外面- ロクロ痕有り	在地系	1820～1860	A区包含層
	138	土製品 雛人形		タテ 31	ヨコ 64	厚さ 43				官女 型押し成形			SD86-F
	139	土製品 雛人形		タテ 38	ヨコ 35	厚さ 32				内裏雛(男) 型押し成形			SD23-Y
	140	土製品 雛人形		タテ 58	ヨコ 32	厚さ 16				内裏雛(女) 型押し成形			SX76-F2

表７　第１次調査出土遺物観察表（５）

挿図番号	遺物番号	器種	形状特徴	計測値(mm) 口径	底径	器高	最大径	釉薬	胎土色	装飾 印 銘 染付 文様 その他	製作 製作地	製作年代	出土地点
第31図	141	土製品 雛人形		タテ 34	ヨコ 43	厚さ 17				母子像 型押し成形			SK94-F
	142	石製品 硯		タテ 129	ヨコ 66	厚さ 22							SX107-Y
	143	石製品 硯		タテ 113	ヨコ 69	厚さ 20							SX107-Y
	144	石製品 砥石		タテ 34	ヨコ 43	厚さ 17							SD23-Y
	145	石製品 砥石		タテ 58	ヨコ 32	厚さ 16							SK94-F
	146	石製品 砥石		タテ 34	ヨコ 43	厚さ 17							SD23-Y
	147	金属製品 古銭								寛永通宝			SE71-F
	148	金属製品 古銭								寛永通宝			SX76-F

表８　第２次調査出土遺物観察表（１）

挿図番号	遺物番号	器種	形状特徴	計測値(mm) 口径	底径	器高	最大径	釉薬	胎土色	装飾 印 銘 染付 文様 その他	製作 製作地	製作年代	出土地点
第32図	1	陶器 大甕							灰茶	外面－平行タタキ 内面－楕円アテ	珠洲	14世紀	C区包含層
	2	陶器 中碗		110	54	72	112	透明釉	灰	外面－サビ絵	唐津	1750～1800	C区包含層
	3	陶器 土鍋蓋				58		灰釉	褐	内面－ロクロ痕	相馬	1850～1900	D区③ Ⅱ
	4	陶器 鉢	八角鉢	154	68	63	172	灰釉	灰茶	内外面－ロクロ痕 底裏に墨書銘有り	唐津	1850～1900	C区包含層
	5	陶器 土鍋		220	86	111	250	白色釉	茶色	内外面－ロクロ痕 外面－煤が付着、白色釉は口縁のみ	相馬	1900～1950	C区包含層
	6	陶器 小壺		80	70	84	122	海鼠釉	茶	内部と口縁部にかけて海鼠釉 底面に糸切り痕有り	大宝寺	1890～1930	C区包含層
	7	陶器 鉢		386		(70)	(392)		茶色	外内面－ロクロ痕 内面－刷毛目文	唐津	1850～1900	C区東部包含層
第33図	8	磁器 湯通し		236	110	196	256	白釉	褐	染付 外面－草花文	在地系	1850～1900	C区包含層
	9	陶器 湯通し			84		174	海鼠釉	灰茶		大宝寺	1820～1890	C区包含層
	10	陶器 湯通し		136	78	144	158	海鼠釉	褐		大宝寺	1890～1930	C区包含層
	11	陶器 甕		200	120	191	208	海鼠釉	灰	外面－ロクロ痕 外面の海鼠釉が火被りで変色	大宝寺 もしくは在地系	1890～1930	C区包含層
	12	陶器 擂鉢		258	108	129	272	褐色釉	茶色	内面-10条単位の摺り目有り	備前系	1900～1950	D区③RP30
	13	陶器 擂鉢		304	156	134	320	褐釉	白茶		在地系	1900～1950	C区包含層
	14	陶器 擂鉢		(340)	(134)	156			黒褐	内外面－ロクロ痕 内面－摺り目	在地系	1900～1950	C区包含層
第34図	15	陶器 擂鉢		332	148	150	346	褐釉	茶	内外面－ロクロ痕 内面－摺り目	在地系	1900～1950	C区包含層
	16	磁器 坏		70	30	37	76	緑釉	白	青磁	肥前	1750～1800	C区包含層
	17	磁器 坏		70	30	37	76	緑釉	灰	青磁 貫入有り	不明	不明	C区包含層
	18	磁器 小碗		66	34	41	68	透明釉	白	染付 外面－童子に花・蝶散らし	瀬戸	1900～1950	C区包含層
	19	磁器 盃		60	26	30	62	透明釉	白	染付	瀬戸・美濃	1850～1900	C区包含層
	20	磁器 盃		62	26	30		透明釉	白	染付	瀬戸・美濃	1850～1900	C区包含層
	21	磁器 小碗		100	35	52	50	透明釉	灰	染付　見込み－コンニャク印判 縁辺－ろうらく文　外面－摺り絵	肥前	1800～1850	C区包含層
	22	磁器 小碗		(76)	(38)	46	(78)	透明釉	白	染付　外面－片摺紙の丸波に兎絵 底裏に「青山年製」銘	瀬戸	1850～1900	C区包含層
	23	磁器 中碗		120	58	61	122	透明釉	白	色絵　外面－花鳥絵 24と対	有田	1800～1850	C区包含層
	24	磁器 中碗蓋		128		25	131	透明釉	白	色絵　外面－山方花鳥風景絵	有田	1800～1850	C区包含層

表9　第2次調査出土遺物観察表(2)

挿図番号	遺物番号	器種	形状特徴	計測値(mm) 口径	底径	器高	最大径	釉薬	胎土色	装飾　印　銘　染付　文様　その他	製作 製作地	製作年代	出土地点
第35図	25	磁器 中碗		95	33	41		透明釉	白	色絵　外面- 竹赤絵 26と対	伊万里	1800～1850	C区包含層
	26	磁器 中碗		92	32	41		透明釉	白	色絵　外面- 松竹梅赤絵	伊万里	1800～1850	D区③RP26
	27	磁器 中碗		108	41	56		透明釉	白	染付　縁辺- ろうらく文 外面- 型紙摺絵	瀬戸	1850～1900	D区③RP4
	28	磁器 中碗		108	36	55		透明釉	白	染付　見込み- 松竹梅文　縁辺- ろうらく文 外面- 片摺り紙の菊花文	瀬戸	1850～1900	C区包含層
	29	磁器 中碗		109	40	59	111	透明釉	白	染付　見込み- 松竹梅文 縁辺- ろうらく文　外面- 型紙摺絵	瀬戸	1850～1900	C区包含層
第36図	30	磁器 中碗	蓋物	106	70	80	108	透明釉	白	染付 外面- 春蘭に菊摺絵	瀬戸	1850～1900	C区包含層
	31	磁器 中碗	端反型	112	20	42	115	透明釉	白	染付 内外面- 型紙摺り絵	瀬戸	1850～1900	C区包含層
	32	磁器 小皿	輪花型	100	61	28	102	透明釉	白	染付 内面- 山水楼閣絵　口サビ有り	肥前	1750～1800	C区包含層
	33	磁器 小皿		104	66	23	109	透明釉	灰白	染付 内面- 南天絵　口サビ有り	肥前	1850～1900	C区包含層
	34	磁器 小皿		102	33	20		透明釉	白	染付　内面- 牡丹絵 外面ー唐草つなぎ　蛇の目高台	肥前	1850～1900	C区包含層
	35	磁器 小皿		106	60	18	110	透明釉	白	染付	瀬戸	1900～1950	SX202-F
	36	磁器 小皿	方角型	82	35	25		透明釉	灰	内面- 型押し文有り	瀬戸	1850～1900	C区包含層
	37	磁器 小皿			64	20	112	透明釉	白	染付　縁辺- 片摺り紙雷文 口サビ有り	瀬戸	1850～1900	C区包含層
第37図	38	磁器 中皿	輪花型	138	90			透明釉	白	染付 外面- 山水絵　蛇の目高台	肥前	1750～1800	C区包含層
	39	磁器 中皿		142	70	34	143	透明釉	白	染付　見込み- 五弁花コンニャク印判 縁辺- 梅文つなぎ　釉ハギ有り	肥前	1750～1800	C区包含層
	40	磁器 中皿		(134)	(76)	45		透明釉	灰	染付　見込み- 五弁花コンニャク印判 縁辺- 方格割松竹梅文　外面- 唐草つなぎ	肥前	1750～1800	D区③　II
	41	磁器 中皿	浅胴丸型 段重	100	94	29	106	透明釉	白	染付 外面- 菊に桔梗絵	肥前	1900～1950	C区包含層
	42	磁器 中皿	変形型	(158)	74	35		透明釉	白	色絵 内面- 鶴亀区画絵	伊万里	1850～1900	C区包含層
	43	磁器 中皿	平型	164	92	20	172	透明釉	白	色絵 縁辺- 南天に雀絵	有田	1850～1900	C区包含層
	44	磁器 中皿		146	89	28	147	透明釉	白	染付　内面- 片摺り紙の楼閣絵 外面- 唐草つなぎ	瀬戸系	1800～1850	C区包含層
第38図	45	磁器 中皿			70	37	140	透明釉	白	染付 蛇の目高台	瀬戸	1850～1900	C区包含層
	46	磁器 中皿		162	94	29	162	透明釉	白	色絵　内面- 花籠と春蘭絵 外面- 花文	瀬戸	1900～1950	C区包含層
	47	磁器 中皿	輪花型	142	74	35	144	透明釉	白	染付　見込み- 松竹梅文 縁辺- 松竹梅に鳥文　蛇の目高台	瀬戸	1850～1900	C区包含層
	48	磁器 中皿	輪花型	150	91	33	156	透明釉	白	色絵　内面- 水仙に山水絵 外面- 椿・巾着の唐草つなぎ	不明	1800～1850	C区包含層
	49	磁器 中皿		146	89	28	147	透明釉	白	染付　内面- 水仙に月見絵 外面-「風門外水流柳口」銘　七言絶句か?	瀬戸	1900～1950	C区包含層
	50	磁器 浅鉢	輪花型	(152)	(98)	48	(154)	透明釉	白	色絵　縁辺- 松竹梅絵　外面- 松竹梅文 蛇の目高台　底裏に銘有り	瀬戸	1850～1900	D区包含層
第39図	51	磁器 鉢	輪花型	154	45	50	156	透明釉	白	色絵 縁辺- 花鳥・松竹梅三方絵	伊万里	1850～1900	C区包含層
	52	磁器 中鉢	輪花型	154	92	52	156	透明釉	灰	色絵　縁辺- 瓢箪と葡萄のツタ草つなぎ 外面- 椿・巾着袋文　蛇の目高台	伊万里	1850～1900	C区包含層
	53	磁器 鉢	坏洗い		100	60	178	透明釉	白	染付　内面- 春蘭絵　外面- 松木絵 蛇の目高台	肥前	1800～1850	C区包含層
第40図	54	磁器 鉢	輪花型	164	82	64	185	透明釉	白	染付　内面- 菊花型紙摺絵 外面- 蝋唐草つなぎ　蛇の目高台	肥前	1850～1900	C区包含層
	55	磁器 蓋		94	38	30	94	透明釉	白	染付 外面- 摺絵	瀬戸	1850～1900	C区包含層
	56	磁器 蓋				31	103	透明釉	白	染付　見込み- 松竹梅文 外面- 草花に兎絵	瀬戸	1850～1900	C区包含層
	57	磁器 蓋		126		25	132	透明釉	白	色絵 外面- 花鳥絵　底裏に「冨貴長春」銘	伊万里 (古伊万里)	1800～1850	C区包含層
	58	磁器 徳利		30	60	176	31	透明釉	白	染付 外面- 牡丹絵	肥前	1850～1900	C区包含層
	59	磁器 徳利		38	56	203	70	透明釉	白	染付　外面ー型摺り紙の富士山・帆 掛け舟・松下に人物絵　61と対	肥前	1850～1900	C区包含層

表10　第２次調査出土遺物観察表（３）

挿図番号	遺物番号	器種	形状特徴	計測値(mm) 口径	底径	器高	最大径	釉薬	胎土色	装飾 印 銘 染付 文様 その他	製作 製作地	製作年代	出土地点
第41図	60	磁器 徳利		34	72	213	72	透明釉	白	染付 外面－菊花絵	肥前	1850～1900	C区包含層
	61	磁器 徳利			60		82	透明釉	白	染付　外面－摺紙の富士山・帆掛け舟・松下に人物絵	肥前	1850～1900	C区包含層
	62	磁器 徳利		30	50	201	70	透明釉	灰白	染付 外面－片摺り紙の鶴・亀・菊花文	肥前	1850～1900	C区包含層
	63	磁器 紅皿		79	26	21	80	透明釉	白	染付 外面－牡丹・藤絵	肥前	1800～1850	C区包含層
	64	磁器 紅皿		56	21	18	62	白釉	白	外面－蛸唐草型押し 65と対か?	肥前	1800～1850	D区④ 包含層
	65	磁器 紅皿		54	20	14	60	白釉	白	外面－蛸唐草型押し	肥前	1800～1850	D区④ 包含層
	66	玩具 壺			29			褐釉	褐		在地系	1900～1940	D区③　Ⅱ
	67	玩具 壺		(37)	(25)	34		灰釉	茶		在地系	不明	D区③RP6
	68	玩具 桶		(46)	(36)	29		褐釉	褐		在地系	1900～1940	C区包含層
第42図	69	磁器 仏飯器		68	40	59	70	透明釉	灰白	染付	肥前	1800～1850	C区包含層
	70	磁器 香炉		(88)	(33)	(57)		透明釉	白	色絵 外面－赤絵	伊万里	1750～1800	D区③ 包含層
	71	瓦質 火鉢		(250)		(124)	(280)		茶	獣脚手有り	江戸在地系	1850～1900	C区包含層
	72	瓦質 コンロ							灰茶		江戸在地系	1800～1850	C区包含層
	73	石製品 戸車		直径 75		厚さ 28					不明	不明	D区包含層
	74	石製品 戸車		直径 50		厚さ 11					不明	不明	D区包含層
	75	石製品 硯		タテ (135)	ヨコ 43	厚さ 17					不明	不明	SD274-F3 RP7
	76	石製品 硯		タテ 121	ヨコ 59	厚さ 11					不明	不明	D区包含層
	77	骨格器 格笓									不明	不明	SK239-F

表11　木製品観察表

挿図番号	遺物番号	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	内面	外面	出土地点	備考
第43図	1	椀		(65)	(44)	黒漆	黒漆	SK39	内外面に赤漆で蓬莱文
	2		(124)	(64)	(50)	赤漆	黒漆	SX107	
	3		(120)	67	(52)	赤漆	黒漆	SX107	
	4	曲物	109		38	側ケビキ	底板ケズリ	SX107	側面桜皮止め
	5	下駄	長さ165　幅88　高さ44					SD274	差歯

V　まとめと考察

藤島D遺跡は藤島町の市街地である中町に所在し、藤島川や京田川によって形成された河間低地上に立地する。今回の調査は都市計画街路事業(県道改良工事)を原因としたもので、調査面積は第1・2次併せて2,280㎡を対象とした。以下に調査で得られた成果について要約し、若干の考察を加えてまとめとする。

1）検出された遺構は、井戸跡・溝跡(溝状遺構)・大小の土坑と不定型状の落ち込みなど約120基を数えた。遺構分布の概観は、1次調査区では2箇所の集中区域が認められ、地盤の安定した微高地上を利用したものと認識された。一方、2次調査区では北西域において井戸跡ほかの遺構がある程度まとまって検出された。

2）井戸跡は3基確認され、井戸眼として曲物を設置する例と水道配管施設として竹管を敷設する例の2形態が認められた。18条登録した溝跡には、水路や区画溝としての性格を持つものの他、藤島城二の丸堀の一部の可能性も考えられるものも存在した。その他、土坑や竪穴状の遺構、落ち込みなど約110基余が検出され、本稿では主として構内から時期推定可能な遺物が出土したものについて概述した。

3）2ヶ年の調査で出土した遺物は、土器・陶磁器・瓦器・土製品・石製品・金属製品・木製品・骨格器などで、整理箱にして38箱相当を数えた。分布の概観では、1次調査において遺構内出土のものが大半であったのに対し、2次調査ではその大半が包含層から出土したものであった。これは、1次調査区は撹乱や整地等により遺物包含層が削平されたが、2次調査区域では包含層が遺存した結果と考えられた。

4）陶磁器の器種は食器や調理・貯蔵器が一般的であり、瓦器には焙烙・手あぶり・炭壺などの暖房具を認めた。土製品に雛人形、石製品には硯・砥石・戸車など、木製品に椀・箸・曲物・下駄などの各器種が存在した。その他、玩具や文房具の類もあり、多種多様な内容が認められた。

5）陶磁器や瓦器はいづれも国産のもので、在地系と搬入品が認められた。搬入品の生産地は珠洲・瀬戸・美濃・唐津・備前・肥前・有田・伊万里・相馬など、全国各地に及んだ。年代的には藤島城創築にかかる14世紀のものから昭和戦後のものまでを含み、量的主体をなすのは18世紀後半～19世紀代の所産に比定される遺物であった。

遺跡は「藤島城跡」の東方約300mに位置することから、その外郭とされる部分に当たる。遺跡発見の契機となった平成9年度の分布調査では、過去の盛土整地等が原因して中世の遺物包含層は削平されて遺存しないと推測された。今回の調査の結果、江戸時代以降の近世遺構が主体的に検出され、藤島城に関わる中世の遺構については判然としない状況であった。出土した遺物には14・15世紀に比定されるものも含まれるが、流れ込みなど二次堆積の要因が強いと思われる。当該期の遺構が存在した可能性は考えられるが、後世の整地や掘り込み等によって破壊されたと受け取られ、その様相は不明と言わざるを得ない。しかし、前述した

ごとく遺跡は藤島城の外郭部に当たり、立地環境から想定しても中世の街並みが存在していたことが考えられる。また中世以降、近世の町が続いていたことは本調査からも実証され、現代に至るまで延々とした歴史のある町と言えるであろう。

庄内平野のほぼ中央に位置する藤島の地は、穀倉地帯の中心的拠点として開けたとともに地理的に陸上交通や水運の要衝であった。このことは流通や交易の発達を想起させ、江戸時代に日本海を往来した「船前船」により、全国各地の物産が運ばれたことは想像に難くない。交易の実態は出土遺物の内容から裏付けられるとともに、当時の庶民生活をも彷彿させる。

《参考文献》

山形県　1978：『土地分類基本調査　鶴岡』
岡村吉右衛門 1978：『日本の民窯　陶磁大系27』平凡社
藤島町　1984：『藤島町史　上巻』
矢部良明　1998：『日本やきもの史』美術出版社
伊藤邦弘・布施明子　1990：『藤島城跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第159集
伊藤邦弘・氏家信行　1993：『藤島城跡第５次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第193集
野尻　侃 他　1994：『藤島城跡第６次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第18集
須賀井新人・髙桑　登　1997：『荒川２遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第43集

報告書抄録

ふりがな	ふじしまでーいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	藤島D遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第82集
編集者名	野尻侃　須賀井新人　多田和弘
編集機関	財団法人　山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号　ＴＥＬ023-672-5301
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふじしまでーいせき 藤島D遺跡	やまがたけんひがしたがわぐんふじしままちなかまち 山形県東田川郡藤島町中町	6423	平成9年度登録	38度46分00秒	139度54分10秒	第1次調査 19980916 ～ 19991030 第2次調査 19990913 ～ 19991119	880 1,400	都市計画街路事業藤島駅笹花線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤島D遺跡	集落跡	中世 (14・15世紀)	溝	かわらけ 陶器(甕・擂鉢)	遺構の主体的時期は江戸末～大正時代まで、陶磁器を中心とした多様な遺物が出土した。 (総出土箱数：３８)
		近世 (16～19世紀)	井戸 土坑 溝	陶器(壺・甕・擂鉢) 磁器(坏・碗・皿) 土製品(人形) 石製品(硯・砥石) 金属製品(貨幣)	

図　　版

第1次調査区全景（東から）

図版2

面整理（東から）

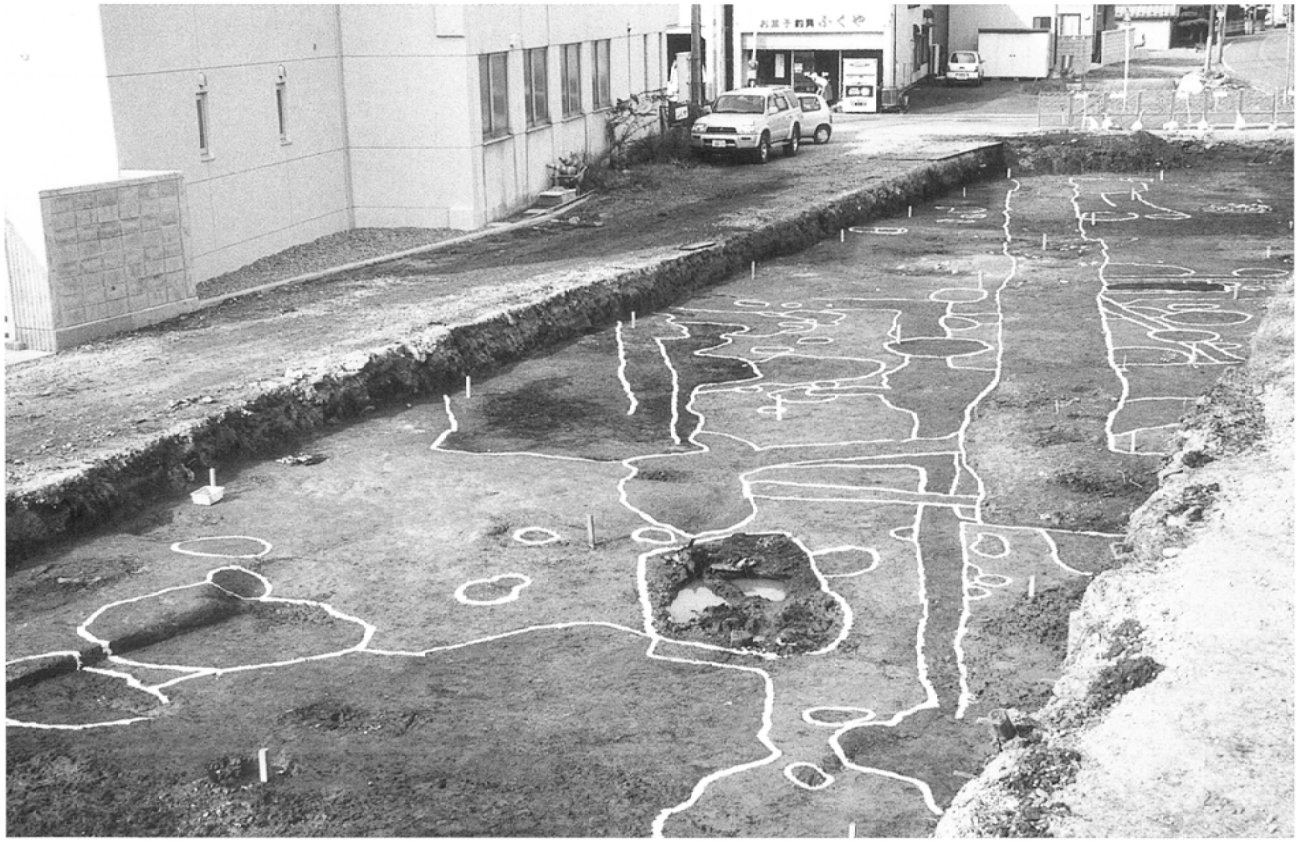
トレンチ掘り下げ（西から）

水路跡精査（西から）

断面実測（東から）

溝跡精査（西から）

A区完掘状況（西から）

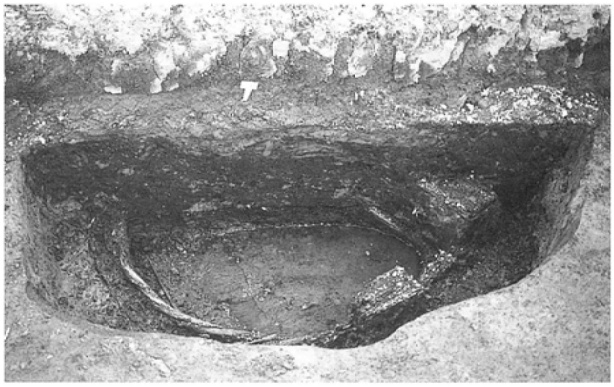


B区完掘状況（東から）

第1次調査

図版4

SE71土層断面（西から）

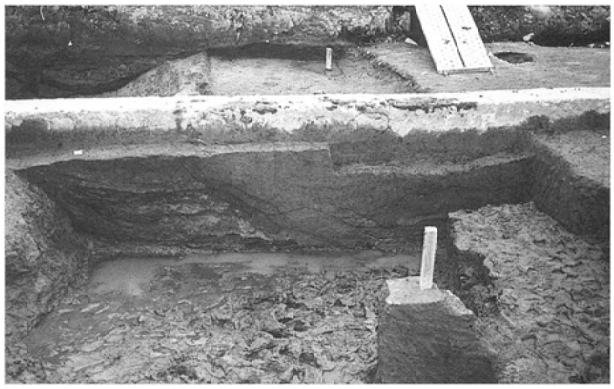


SE64土層断面（東から）

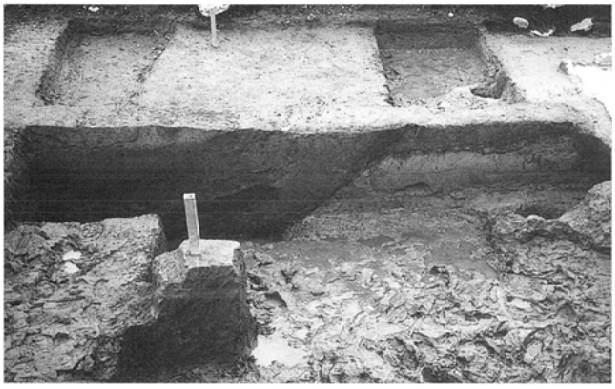
SE71井戸眼検出状況①（西から）

SE71井戸眼検出状況②（東から）

SD23土層断面①（南から）



SD23土層断面②（南から）

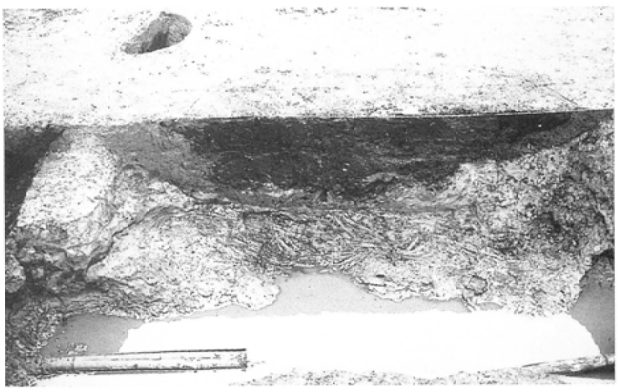


SD23土層断面③（北から）

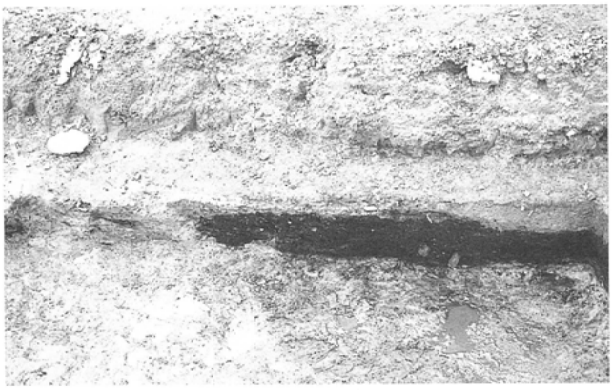
SD23完掘状況（南から）

第1次調査

SD75・SX76土層断面①（東から）

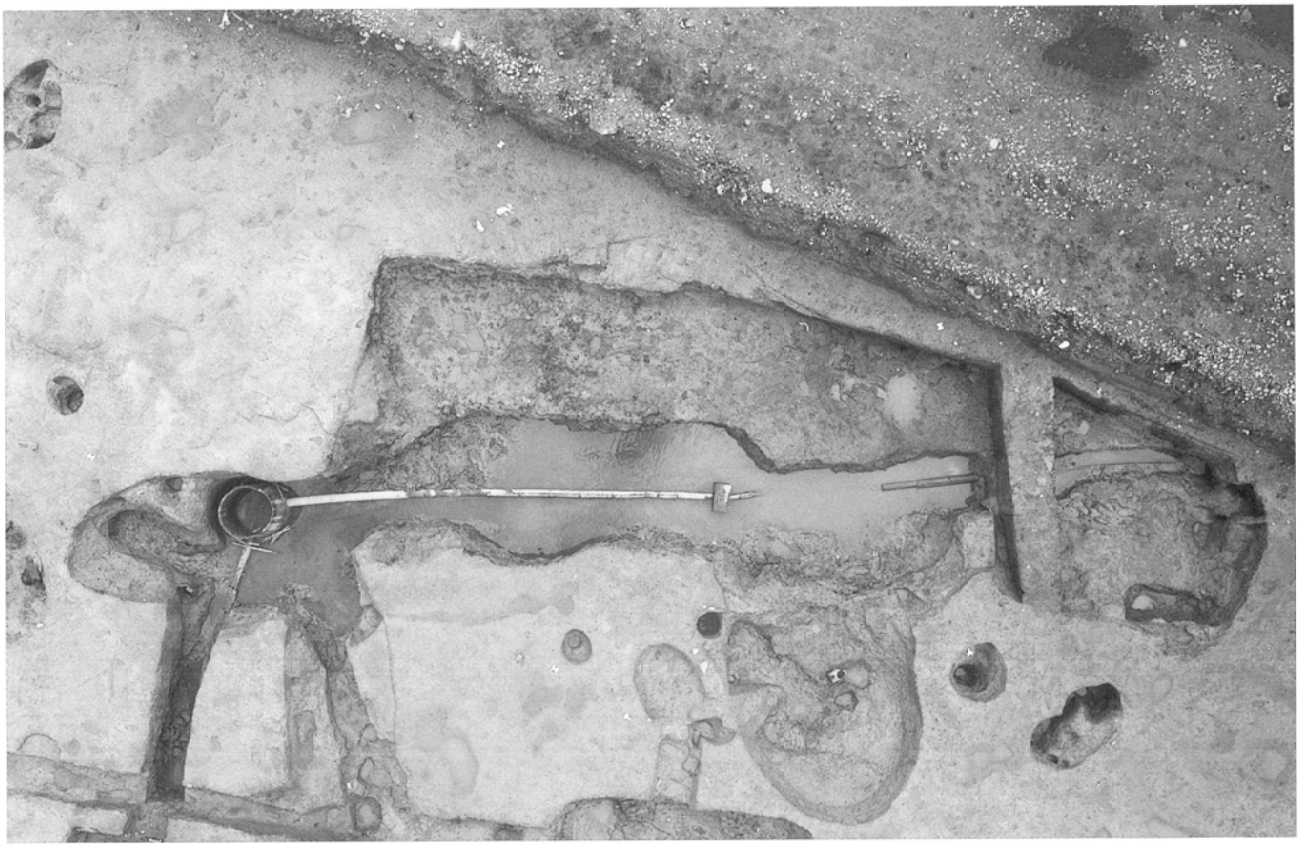


SD75・SX76土層断面②（南から）



SD75・SX76土層断面③（北から）

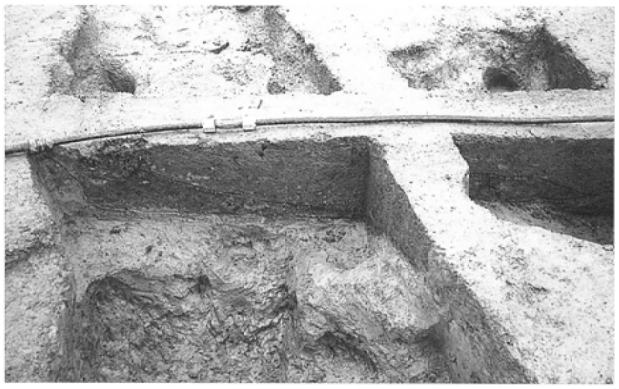
SD75・SX76土層断面④（東から）



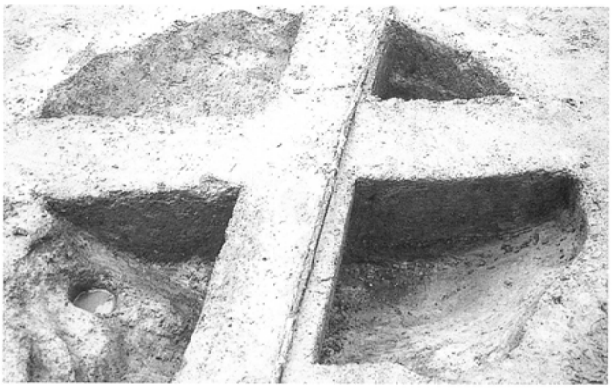
SE71・SD75・SX76完掘状況（空中写真）

第1次調査

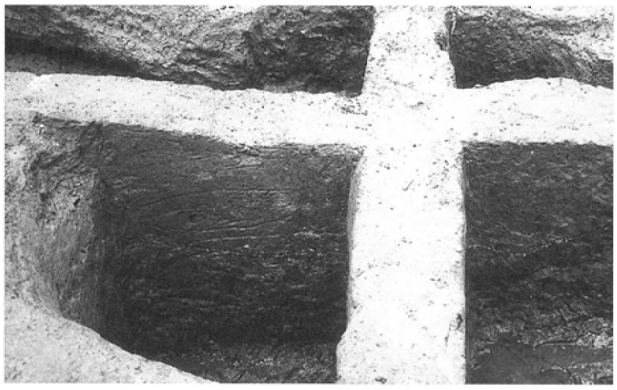
図版6



SK33・SD35土層断面（東から）



SK33土層断面（南から）

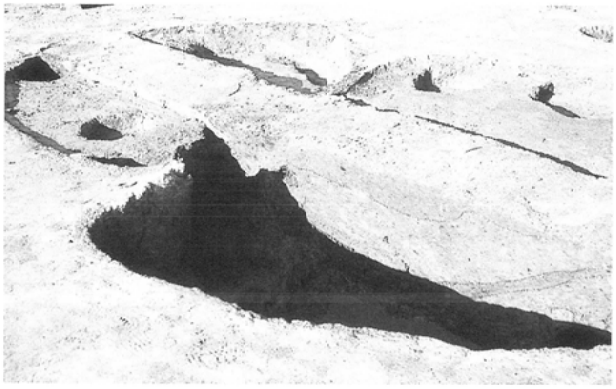


SK30土層断面（北から）

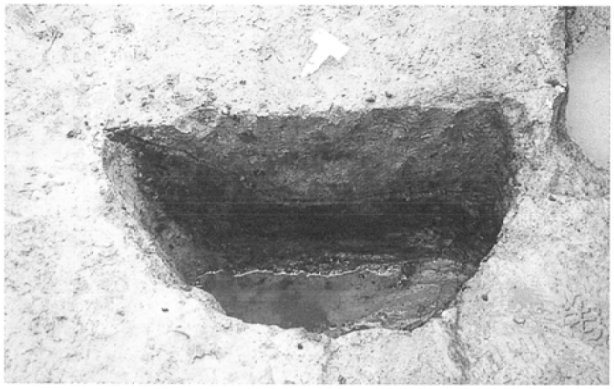
SK30・33・SD35完掘（空中写真）

SK44・SD47土層断面①（東から）

SK47・SD47土層断面②（東から）

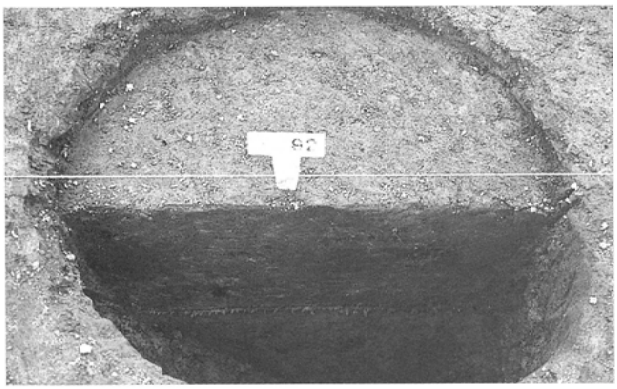


SK42・43土層断面（南から）



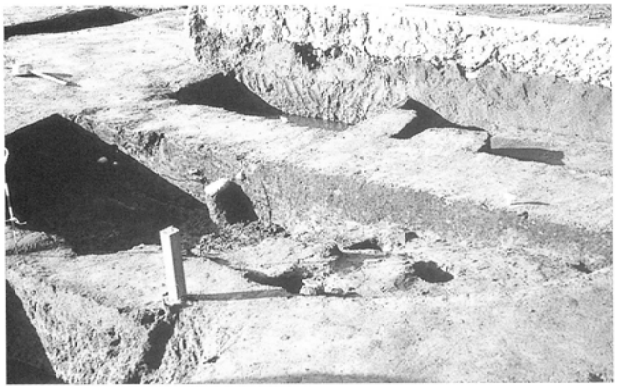
SP36土層断面（東から）

第1次調査



SP92土層断面（東から）

SP93土層断面（東から）



SK29・32土層断面①（南から）

SK29・32土層断面②（南から）

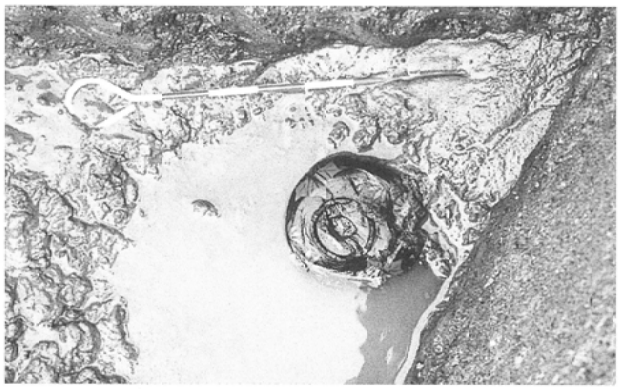
SK29・32周辺遺構完掘状況（南から）

第1次調査

図版8

SX38・SK39土層断面①（北から）

SX38・SK39土層断面②（北から）

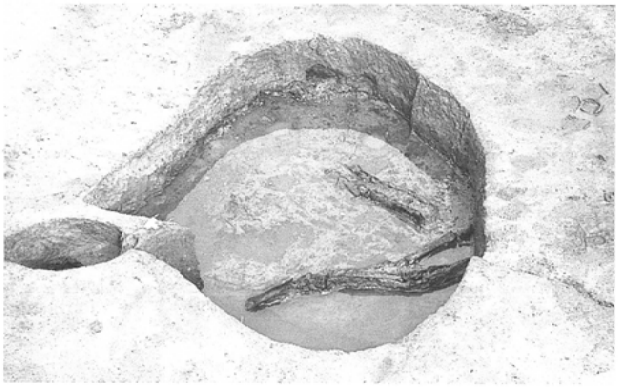


SK39遺物出土状況①（北から）

SK39遺物出土状況②（北から）

SK66土層断面①（東から）

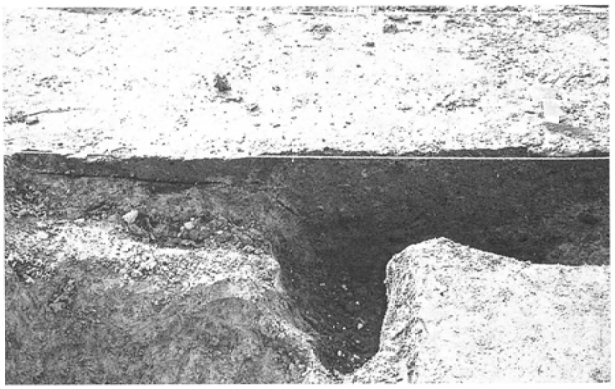
SK66土層断面②（北から）



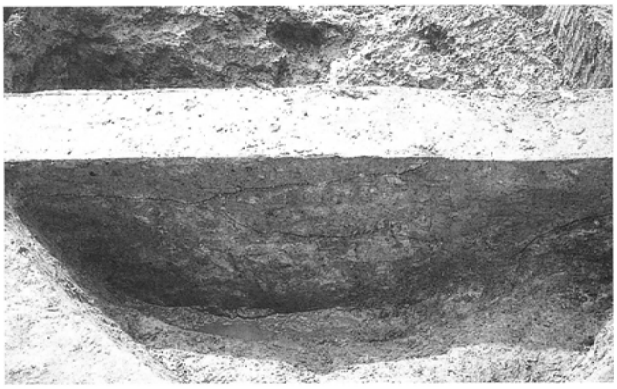
SK66完掘状況（南から）

SK66遺物出土状況（東から）

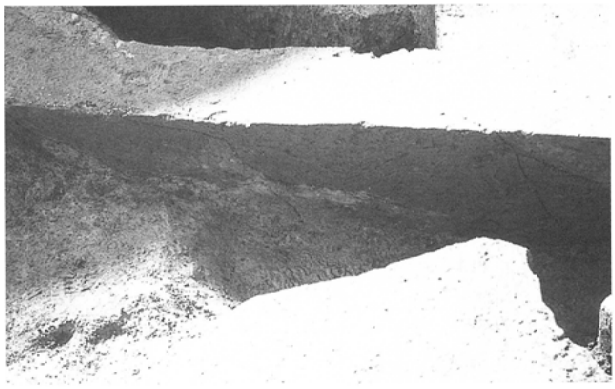
第1次調査



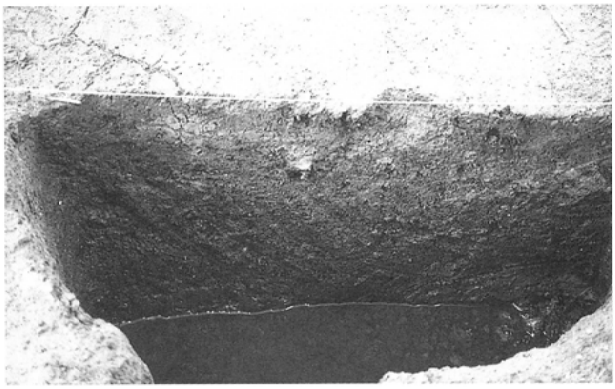
SK78・SP81土層断面（北から）



SK82土層断面（北から）



SD77・SK94土層断面（北から）



SK94土層断面（北から）

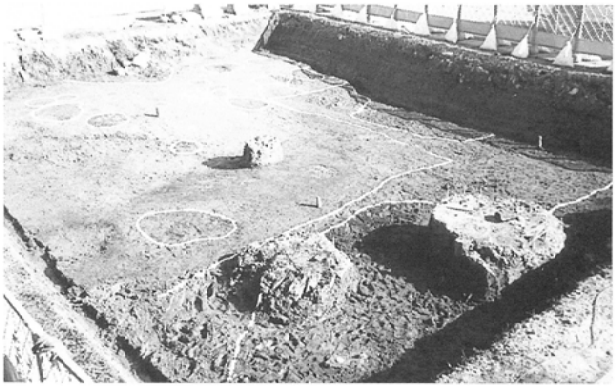
SX107遺物出土状況（南から）

第1次調査

図版10

C3～5区検出状況①（西から）

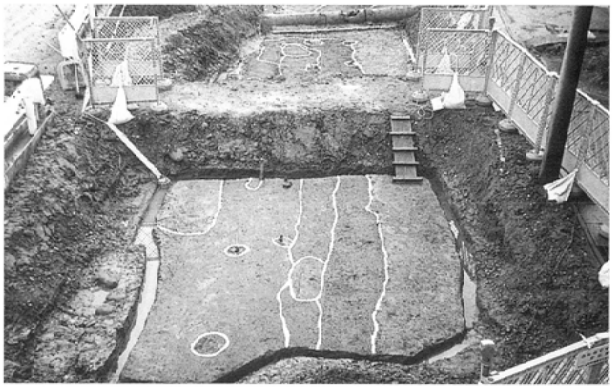
C6区検出状況②（西から）



C2区検出状況（西から）

C1区検出状況（西から）

D3区検出状況（西から）



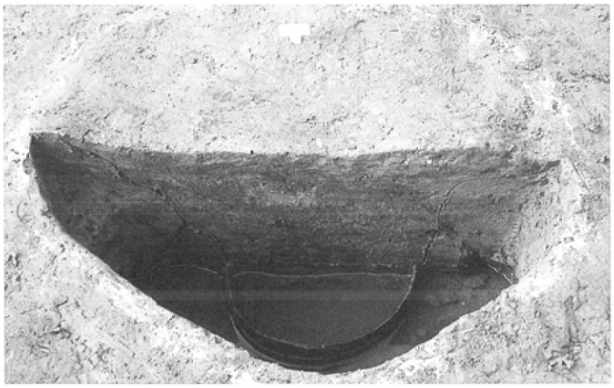
D1・2区検出状況

第2次調査

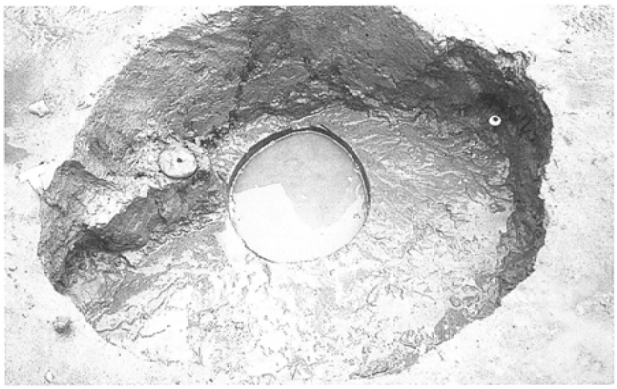
SD222完掘状況（空中写真）

SD222土層断面（西から）

SX224遺物出土状況（南から）



SE250土層断面（東から）



SE250完掘状況（東から）

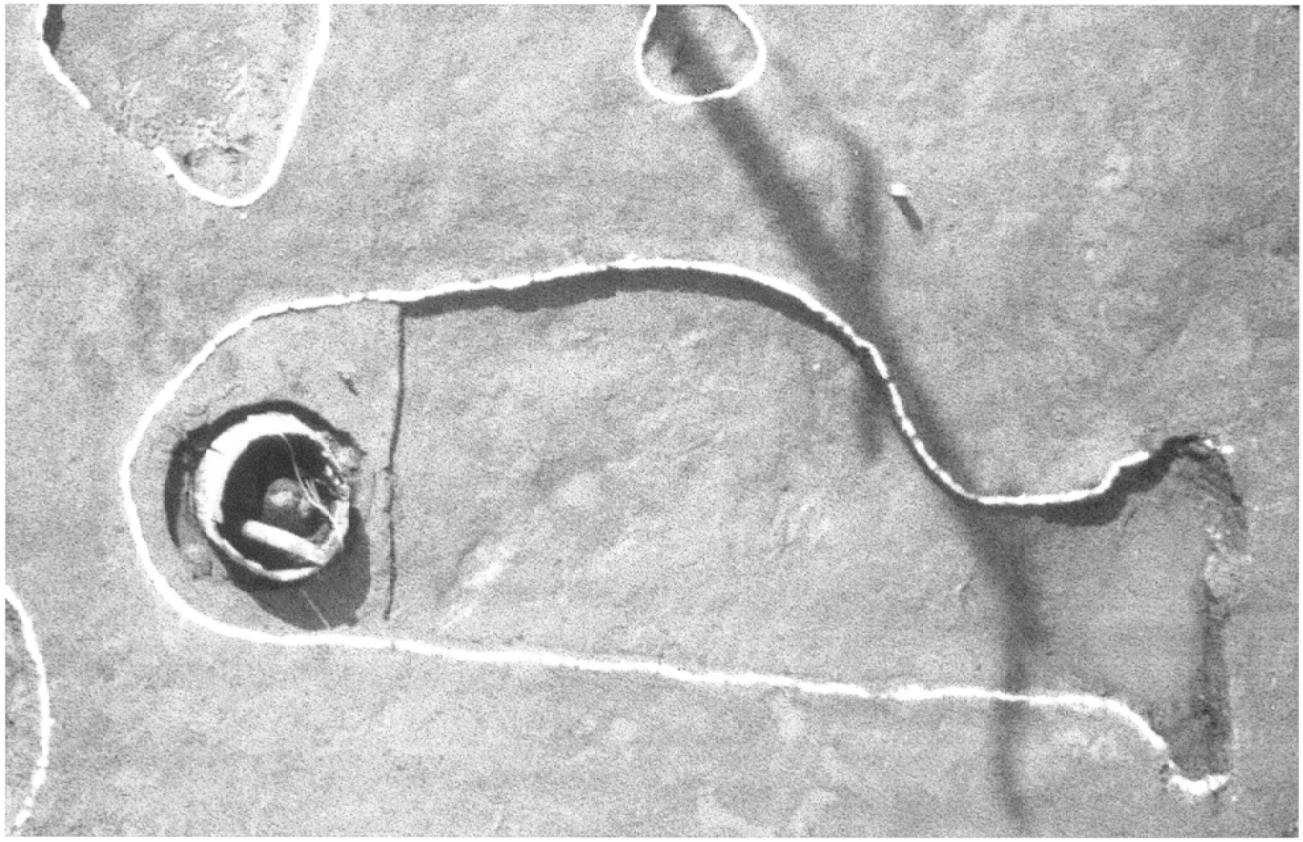
第2次調査

図版12

SD205完掘状況（西から）

SD205土層断面（東から）

SX264遺物出土状況（南から）

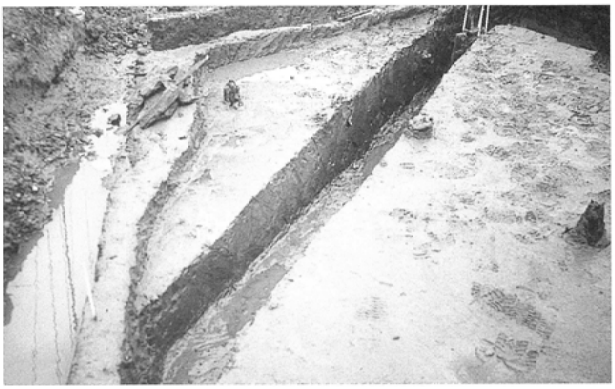


SD250・SX264完掘状況（空中写真）

第2次調査

D2区水路跡検出状況（西から）

D2区土層断面①（東から）



D2区土層断面②（西から）

D2区遺物出土状況①（東から）

D2区遺物出土状況②（北から）

D1区遺物出土状況（北から）

D1区土層断面（西から）

第2次調査

図版14

D3区水路跡検出状況（西から）

D3区土層断面①（西から）

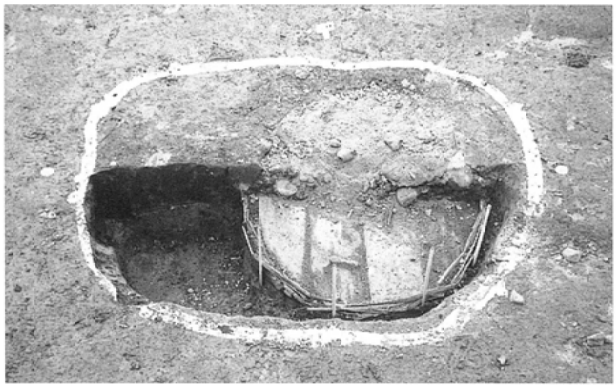
D3区土層断面②（西から）

D3区遺物出土状況（北から）

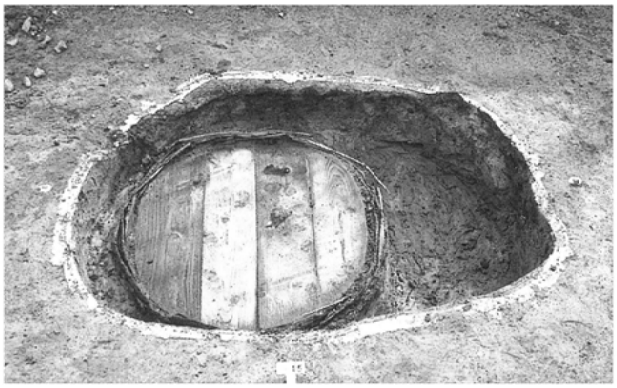
第2次調査

SK201土層断面（南から）

SK201完掘状況（南から）



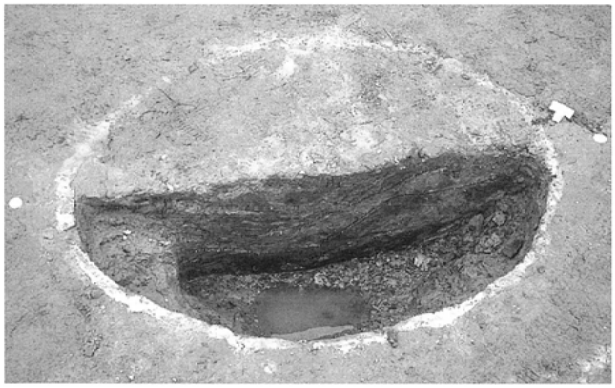
SK215土層断面（東から）



SK215完掘状況（西から）

SK221土層断面（東から）

SK221完掘状況（東から）

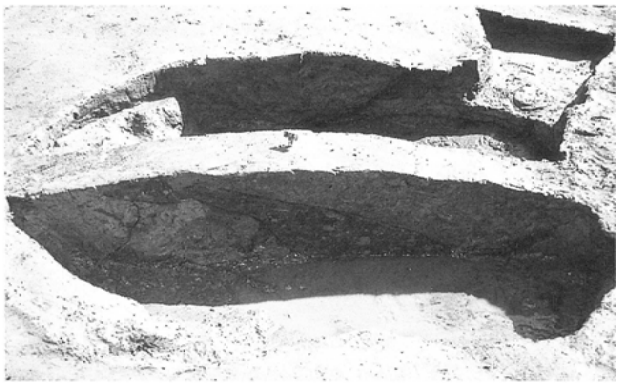


SK248土層断面（南から）

SK225土層断面（南から）

第2次調査

図版16



SK241土層断面（西から）

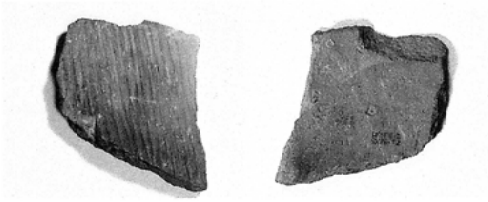
SK259・SK260土層断面（西から）

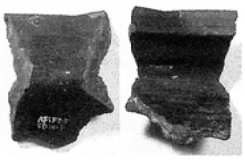
SK254土層断面（東から）

SK230完掘状況（東から）

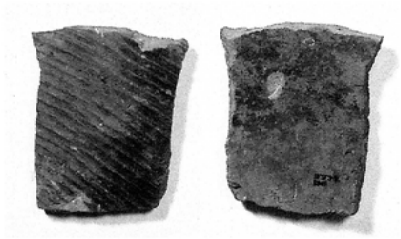
C1区完掘状況（西から）

第2次調査

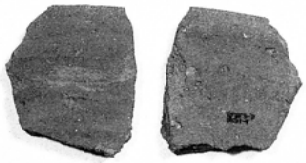

19-1


19-4

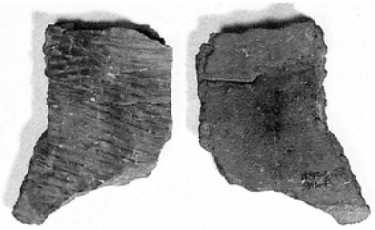
19-5


19-2

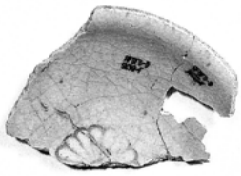
19-6

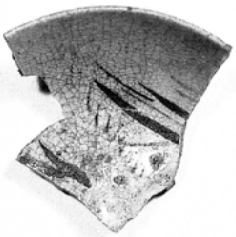

19-7

19-9


19-3

19-10

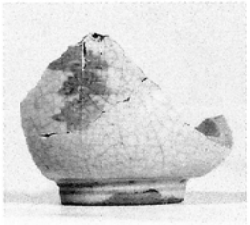

19-12


19-11

19-13

19-8

20-15


19-14

20-16

20-17

20-18

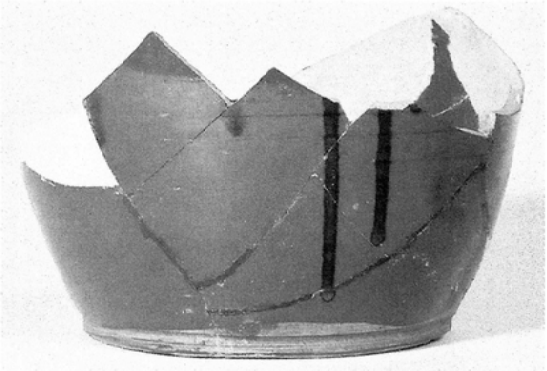
20-19

20-20

20-21

陶　器（1）

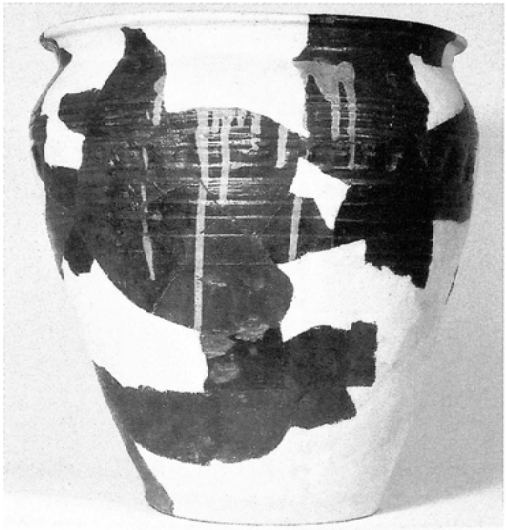
第1次調査



20-22 (1/3)

20-24 (1/6)

20-23 (1/3)



21-25

21-26

21-27

21-31

21-32

21-29

21-28

21-34

21-30

21-33

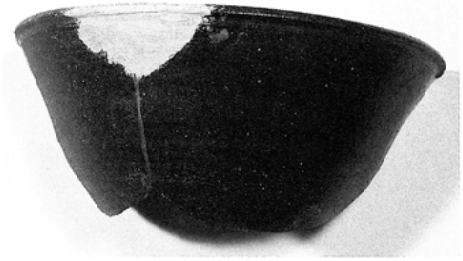
21-35

陶　器（2）

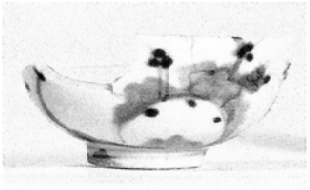
第1次調査

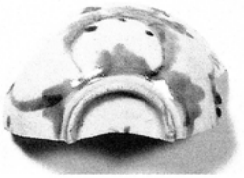
21-36

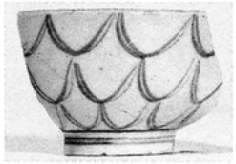
21-37

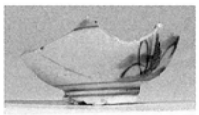

21-38

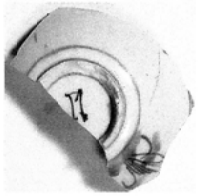
22-48

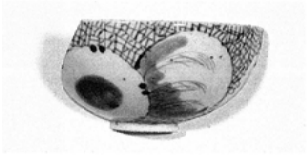

22-49

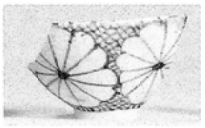



22-50



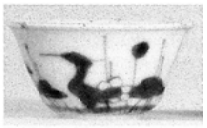

23-56


23-57


22-39

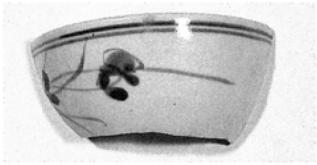
22-40

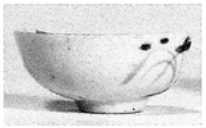
22-41

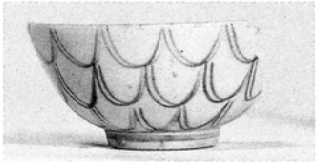


22-42

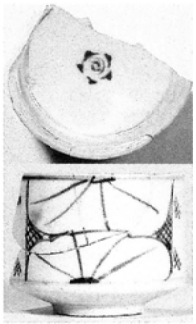
22-43


22-47

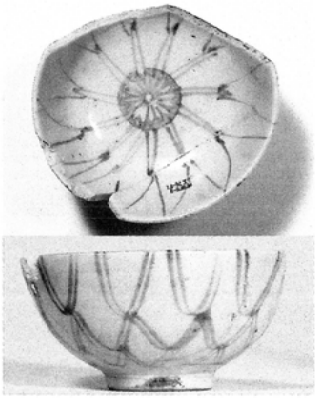

22-44

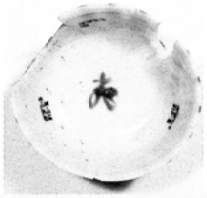

22-51

22-52

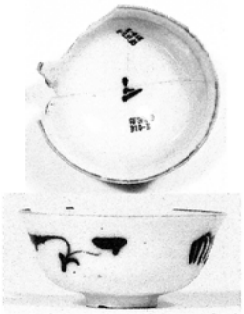

22-53

23-58

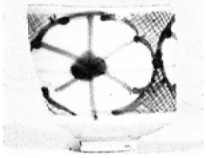

23-59

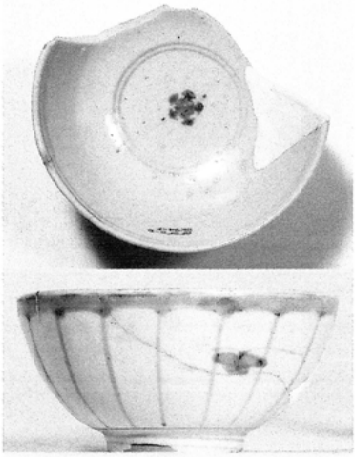


22-45


22-46

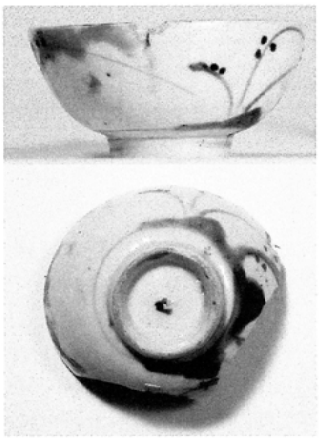
22-54

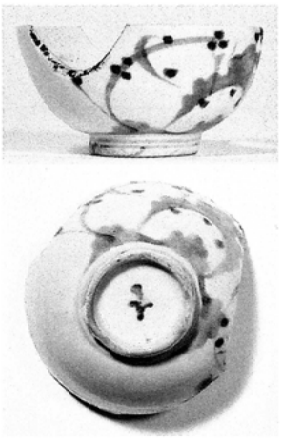

23-55

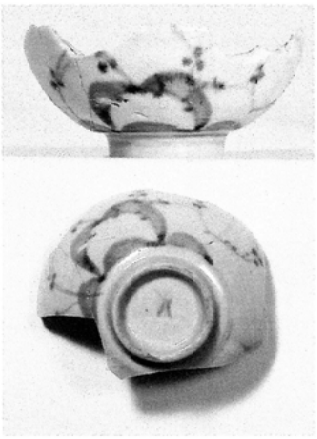

23-60

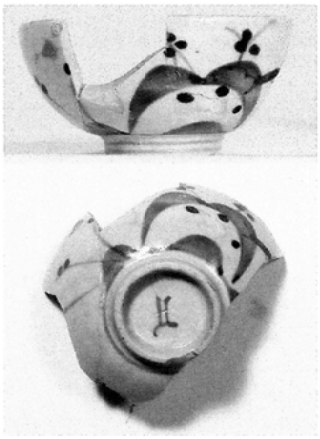
陶器（3）磁器（1）

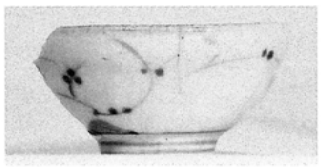
第1次調査

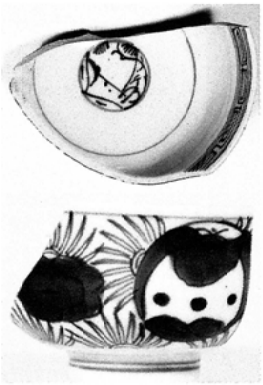

23-61


23-63


23-64


24-65


23-62

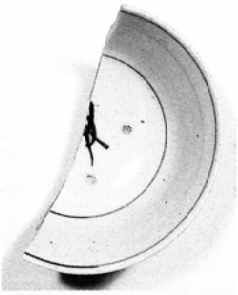

24-67

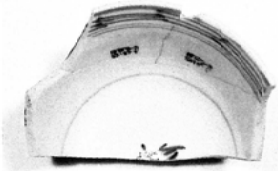
24-68

24-69

24-66

24-71





24-70

24-72

25-73

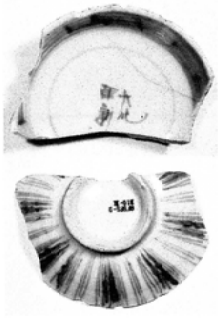
磁　器（2）

第1次調査

25-74

25-75

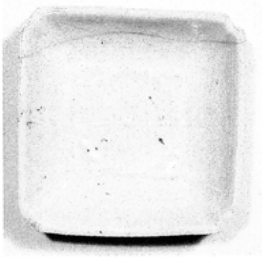
25-76



25-77

25-78

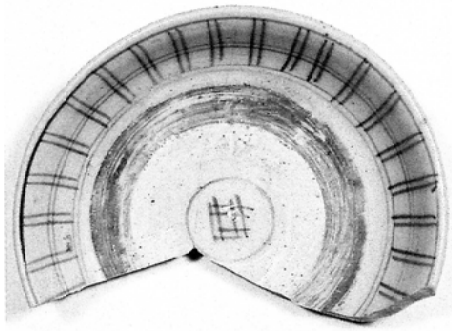
25-79



25-80

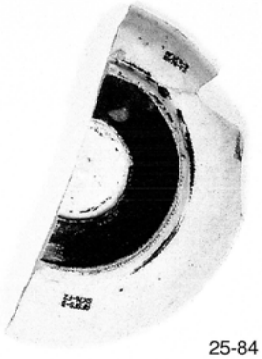
25-81

25-82



25-83

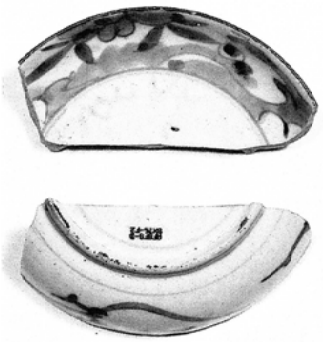
26-85



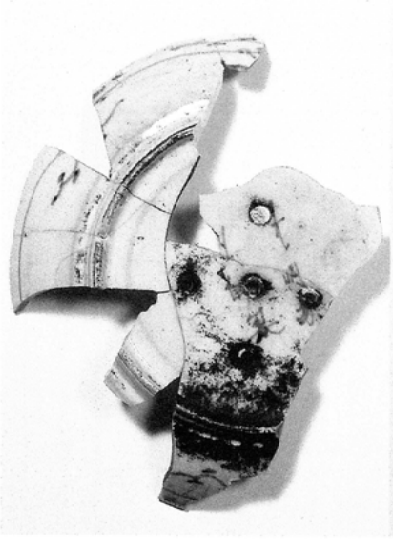
25-84

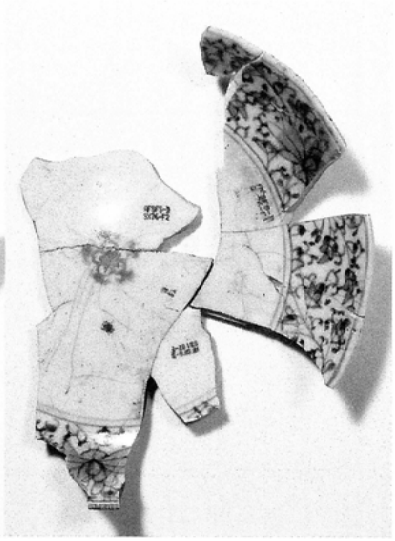
磁　器（3）

第1次調査



26-86



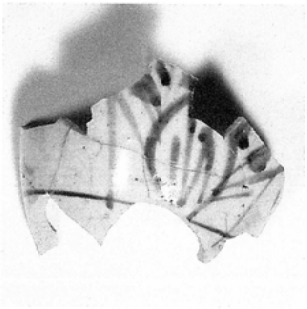


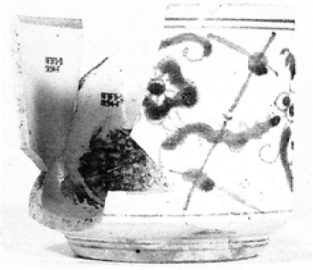
26-89

26-87

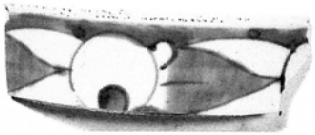
27-91　27-92　28-93

26-88





28-95

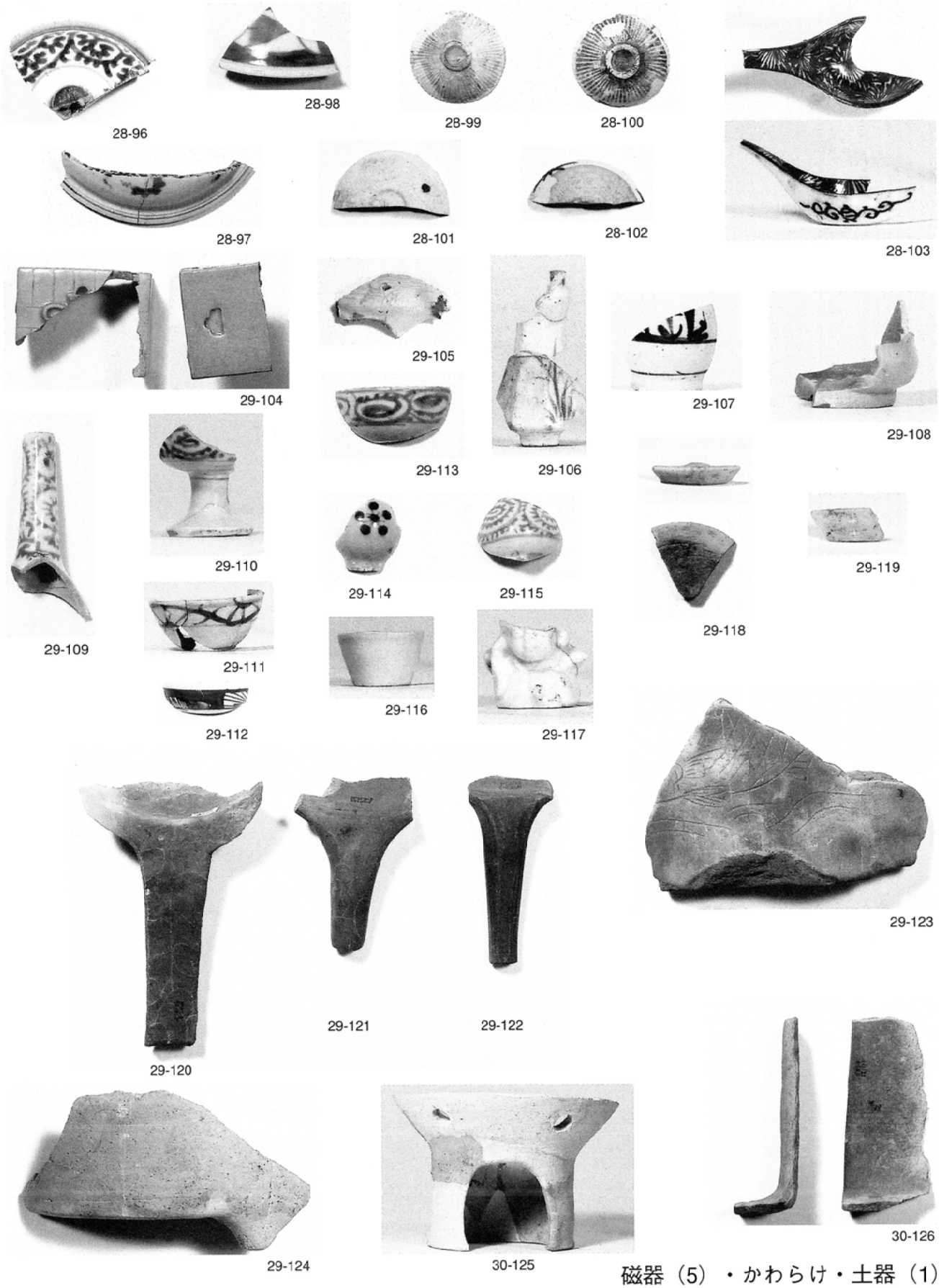


26-90

28-94

磁　器（4）

第1次調査

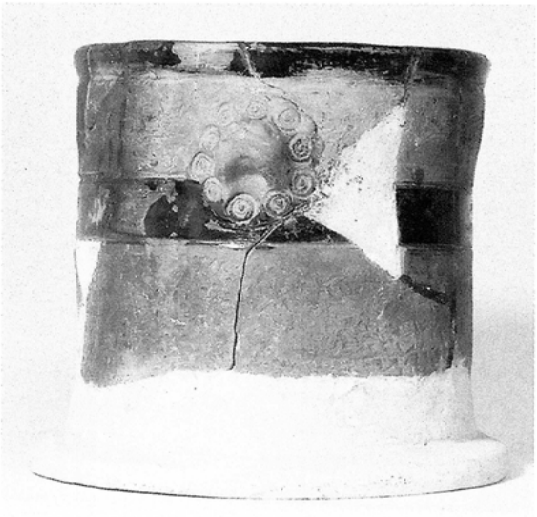


磁器（5）・かわらけ・土器（1）

第1次調査

30-127

30-129

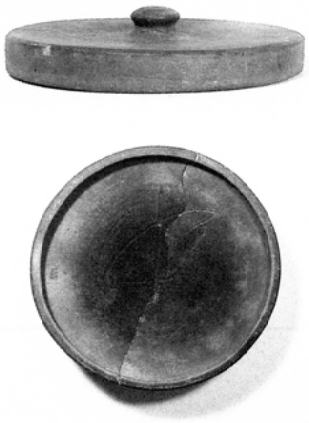


30-128

30-130

30-131

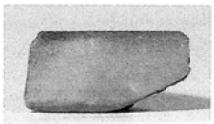
30-132 (1/6)



30-134 (1/6)

30-136

30-133



30-135

土　器（2）

第1次調査

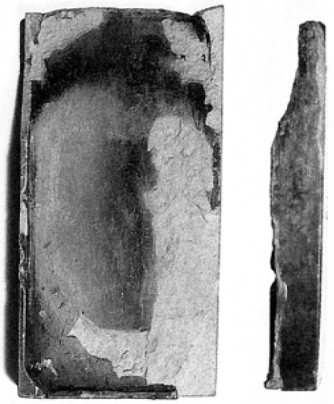
30-137 (1/6)

30-138

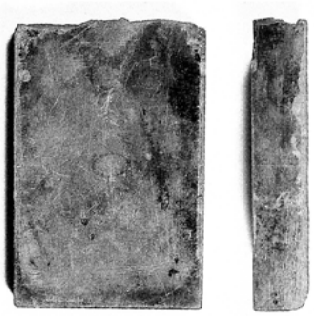
30-139

30-140

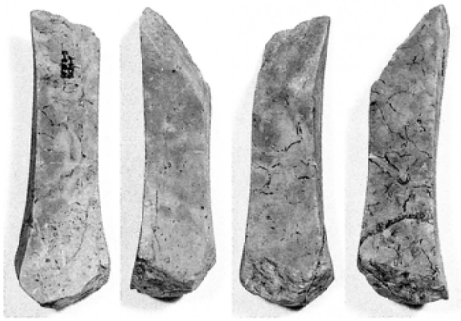
30-141



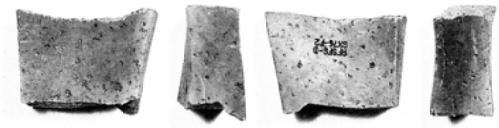
30-142



30-143



30-144



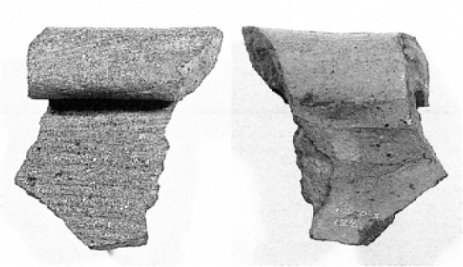
30-145

30-146

30-147 (1/1)　30-148 (1/1)

土器（3）・土製品・石製品・貨幣

第1次調査



32-1

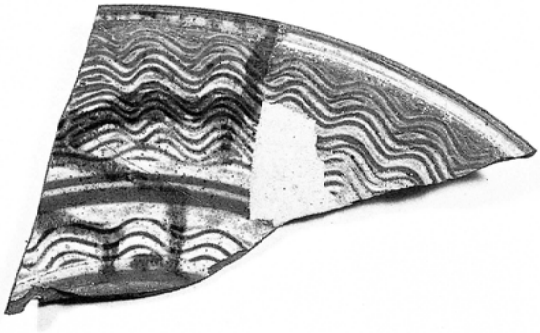
32-2

32-3

32-5

32-6

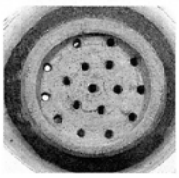
32-4



32-7

33-8（1/6）

33-9（1/6）



33-10（1/6）

33-11（1/6）

33-12（1/6）

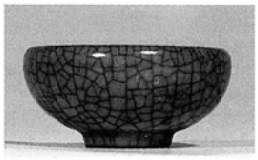
33-13（1/6）

陶　器（1）

第2次調査

33-14（1/6）

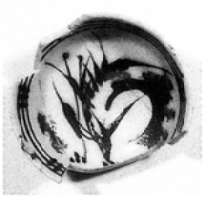
34-16



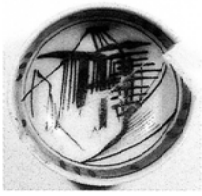
34-17

34-18

33-15（1/6）

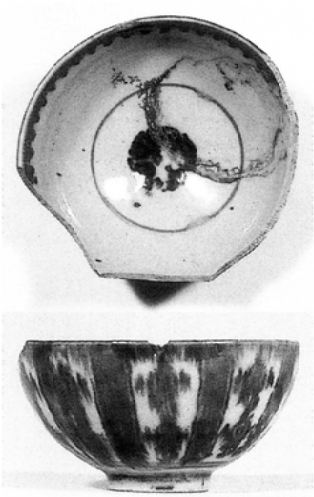


34-20

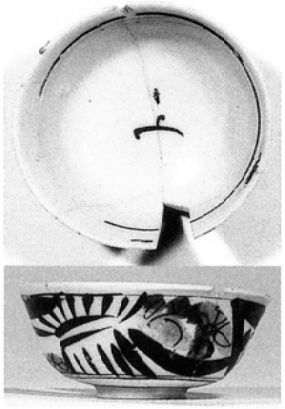


34-19

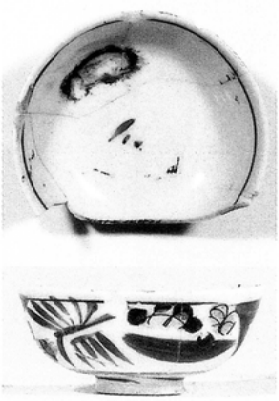
34-22



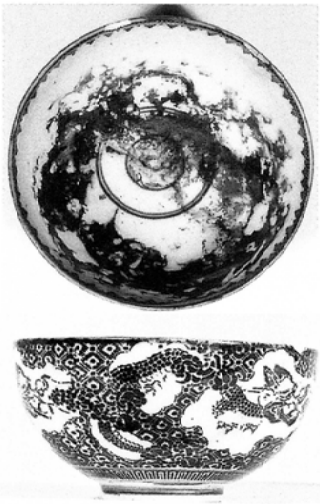
34-21



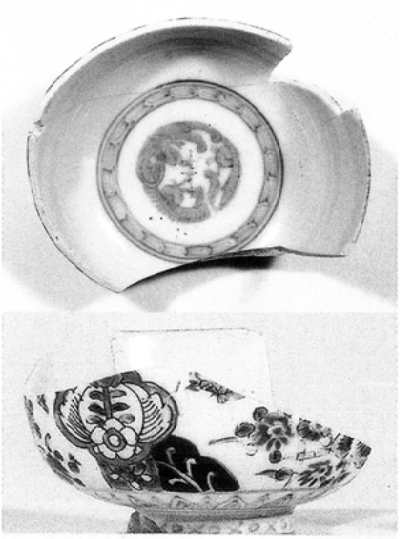
35-25



35-26



35-27



34-23

34-24

35-28

陶器（2）・磁器（1）

第2次調査

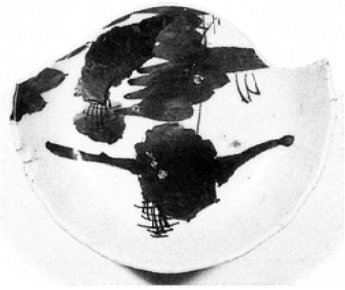
35-29

36-30

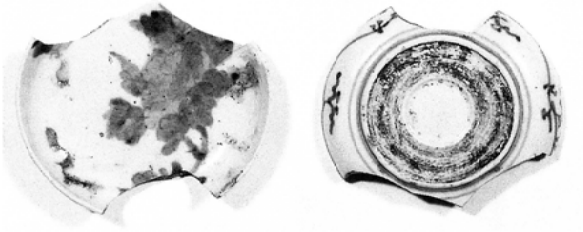
36-31

36-32

36-33

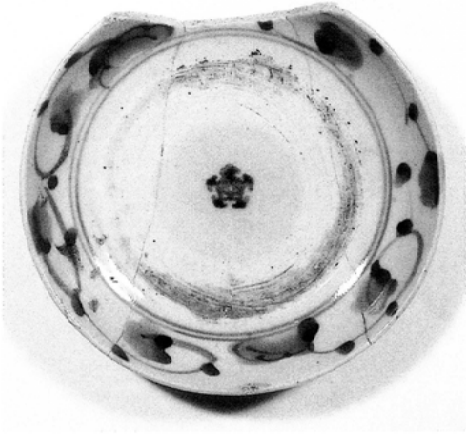


37-38

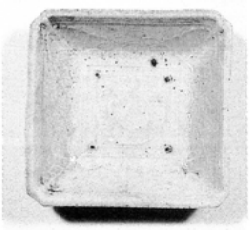


36-34

36-35

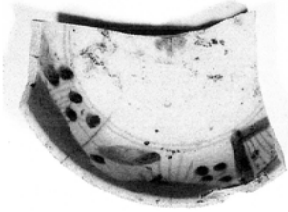


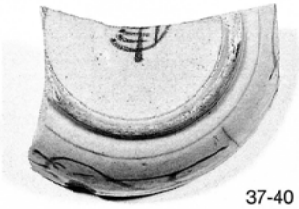
37-39



36-36

36-37

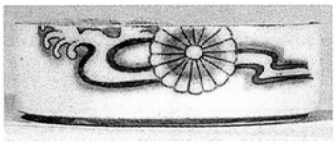




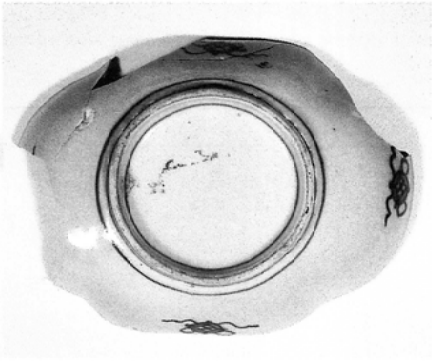
37-40

磁　器（2）

第2次調査

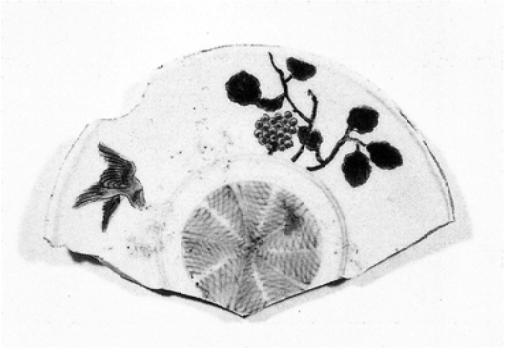


37-41

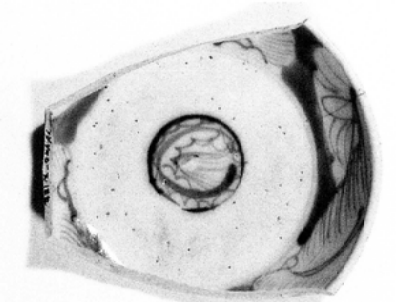


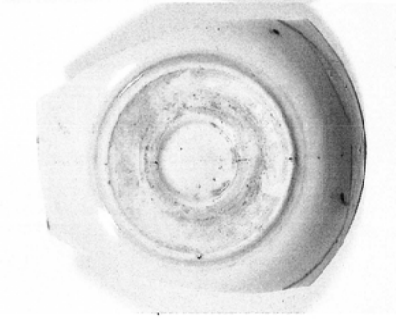
37-42

37-44

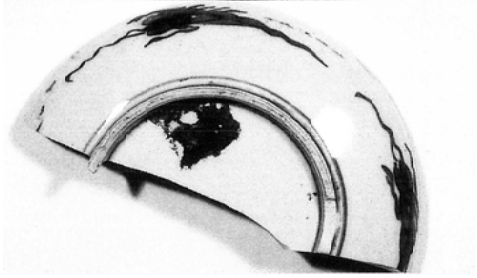


37-43





38-45



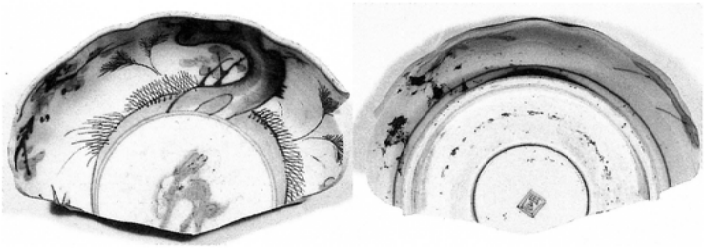
38-46

磁　器（3）

第2次調査

図版30

38-47



38-50

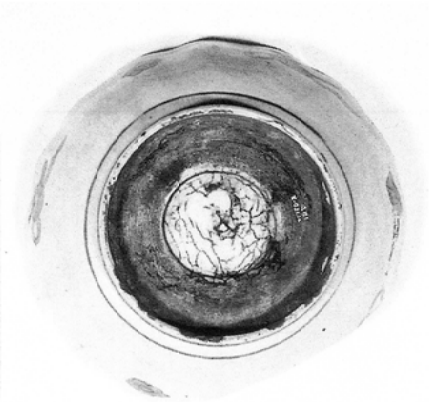
38-48

38-49

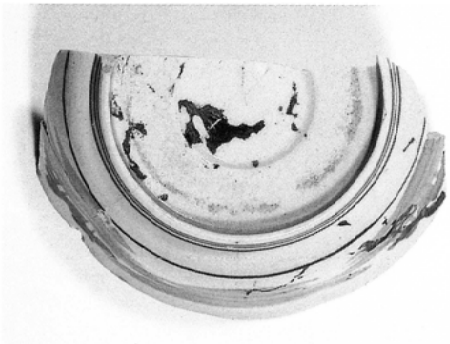
39-51

磁　器（4）

第2次調査



39-52



39-53

40-55

40-56

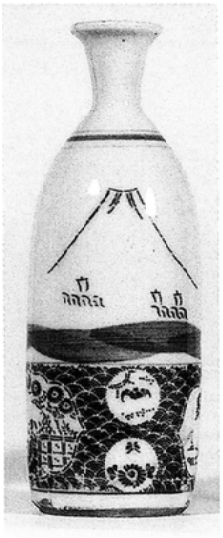
40-54

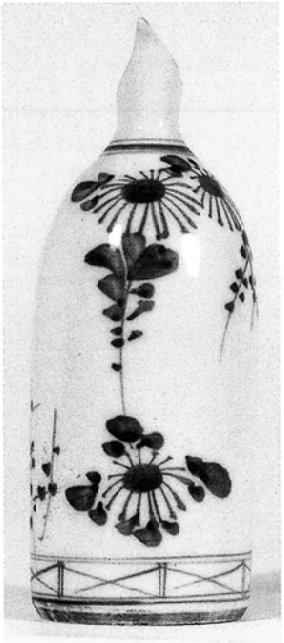
40-57

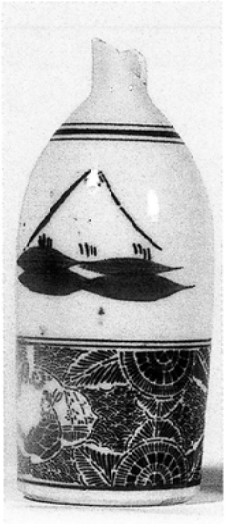
磁　器（5）

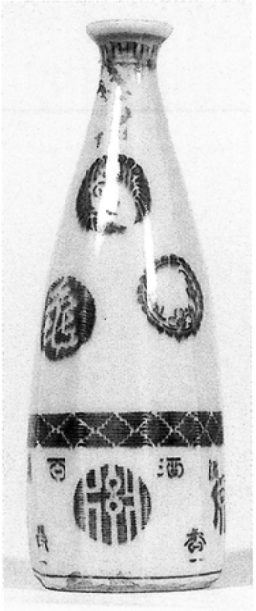
第2次調査

40-58


40-59


41-60


41-61


41-62

41-63

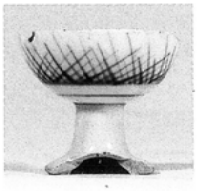
41-64

41-65

41-66

41-67

41-68


42-69

42-70

42-74

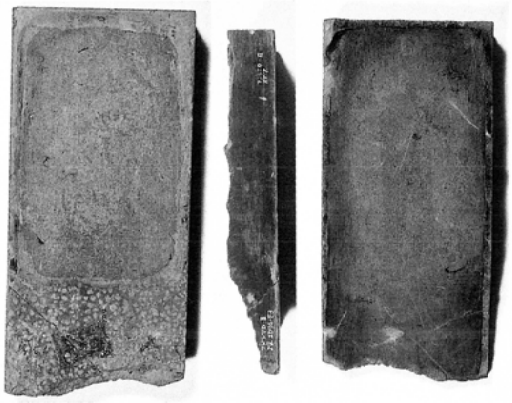
42-71

42-73

42-72

42-77

42-76


42-75

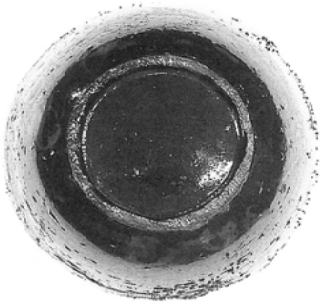
磁器（6）・土器・石製品・骨格器

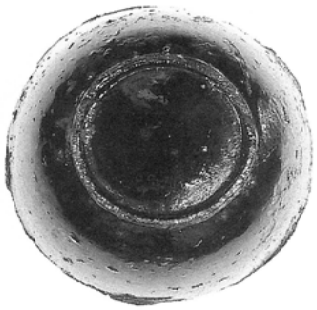
第2次調査

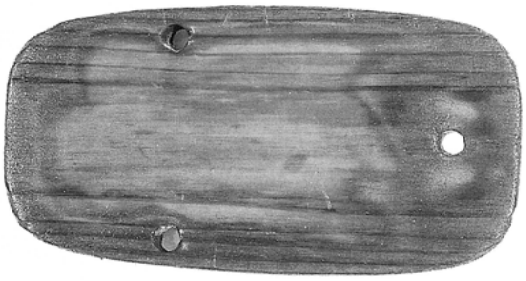
43-1

43-2

43-3

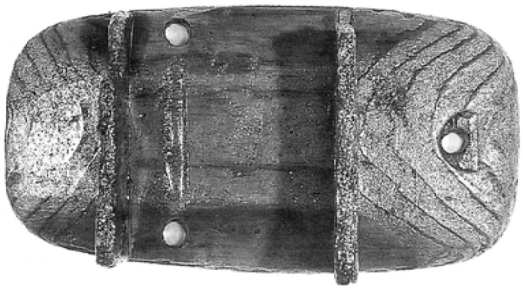


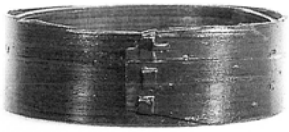




43-5

43-4





山形県埋蔵文化財センター調査報告書第82集

藤島（ふじしま）D遺跡遺跡発掘調査報告書

2001年３月31日　発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161
山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023－672－5301
印刷　田宮印刷株式会社